
呪剣戦争の秘訣

アスハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪剣戦争の秘訣

【Nコード】

N8399Y

【作者名】

アスハル

【あらすじ】

『人類にとつての試験^{テスト}』と称された化け物に対抗するため、呪われし剣『呪剣』と契約し、戦い続ける子供達の話

【ホームルーム】（前書き）

某どこぞの大賞で落選的なことになった長編である。

ネタだけにはわりかし自信があつたのだが、

その大賞のHPで「サクラサク」となりの呪剣聖」なる短編が掲載されていることを知る。

ネタ被つてたのか、そりゃあアカンはと考えてここに掲載することにした。

パクりじゃないよ、同時期に同じ電波が降ってきただけだよ、と言
い訳するためのもの。

でも割と面白いよ（たぶん）

【ホームルーム】

【ホームルーム】

「これは、君たちの為でもあるんだ」

それが、彼の口癖だった。

「僕が君たちに施しているこの研究課程は画期的なものだ。成功すれば、君達は既存の呪剣聖じゅけんせいなぞ比べ物にならない、強大な力を手にする。呪剣戦争の革命だ。優れた国家は、優れた呪剣聖が作る。それはこれまでも、これからもだ」

冷たい風の吹く場所で、男はぽんと目の前の子供の頭に手を置いた。それだけなら、まるで親が子を慈しむような、優しい仕草だ。しかし、男の眼には、露ほどの柔らかさも無かった。

その男　白衣を纏った線の細い男は、しかしまるで、瀕死の兵士が最後の抵抗をする時のような瞳で、目の前の子供、まだ年端もいかない少年を見つめる。

「我が国は力の国だ。諸国の王だ。そして、王者は王者であり続けなければならない。分かるな。君たちが次世代の呪剣聖の成功例となれば、誰もが幸せになれるんだ。そう、たとえ君のような落ちこぼ　「言葉を止める。」　少しばかり、能力に不備がある者でも、だ」

それは、まるで言い訳をしているようだった。言い聞かせているようだった。

「そう　呪剣戦争は、みんなが幸せになれる道なんだ」

少年に、ではない。男の声音には余裕が無かった。不安ばかりがあった。男は、少年に語りかける形で、自分に言い訳をしていた。自分の心に、言い聞かせていた。自身の行動が正しいのだと。逆説的にそれは、男が現状に疑問を持っていることへの証左でもあった。

男の視線を受けて、少年が口を開く。

「はい、分かっています。国を支える優秀な呪剣聖となる。それが私の役目です」

それは、幼い子供の発するものとは思えない、ただの反響現象のような声だった。言い訳するまでもなく、言い聞かせるまでもなく、最初から彼には自我だとか選択肢だとか、そういうものは無かった。

男は、少年の全てを持っていた。

男は、少年の全てを奪っていた。

「……そうか。なら良い。カリキュラムはまだ続く。校舎に戻るぞ。ここは冷えるからな」

男は少年のいつも通りの答えに、ひとまずは安堵したように頷いた。何十回と繰り返されたこの不毛極まりないやり取りは、それでも男にとって気休め程度にはなっていた。

「はい、了解しました 先生」

少年もまた、色の無い声で返事をする。

荒廃しきった風が、二人を撫でた。

男が身を震わせ、足を速める。少年がそれに追隨する。それきり一言も言葉を交わさずに、二人の人間はこの異様な場所から姿を消した。この場所を去ることに対する未練や躊躇などは、欠片ほども見せずに。

もしも、の話をしよう。

現実には到底あり得ない、ＩＦの話だ。

もしも少年が、彼が訪れたこの場所が何なのかを知っていれば。

もしも少年が、地面に整然と突き立つたたくさんの十字架という、

その光景の持つ意味を知っていれば。

もしも少年が、それらの十字架に刻み込まれた、つい先日まで少年と同類だった者の名前に気付いていれば。

ここが、落第者達の行き着く先だと気付いていたら。

『では先生。ここにいる彼らは、幸せになれたのですか？』

そう問うことが、出来ていれば。

もしも。

もしも、もしも、もしも。

もしもそうであったとしても ここにいる彼らには何の関係も
無いことだ。

これはそんな、取り返しのつかなくなった少年の物語である。

一時間目【礫土（れきじ）】

ルークハイス皇国。その国風を一言で表すなら『自由奔放』である。

現在、この大陸ではいくつもの国家が覇権を狙い鎬を削り合っている。

クゾファイダ帝国、ワクタ・シツリ連合王国、セーテージ、聖ク
ミッシェンステイツ
エンガ教導国家。

それら諸各国が、テストに対抗する傍ら覇権を狙うこの呪剣戦争の時勢において、ルークハイスの呪剣聖への管理は、言ってしまえば非常に緩い。

呪剣聖は唯一テストと拮抗する存在であり、通常兵相手なら一軍にすら匹敵する個人である。その過度な力を制御する為、住居を制限し、許可が無ければ呪剣すら抜けない国家がある一方で、ルークハイスは最低限の規則があるものの呪剣は持ち歩けるし住居もある程度の自由が許されている。それでいて、その国力は大帝國クゾフイーダに次いで二番目だというのだから不思議なものだ。……あるいは、だからこそ、というべきかもしれない。頂点の重圧も底辺の焦燥も無い位置というのは、存外気楽なものなのだから。

「よっ……つとと」

ミドの家がある街『クスノキ』は、ルークハイス皇国の北東に位置する城塞都市であり、ミドの所属する呪剣聖第三部隊C教室（通称三C）が治める街でもある。

その中心部から一歩離れた、しかし郊外というほどでもない家でミドは暮らしていた。一人暮らしには十分な一軒家、元々は彼女の家が遊ばせていた別荘である。

自分の部屋のベッドに少年を寝かせ、ミドは大きく溜息をつく。

聖服の上着は脱いだシャツ姿。ベッド脇に置いた椅子に座り、肘をつく。

「……連れて来ちゃったよ。どうするのよあたし」

そう言うなら最初から連れ込むなという話である。通常兵に引き渡してもよかったのだが、なんとなく気が引けてしまった。あの新兵の件でちよつと空気を悪くしたのもある。

「でも……」

見下ろす。傷口に巻いた包帯に、ほんの少し赤色が滲んでいる。

派手に血が出てはいたが、少なくとも命に関わる怪我ではない。はずだ。テストに襲われたのだろうが、よく助かったものだ。結局、報告された森の中のもう一匹のテストは見つからなかった。

「……………あ」

少年の口が、ぴくりと動いた。思わず身を寄せる。目が覚めたかと思ったが少年は、身じろぎ一つしないままに、何やら寝言を呟いている。

聞こえづらい。そのまま、少年の口元に耳を寄せて、何を言っているのかに集中して

「ミードっ！ 久しぶり、元気してたー？」

ずっぱーんと音を立てて、部屋の窓が 窓が、派手に開けられた。ミドは首だけ傾けて、鍵が開いているのをいいことに部屋に直通でやってきた闖入者を見る。といってもまあ、その行為と声で誰かは分かる。

「おっはよシーナ。皇都に行つてたんじゃなかったっけ？ それと、窓から入って来るのいい加減やめてよ。一昔前の幼馴染じゃないんだから」

「気にしない気にしないーい」

靴を屋根に置き残し、絨毯の敷かれた床に降り立ったのは、眼鏡を掛けたセミロングの髪の少女だった。ミドと同じ聖服の上着をラフに羽織り、その下のシャツ越しには、溢れんばかりに豊かな双丘がその存在を主張している。

「ついさつき帰って来たところ。久しぶりにあたしの可愛いミドの顔を　え？」

しかし、柔和な笑みを見せて部屋に入ってきた彼女の表情は、あり得ないものを見たかのように凍りついた。

「ん？」

そこで、ミドは初めて現在の自分の状態に気付いた。

ベッドの上に寝ている少年の上に覆いかぶさり、その口元に顔を近づけているミド。　ちなみに、ここまで描写しなかったが、包帯を変えやすいように少年の上着は脱がせている。

「……………」

何も言わず、ふっ、とシーナは笑った。普段の快活なものではなく、親が子を見るような、穏やかな笑み。そのまま彼女は速やかに携帯端末を取り出し、コール。

「あ、もしもし、ふくちょー？　今すぐ告語で3Cの皆に回してくれます？　ミドが部屋に男連れ込んだ。割と美少年」

「ちよつと待って！？　それ誤解！　誤解だつて！　誤解誤解誤解！　」

「今何回誤解つて言った？」

「五回！　……って何言わせるんだよ！」

そんな突っ込みをしながら、弾かれる速度で飛びかかり、端末を奪おうとする。

「こら、やめなさいって！　大丈夫！　ミドってば初心な顔してるけど年頃の女の子だもんね！　仕方ないのよお姉さん分かってるから！」

「何一つ分かってないよ！　誤解だよ偏見だよ！　思春期の男子と一緒にすんなー！」

「それも偏見じゃない？　ああでも、愛しのミドをぽつと出の見ず知らずの男に取られるなんてわたし……燃える！」

「燃えんな！　いいから大人しくそれ頂戴！」

どったんばったん。半ば遊び始めたシーナと必死のミド、一本の

携帯端末を巡って繰り広げられる壮絶かつ無意味な争いが、クスノキのど真ん中で平和極まりなく繰り広げられていた。見る者がいないというのが救いといえば救いか。

「つて、あれ？ あれ？ ちょ！」

「うふふふ。抵抗するミド、マジ可愛いかも。はすはす」

「ぎゃー！？ 離せこの変態！」

そのうちにいつの間にか攻守が逆転していた。シーナがミドの両手を抑えて押し倒している。ここまでの攻防で二人の衣服は乱れ、それはあられもないことになっていた。真っ昼間から一体何をやっているのか。しかし突っ込むものはいない。……いや、正確には、全くないというわけではなかった。

ぐ。と。布団を押しつけ、少年が体を起こした。

「あ」

まずミドがそれに気付き、シーナもそれに続いた。少年は、ガラス玉のような目で部屋を見回す。一通り見渡した後、やがて視線を、ぴたりとミドに止まる。

シーナに組み伏されネクタイを解かれ、半分涙目のミドを見て、

少年は開口一番。

「栄養、水分、食物が不足しています。食物か水を要求してもよろしいでしょうか」

「この状況完全無視！？」

「成程。そうだったのですか。改めて、助けて頂いてありがとうございます」

表情を変えず、少年が頭を下げた。たまたま残っていたパンと牛乳は、彼の体の中にひどく機械的に吸収されていった。少年の食事の間、ミドは彼とシーナに向けて説明をしていた。テストを討伐した後、森で彼を見つけたこと。ここがルークハイスのクスノキであること、自分が呪剣聖であること。それを聞き終わった少年から返

ってきたのが先程の台詞である。

「体の方は大丈夫？」

「はい、問題ありません」

こくり、と頷く少年。

「……それで、貴方は何なのかしら？」

シーナが、一歩離れたところから、あからさまに警戒した様子で少年にそう訊く。

「どうしたのさ、シーナ」

「そりゃ、純粹だと思ってた友達がいきなり身元不明の男連れ込んでたら警戒するわよ。……べ、別にあとちよつとでどさくさまぎれにミドの貞操奪えたのにとかそんなこと考えてないんだからねっ！
？ 勘違いしないでよね！」

「何故ツンデレるし！ ていうか本当良かったあの子が起きてくれて……」

そこでふと、言葉に詰まる。

「えーっと、そうだ君、名前は？」

「……名前ですか？」

当然返ってくると思えた問いかけに、しかし少年は逆に首を傾げた。

「どうしたの？」

ここまで、ほとんどの問いに即答で返してきた少年は、そこで初めて思考する仕草を見せた。やがて、小さな声で言う。

「ありません」

「え？ まさか、本当に記憶が……？」

森の中で彼が呟いていたことを思い出す。だが、少年はすぐに首を横に振った。

「いいえ、私は記憶喪失ではありません」

「……確かに、あんまり喪失っぽくは見えないけどさ……」

こんなに言動がはつきりしている記憶喪失というのも妙な話だ。が。少年は言動こそ機械のように正確だが、妙に焦点の定まってい

ない眼といい、どこかとぼけているような、世間とズレているような印象がある。

「じゃあさ、親とか家族はどこにいるの？」

「分かりません」

「どうしてあんな森の中にいたの？」

「分かりません」

「自分の名前は？ 家はどこにあるの？」

「分かりません」

「……記憶喪失じゃないの、それ？」

いいえ違います、と再び少年は否定する。むきになっ
ていとう風はなく、あくまで冷静に。しかしどのみち、忘れていようとい
なかつた、今までの問いに答えられないというだけで、ミドにと
っては十二分に面倒な状況だ。

「なによそれ……」

「おうちゝを聞いても分らない、名前ゝを聞いても分らないゝ。にやんにやんにやにやにやんにやんにやんにやんにやにやん」

「歌うな！」

「家も名前もない子とにゃんにゃんしようだなんて……なんて教育に悪い歌なの……？」

「教育に悪いのは間違いない。君の頭だよ！」

「で、まじめな話。どうするの、ニド？ 里親探しでもするつもり？」

椅子の背もたれの部分に寄りかかるように座りながら、シーナがそう問いかける。記憶喪失と聞いてから、少年に向けていた猜疑の目はより一層深まったようだった。ぴ、と彼女は少年を指さす。

「あんまり世話するのは推奨できないわ。こつ言つては何だけど、すつごく怪しいわよ、貴方」

「ちよつと、シーナ……」

「はい、自覚はあります」

「つて」

庇おうとしたところをあつさりと当人に肯定され、ミドの言葉がつんのめる。

さつきからそうだ。彼は、敵意ある無しにかかわらず、自分への言葉に対し、まるで他人事のように正確な答えを返す。それに訝しみながらも、シーナが続ける。

「……自覚があるなら話が早いわ。あなたが単純に悪人であるか。結果的にわたしたちに害を与えるか。ぱっと思いつくのはこの辺りだけど、そのへんどうかしら？」

「私は、私の自己の詳細を提示出来ていません。それでは、判断に有効な友好関係、ニアリーイコール信頼を築くことも難しい。ゆえに、貴方がたが読心能力などを持っていない限り、私の言動の真偽を保証することは出来ません。」

総合すると、貴方たちに対して、私の持ついかなる語彙を以てしても、危険であることもその逆も保障出来ません」

自分をまるで貶すかのようなその態度。それが、なんとなく気に入らなくて。

「……そうね、分かってるなら話は」

「いいよ」

だから、会話を遮って、そう言った。

「は」

言葉を聞き損ねた少年が首を傾げ、聞きとったシーナが眉を顰める。ミドは、少年の寝ているベッドに背中を預けた。本人を見ずに、簡単に言い直す。

「だから、しばらくはウチにいてもいいよって言ってるの」

「追い出さないのですか？」

「とりあえず……そうだね、ケガが治るまではあたしが世話するよ」

「ちよつと、ミド？」

ぶつちやけ、直感で判断した。

シーナの言うことも間違っていない。だが、それを判断する為の材料が、余りに少なすぎると思った。疑わしきは罰せずという奴

だ。

「それとも追い出されたいの？　もう春だけど、夜は結構冷えるよ？」

「それは困りますね」少年はミドの方を見て言う。「凍死、あるいは餓え死にすることは、最善ではありません」

「ミド、あのね」

「大丈夫だって、シーナ」

「ぴ、と指を一本立てる。決めたのは直感だが、何も思いついていないわけではなかった。」

「多分悪い子じゃないと思うよ？　死にかけてたんだし。ここまで助けとして放っておくのも後味悪いしさ」

「でも……」

それにさ、とミドは続ける。ほんの少しだけ、自虐めいた笑みを覗かせて。

「あたしが、もっと早くテストを見つけて、倒せていれば、この人は怪我しなかったかもしれないんだから」

「……………」

シーナは、いわく言い難い表情をした。何か言おうと口を動かして、しかし結局、溜息を一つ吐き出すだけに留める。

「仕方ないわね」

「ありがと。……ごめんね」

卑怯だな、とミドは思った。今ミドが触れたのは自らの傷口で、シーナもまたその傷のことをよく知っていた。こう言ってしまうと、シーナは断らないことを分かっていた。

「謝らないでよ。萎えるわ。あなたが頑固だつてことは知ってるし。……襲われたらすぐに言いなさい。すぐに飛んで来てそっ首叩き飛ばしてあげるから」

「あはは、そんなことないって」

「ミドの方から襲うつていうパターンでも駄目よ!？」

「そのネタ引つ張らないでよ!」

顔を赤くするミドに対し、はあ、と溜息をついて、ふいとシーナが話を戻す。

「……ま、ミドがいいって言うならそれでいいわ。その、名前の無い子」

「はい」

「ミドに免じて今日のところは見逃してあげるけど。もしもミドに怪我させたら、その済ました顔をワンダーランドにしてあげるわよ」
「そのような必要性は現段階では存在しませんが、了解いたしました」

「良し。……じゃあミド、わたしはこれからちよつと用があるから。また暇が出来たらお昼でも食べに行きましょう」

「あ、そうだったの？ じゃあねー」

シーナはその言葉を最後に、靴を取ると扉を開けて出て行った。出る時は扉を使うのだった。だったら入る時も使えとミドは思う。少しばかりの沈黙の後、ふう、とミドが脱力する。

「……シーナ、思いつき警戒してたなあ」

ミドが呟いた。そこまで警戒するほどじゃないと思うんだけどなー、と少年を見る。

「君、悪い奴？」

「現時点では何も言えません。しかし、あの方の警戒はもつともかと。むしろ、私としては安心しました」

「安心？」

オウム返しに聞き返したミドに、少年は流暢に言葉を紡いだ。

「はい。正直、まるで理解出来なかったものですから。シーナ様の言葉が無ければ、女性という生物は皆、貴方や？ 彼女？ のように、無条件の善意を行使するものなのか、と誤った判断を下すところでした」

「……………」

どうやらこの少年、無感情だが、無口というわけではないらしい。しかし、いくら饒舌でも、ミドには彼の言っている意味がいまいち

分からなかった。？彼女？？ シーナのことか？ いや、だとしたら文脈がおかしくなるし

「ねえ、それって」

「あ、そういえば」

扉がまた、がちりと開き、シーナが顔を出した。

「すっかり言い忘れてたわ。ミド、あなた、テスト倒したのに単位の提出してないんじゃない？ すっぱかすと、ふくちょー怖いわよ？」

じゃねー、とひらひら手を振って、シーナの顔が引っ込んだ。

「……………」

「ミド様？ どうかしましたか」

「やっぱ……！」

うああああ、とミドが頭を抱える。……先述の通りルークハイスの呪剣聖運用は極めて柔軟だが、必要最低限のことはある。たとえば、テストを倒した後に行う単位の提出などだ。

「君に気を取られて忘れてた！」

「さっそく被害がありましたね。申し訳ありません」

「いや、まじめに謝らなくていいけど！」

とりあえず、と上着を羽織りつつ立ち上がる。少年を一人で残しておくのはどうかとも思うが、まあいいやと納得させた。怪我もそこまで悪くは無いだろっし。

「ごめん、だからちよつと出かけてくる」

「ミド様」

「あとあたしのことは呼び捨てでオッケ！ それじゃ！」

ばたばたと走り出る音。一人残された少年は静かに身を起こし、床に足をつけて立ち、机の上に置いてある剣に目をやる。刃、鐔、柄。たったそれだけしか無い短剣だ。これと比べれば、まだ包丁の方が特徴があると思えるような、単純というより淡泊な剣。

それを取ろうと手を伸ばそうとして ふと、足下に何か光るものがあるのに気がついた。

割れた飴玉のような、小さな宝石の欠片。ミドがテストを倒し、得た物。

単位だった。

「ミド様！ 任務、お疲れ様です！」

「こんにちわ、そっちも頑張ってー」

門番の敬礼に片手で返しつつ、正門を通り抜ける。

クスノキの城。といっても、そこまで大仰な施設ではない。呪剣聖とその候補生、通常兵が使う訓練施設兼詰め所というのが本質である。守るべきは城ではなく街。そういった思想に基づき、有用には作られているが堅牢には作られてはいない、それがクスノキ城だ。日によっては一般に開放されることもあるほどである。

「おはようございます、ミド様。出席ですね。では、こちらの名簿にサインを」

というわけで、早々と出席を済ませてしまうミドであった。入口にいる男性に紙を差し出され、そこに自分の名前を書く。

「ん、これでいい？」

「はい。確認いたしました」

「じゃ、とりあえず、あとは副長のところに……」

「あ、ミド様。クジャ・クヤマ副室長に用があるのでしたら、少し時間を開けた方がいいかと」

青年が、ミドの呟いた言葉にそう続ける。

「何やら皇都から連絡が来ていたようなので」

「皇都から？ どうして？」

「私は事務員ですのでそこまでは存じ上げません。ですが何やら緊急の様子でお話しされましたから、今行っても、恐らく執務室には入れないと思いますよ」

とんとん、と出席の紙をファイルに挟みながら、青年はそう言っ

た。んー、とミドは、こめかみに指を当てて考え込む。

「そうなんですか？　だったらどうしようかなあ」

「暇を潰すなら図書室に新しい本が入荷していますよ」

「うーん……」

「そういえば、食堂のメニューも一新されましたが」

「行ってきますー！」

即座に踵を返して走りだしたミドの背中に向けて、受付の青年は呆れたように溜息をついた。

食堂では、多数の兵士が食事や雑談をしていた。

護りの要としての役目はあまり持たないクスノキの城だが、施設自体は非常に充実している。

呪剣聖が常駐する隊舎、呪剣候補聖たちが寝泊まりする寄宿舎。

屋内・屋外の鍛錬場に、それらと連動する医務室、補剣室。ミドは滅多に行かないが、図書館でもある。

この大食堂も、その内の一つだった。購買とも隣接しており、広々とした空間は、通常兵呪剣聖問わず、食事、相談から宴会まで、用途を問わない。

時間は二時を少し回ったところ。若干遅いとは言え、人はそれなりにいた。大抵は通常兵だが、ごく一部呪剣聖やその候補聖もいる。厨房の奥にいる、コック帽の男性に話しかける。ミドもここに配属されて長いので、だいたいこの従業員とは顔見知りだ。彼は、眉間にしわを寄せた顔でミドを見た。不機嫌そうだがこれが彼の普段通りである。

「おじさん！　新しいメニュー入ったと聞いて！」

「おじさんじゃねえ、俺はまだ二十代だっつてんだろ。……メニューならそこだ。季節モノを一新した、好きに頼め」

「おおーう……！」

カウンターの上にあるメニューを見てミドが目を輝かせる。吟味するように端から端へ指を移動させながら、目についたものを頼ん

でいく。

「とりあえずーあんみつパフェとー、抹茶アイスとー」

「デザートから頼むな、太るぞ。……そうだ、もののついでだが貴様」

何？ とミドが首を傾げると、男は表情を更に歪めて鬱陶しそうに視線を横に動かした。

「アイツを追い払え。見覚えは無いが、呪剣聖だろう？ さっきから迷惑なんだ」

男の視線を追ってミドが振り向く。

その先には、カウンターで働いている少女に執拗に話しかける、聖服姿の青年がいた。

「あ、あの、困ります……」

「いいじゃん！ カウンター越しじゃ味気ねえだろ？」

言い寄られているのはエプロン姿の少女。主に購買の方で働く従業員だ。曖昧な笑みをうかべて、両手を胸元に上げている。穏やかな気質の持ち主だが、少しばかり今日は笑みが引き攣っていた。

「シフトいつ終わるの？ 俺、外で待ってるからさあ。このエリート呪剣聖の俺様がだぜ？」

そしてそんな彼女を不躰に、一種高圧的なまでに口説いているのは、いかにも軽薄そうな金髪の青年だった。

姿こそルークハイスの聖服だが、腕にも首にも、じゃらじゃらといかにも高級そうな（そして無節操な）アクセサリがきらついており、腰にはこれまた見せびらかすような一本のレイピア。柄の先端に蒼色の聖石がついている。その呪剣にまで、一部の人間が携帯端末につけるストラップのような大量の飾りがついていた。呪剣聖だが、大分タチの悪い類のようだ。

呪剣聖は個人で大きな力を持つがゆえに、一種の特権階級にある。となれば当然、その地位に驕って、他者に対し傲慢になるものも多い。そしてそういう奴に限って、素の實力は大したことが無いのだ。ミドが動くのは早かった。

「あ、あの……」

「ちよつとお茶しようってだけだろ？ どうせ暇なんだから
「やめなよ」

畳みかけるようにカウンターに乗り出す青年の腕を抑える。振り返った青年は一瞬眉を顰めるも、相手が少女だと分かると宥めるような笑みを浮かべた。

「ん？ おいおい嬢ちゃん、積極的なのは結構だが、悪いがガキには興味無いんだ。後三年経ってから出直して」

青年が、ミドの頭を撫でようと手を伸ばす。両者の体格には、頭一つ分の差がある。そしてミドは、頭に置かれようとした手を、必要以上に強く払った。

ぱぁんと、乾いた音。

「そのお気楽なアタマは見習いたいもんだね。……どこの教室の所属？」

青年は、僅かに赤くなった自らの手を見て、笑みを消した。そこで初めて、ミドが腰に挿した漆黒の剣と、その鰐の部分に嵌まっている銀色の聖石に気付いたらしい。青年は改めて、一瞬消しかけた笑みをまた浮かべた。

「人の名前を聞くときはまず自分から」

「……あたしは」

「つつーベタな挨拶をするのも何だし、言ってやるよ」わざとらしく台詞を遮る。「3E 第三部隊E教室所属、受験番号073461、ユージン・クドー。ちよつど任務帰りで近くを通りかかったな。時期が時期だし、こうして加勢しに来てやったってわけだ」

青年 ユージンは、わざとらしくウィンクした。明るくも気安い笑顔。なるほど確かに女性に受けそうな風貌だが、その笑みはどこか見下すようなものに見えた。

そのうちに、周囲が騒動に気づき始めた。巻き込まれないようにと食堂を出て行くもの、興味本位で観察するもの。対応は様々だが、止めようとするものはいない。もとより、呪剣聖二人の間に割って

入れるものなどそうそういないが。

「……あたしはミド。ミド・カレキシ」

「カレキシ？ ……ああ」

その名前に、ユージンは素で驚いたようだった。一瞬眼を見開く。そして肩を竦めて目元を歪め、抜けた表情で挑発的に嘲笑った。

「なんだお前、《血雨》の人間か？」

「っ！」

その言葉に、ざわ、と一際大きく周りがどよめいた。馬鹿、と誰かが小さく叫び、別の誰かが顔を青ざめて息を飲んだ。

だが、ミドにはそれらの騒音は聞こえなかった。聞こえていなかったし、聞いていなかった。

滴る朝露のごとく滑らかな軌道で、ミドの掌が鞘を掴む。

「その名前で、」

挑発とは言え、あまりに気安く放たれたその言葉は、彼女にとつては禁忌にすら等しかった。

「あたしを呼ぶな ……！」

言葉が届くより先に刃が走る。刃が届くより先に純然たる殺気がユージンに向けて迸った。ユージンは予想以上の反応に若干慌てつつも、即座に腰のレイピアの柄に手を伸ばす。

だが予想以上にその居合いは速く躊躇いが無い。ユージンの笑みが消える、そしてミドの刃は彼の首元へ、ユージンの指は、レイピアのストラップへと伸び

「何をしている、馬鹿ども」

ミドの呪剣がすっぱ抜けた。

それはもう見事にすっぱ抜けた。円弧を描いてユージンの首元への至ろうとしていた刃は、軌道の半ばほどでミドの手から離れ、遠心力に従ってあらぬ方向へ吹っ飛んでいった。からからから、と床に落ちて回って止まる。すかされたユージンが、はあ？ と間の抜けた表情を浮かべた。

ミドは、空気中の水分が結露したのかという勢いで冷や汗まみれ

になり、声のした方　入口の方に、油の切れた車輪のような動作で振り返る。ユージンもそれに追従する。

「ふ、ふ、フク、副室長……」

「侵入者がどうのこうのと聞いたから出てみれば……もう一度言うぞ。何をしている、ミド・カレキシ。それにそっちの男は……3Eのユージン・クドーだったか」

食堂の入口に、彼女は佇んでいた。

一ミリの隙も無く着こんだ女子聖服。すらりと長い足は濃色のタイツで覆われている。先端が内側に丸まっているショートヘア。片眼鏡で覆われた眼の下には、小さく蛾の羽根のような刺青があった。「えっと、いや、その……」

「ちゃんとした修行を受けるのはいい。テスト対策の為の呪剣戦闘も、指定の場所であれば奨励されている」

かつかつと、音高くヒールを鳴らしながら、彼女は近づく

「だが、まさか城のど真ん中で私闘を　暴力行為を行おうとしてはいまいな？」

「す、寸止めしようと思……」

「当然だ馬鹿もの。場合によっては呪剣資格を剥奪するところだなあ」

少女の眼が、ユージンに向く。交錯の瞬間、思いつき教禍を發動させようとしていた彼は青褪めながら、しかし知らぬ存ぜぬと両手を上げた。

「……お、俺のことか？　どこから見てたのか知らねえが、仕掛けて来たのはコイツの方だぜ」

ユージンは気付いていない。周囲の兵たちが、蜘蛛の子を散らすように、食堂を後にしていることに。

彼女は、小さく「ちっ」と舌を鳴らし、しばらく二人を、研究者がかかるような片眼鏡の奥から、じっと二人を見つめていた。

それはもう一遍の曇りすらない、生ゴミでも見るような目つきだった。

「そうか、そうか。つまり、きみはそんなやつなんだな」

「「すいませんでしたぁー……っ!!」」

即座に謝った。ユージンにとっては突然の衝動だった。ミドにとっては当然の行動だった。ただ、それだけの眼力を、それだけの圧力を、この少女は備えていたのだった。

マユ。マユ・クジャ「クヤマ」。

呪剣《エーミール》を繰る、C教室の副室長にして、実質のトップである。

「これはこれは。会えて光荣です、マユ様。ところで何処で俺の名前を？」

「今更態度を繕っても遅いと思うがな、クドー」

「……………」

「軽い冗談だ。気にするな」

苦い笑みを浮かべたクドーに、マユはからかうような笑みを浮かべた。

「貴様が来た時、聖徒手帳を出しただろう。あれは私のところで一度確認している」

「……………そういえば、侵入者がどうのこうのという話はどうしたんすか？」

「呪剣聖やテストではないらしい。ならば一般兵の見張りで何とかするだろう。……まあ、ようこそ、と言っておこう。定期テストも近い。呪剣聖は一人でも多い方が良いからな」

マユは、そう言ってコーヒーを啜る。

「それでもあえて言わせて貰うなら、……………ここは3Cの管轄する街だ。あまり自由に振舞わないことをお勧めする」

「…………ラジャー。んじゃ俺は失礼します、副室長サマ」

明らかに慣れていない敬語を使いつつ、尻尾を巻いて、早々と逃げ出すユージン。足早に去っていく。マユは彼の後ろ姿 鍰の部

分に山とつけられたストラップに一瞬眼をやったが、すぐに目を外して前に向き直った。

「全く。あまり面倒は起こすな、カレキシ。時期が時期だ、ピリピリしているものも多いんだぞ。感情的になりやすいのはお前の悪い癖だ」

「す、すみません……。そっか、もう、テスト週間なんだ……」

ミドはやや委縮しながらそう答えた。

テスト週間。その名の通り、テストの発生数が飛躍的に増加する週間のことである。

テストの発生条件はまだ解明されてないが、発生の傾向は分かっていた。数力月に一度、空には赤い月が昇る。その時にテストは大発生し、街に押し寄せるのである。

その日 『定期テスト』の一週間前から、それこそ月が徐々に満ちて行くように、テストの発生数が少しずつ増加する。これがテスト週間と呼ばれるものだ。今朝ミドが倒した小テスト群も、そういったうちのひとつだろう。

定期テストの大群が襲うのは大都市であることが多い。人を殺し喰らうというテストの本質が、より多くの人のいる場所を嗅ぎ当てるのだと言われている。よって、この時期が迫ると、放浪している呪剣聖なども近くの都市に集い、テストの大群相手に防衛戦を展開するのだ。

「副長、そういえば、何か皇都から連絡があったんじゃないんですか？」

「ああ、聞いていたのか。……まあ、今の段階ではなにも言えんな。それよりもカレキシ、単位はどうした？」

「……あ、そういえば。えっと、確かここに」

登城した元々の理由はそれだった。うる覚えだが、確かポケットに入れたはずだ。

「あれ？ おかしいな、どこ入れたっけ……」

スカートのポケット。無い。胸ポケット。無い。バサバサ上着を

振る。無い。靴の中。ソックスの裏。あるわけがない。まさか、ここまでくる途中に落とした？　まずい、だとしたら、

「これですか？」

後ろから差し出される手。見ると、その掌の上には銀色に光る宝石の欠片のようなもの。

「あ、これこれ！　どこに落ちてたの？　ありがとー」

それを受け取り、気安くお礼を言いながら振り返るミド。

「ベッド脇に。憶測ですが、貴方が立ち上がったときに落ちたのではないでしょうか」

「へえー、そーなん、だ……」

ぴき、と。

振り向いたミドの表情が固まった。その反対側で、訝しげにマユが目細める。

薄青の上下。差し出した手は白く、まるで機械のように微動だにしない。ひよろりと高い背と、初めて見る安定した立ち姿は、まず脆さを、そして、その脆さの中にある、妙な芯の強さを感じさせた。「な、な、な……」

少年は何も言わない。無駄なことは一切口にしない。ただ、啞然とするミドと周囲を観察するように、僅かに視線を走らせるだけだ。他に誰がいよう。そこにいたのは、ミドが今朝助けた、記憶喪失の少年だった。

「何でキミがここにいるのさーっ!？」

ばん、と机を叩く。衝撃でスプーンが少しばかり零れたが、そんなこと気にしていられないほどの衝撃だった。

「ミドの落とし物を届けに」

「う……」

思わず混乱し爆発する寸前だった頭に、少年の、至って常識的な解答が冷や水を浴びせた。そう言われると、強く言えない。結果的に、家から城までの道筋を探し回らなければならなかった問題が解決されたのは確かだ。

「それは、ありがとう、だけど。……でも、家で待っててって言ったよね？ だいたい、よく入れたね、そのカッコで」

少年の服は、脇腹の部分に乾いた血がこびり付いたまま固まっていた。服があれしか無かったのだから当然だろうが、よく門番が通したものだ。

「問題ありません。たとえ門が開かれていなくとも、この世に人の通るだけの隙間の無い建造物など数えるほどしかありませんし、この建物は防衛用に建てられてはいない。塀もそこまで高くありませんでした」

「ふーん。……………え？」

少年の台詞は一種回りくどいまでに筋道だっている。なんととはなしに相槌を打っていたミドは、たつぷりと数秒かけて、少年の台詞の中にある違和感と、それが示すところの意味を理解した。

「ちよつと待って、君、もしかして」

「止まれっ、その男！」

「動くんじゃないぞ！」

同時に、食堂の入口から、二人分の叫び声が飛んできた。

「ぜーっ、馬鹿め、食堂に逃げ込むとはな！ はーっ、追い詰めたぞ、侵入者！」

「はあはあ……………よりもよってっ、呪剣聖と兵士が山ほど控えるこの城に侵入した度胸だけは褒めてやる！ ……おのれ、はあ、ちよこまかと逃げ回りおって……………！」

見ると、そこには、息を切らせた兵士が二人。一体どれだけ走らされたのやら、肩で息をし、槍を杖のように立て立っている。門番の二人だろう。

「ああ、追いつかれましたか。まあ、目的は達成しましたからよしとしましょう」

なんととはなしに放たれた少年の言葉に、ミドは自分の推測が正しいことを知る。つまり、

こやつ、不法侵入してきやがりましたよここまで……………

！？

「……ミド。誰だ、この少年は？」

「あ、えと、その」

視線を四方八方に行き交わせながら、ミドはこの状況を打破する方策を考える。

やばいよ副長めっちゃ見てる。めっちゃこっち見てます。やだもうそんなにこっち見ないで下さいよ照れるなあもう泣きそう。門番さん達も副室長いるなら大丈夫だとか言っただけを止めないで下さいよ。割りこんでこいよ副長に怒られるの怖いんだよ！？ だいたい何をやすやす侵入させてるんですかこんなひよろい奴に！ 誰ですかっ？ 森で見つけて拾ってきました。記憶喪失の人です。って言えるかあ！

完膚なきまでに混乱していた。

マユは、氷の眼で少年を見据える。状況を理解しているのかいなのか、少年の表情には動揺一つ見えない。病人が着るような簡素な服、血で汚れた部分の上から、ぶら下げられた短剣。マユは一瞬それを注視するが、すぐに離して少年と向き直った。

「君は、不法侵入したのか？」

「門を通らず中に入ることを全て不法侵入というのなら、そう表現できます」

「具体的には何処を？」

「少々、塀を」

「……安心していい、それは間違いなく侵入だ」視線を奥へ向けるマユ。「……おい、その門番二人。私は？すぐ捕まえる？？問題ない、些事だ？と、そう聞いていたんだがな。ここまで入って来られてか？」

入口にいる門番二人が、ひいっと竦み上がった。

「……名前と、身分を聞こうか。あるいは、所属でもいいが」

「名前ですか？ 申し訳ありませんが、私には」

マユの視線にも動じずに、あくまで冷静に少年が解答しようとし

て

「？フラット？！」

飛び込むように、ミドが台詞に割り込んだ。

ばばっと少年を庇うように手を広げ、背後に押しのける。

「……フラット？　それが名前か？」

「はい！　この人は！　フラットという名前で！　あたしの母親のおとうさんのいとこのはとこのお隣さんの息子さんで！　今日こっちにあたしを訪ねてきたんですけど！　田舎者だからここ入って来ちゃいけないとかいまいち分かってないみたいでつまりえと、あの、その、この、どの　ホントごめんなさい！」

頭を下げるミド。品定めをするように、マユが彼女と少年　ミドの言うところの、フラットを見比べる。

「ほう。……怪我をしているようだが、大丈夫か？」

「来るまでにテストにちよっと襲われたそうで！」

「その短剣は？」

「ただの護身用です！」

「　　そうか、そうか。つまり彼は、そんなやつなんだな」

鷹揚な動作で、マユは一度頷いた。フラットが無機質というならこちらは氷点下の声である。怖いのである。マジ怖いのである。今日は厄日なのか。どうしてこんな目に。むしろ何故庇ってしまってるんだあたし。冷や汗だらだらでそんなことを思っていると、マユが口を開いた。

「　　……まあいい」

「そこを何とか……えっ？」

即座に更に頭を下げて頼みこもうとしたところに、何やら、あり得ない言葉が聞こえて来たような気がした。

「だから、不問に付すと言っている。大した被害もないようだしな」

「い、いいんですか……？」

「何だ、そんなに処罰されたいのか？」

「いつ、いやいや！　そういうわけじゃありませんけれども！」

ぶんぶんと手を振る。だったらいいだろう、とマユは席を立つ。

「それと、この単位だが」

少年の持つ欠片を横目でじっと見る。ぱしりと奪うと、

「見た目通りクズ石だな。百個集めても聖石にはならん。ミド、お前が使え」

「はい、とミドに投げ渡す。

「あ、ありがとうございます……？」

「単位というのですか、これは。食べてもよろしいですか？」

「いや飴玉とかじゃないからね！　これ！」

訳の分からないことを言う少年をいなし、マユの言葉に未だ釈然としない気持ちを抱えながらも、ミドはすぐに呪剣を抜いた。その鍰の所にある聖石に、単位を呑み込ませる。宝石の欠片は、より大きな宝石に触れ、さながら湖面に沈む魚のように滑らかに同化した。

テストが落とす？　単位？　とは、呪剣の核である聖石の原料であり、良質のものは精錬して呪剣に使われる。しかし、それには使えないほど小さいものは、こうして聖石に呑み込ませることで呪剣の出力の向上などをもたらすのだ。

テストを倒し、単位を得て、自らの聖石を上昇させる。それが、一般的な呪剣聖の為すべき目的の一つである。

「それと、門番の貴様ら」

「は、はいっ！」

「何でしょうか！？」

「勤務が終わったら説教がある。楽しみに待っている」

「は！？　何で俺たちだけ……」

「お、おい馬鹿、やめろ！」

「　単位を提出しに来て単位を家に忘れる馬鹿がまず馬鹿だが、それを届ける為に城に無断侵入した馬鹿は更に馬鹿だ。そして、その程度のモチベーションの一般人に撒かれかけるお前らは一体何だ？　生まれたての馬鹿か？　首が据わってないのか。足がガクガクか？」

「ごふっ！」

「ぐはっ！」

「ごめんなさい……！」

僅か数秒の瞬く間に三人（門番二人＋ミド）を床に沈め、悠々とマユはその場を後にする。最後にちらりと、全くダメージを受けていない少年に眼を向ける。少年は、

「他人に馬鹿という人間が馬鹿なのだ、と私は以前教わりましたが」
コイツ勇者か、とその場にいた全員が思った。

しかし大多数の予想に反し、マユはふっと笑って、

「成程、的を射ている。だが、自分が馬鹿になっても、誰かに馬鹿と言わなければならない時もあるのだと覚えておけ」

「了解いたしました、記憶します」

それを最後に、マユは端末を取り出しながら扉の向こうへと消えた。机の上には飲み干されたコーヒート、開けられた砂糖の袋だけが残されていた。

「……もしかして、本当はただ休憩しに来てたのかな」

「ミド。床に寝ていると服が汚れますよ」

「間接的にはキミのせいだ！」

「どちらかというとミドのせいではありませんか？ 貴方が忘れた単位を届けに、私がここに来たのですから」

「正論だ！……だ、だけど正論言えば済むと思わないでよ！ こっちには、キミに気を取られてすっかり落としてしまったって言い張ることも出来るんだからね！」

「それは、脅しになっているのですか？」

「ぎゃーぎゃーと喚くミドとあくまで冷静に諭す少年。だが、彼らは気付いていない。」

周囲から寄せられる奇異な視線。例えばそれは、少年の格好や口調の異様さのせいでもあり、もっと単純にミドの大声のせいでもあり、或いは、見知らぬ少年が呪剣聖と仲良くしているという事実のせいであつたりしている。

「……見つけた……！」

だが。その中にただ一つ。別のものが混じっていることに気付くものは、誰もいない。

奇異ではない。驚愕、確信、そして喜悦……それらがなймаぜになつた、明白にして明確な攻撃性を孕んだ視線が、彼らを見つめていた。

一時間目【礫士（れきし）】（後書き）

教禍『礫士』

主として物理攻撃をメインとする教禍。

また、過去の偉人が編み出した特殊な術式をコピーした場合もど
ういうわけかこの教禍に分類される。

基本的に脳筋の奴が多く、特に女性でこの教禍を専攻する物は【
礫女^{れきじょ}】と揶揄^{ていう}されることも。

文系教禍。

二時間目【聖物（せいぶつ）】

二時間目 【聖物】

「ところで、フラットというのは？」

状況が落ち付いて、真っ先にフラットが問うてきたのはそれだった。

現在彼は、城に置いてあった兵士用のシャツを着ている。サイズが合っていないが、あの血塗れの青色吐息みたいな服よりはいいでしょ、とはミドの弁だった。青色吐息の用法が掠りすらしていない、というか正しくは青息吐息なのだが、その辺りは御愛嬌である。

城の中の廊下を歩く。あれから昼食を食べた後（ちなみにフラットと半分こにした。ミドは少し物足りなかった）、下手に一人で帰らせるよりは一緒に行動した方がいいという判断だ。

「君の名前。無きや困るじゃない。あの時は咄嗟だったけど、ちゃんと考えてたんだよ。それとも、本当の名前を思い出すまで待つ方がいい？」

「いえ、それはありませんので。……しかし、何故？」

「ん？ 簡単だよ、その短剣に彫ってあった字」

問いかけに何とは無しに即答し、ミドは、少年の腰につるされている鞘入りの短剣を指差した。シンプルな白一色に塗り固められた武骨な剣。その鞘部分には、確かに字が彫られていた。

「フラット何とか、までは読めたから。だからフラット」

「……成程。確かに、その発想は悪くありません」

「でしょ。……ていうか、やっぱり違うの？ 記憶が戻ったとか、無い？」

「私は記憶喪失ではありません。名前が無いのは元からです」

「ふーん」

正直ミドは、これが彼の名前ではないかと、結構な割合で思っ

フラット
いた。平坦という名は、この感情の起伏の無い少年には相応しいように思えた。だが、どうやら外れらしい。

「ですから、」

抑揚の無い瞳が、ミドを見る。

「名前で呼ばれたのは、貴方が初めてです」

「え……」

初めて。そう言われると、なんだか妙に小恥ずかしくてミドは足を速めた。よく分からない情動。誤魔化すように、咳払いして話を逸らす。

「んー。あのさ、それよりも、その敬語やめない？」

「はあ。しかし、具体的には、どうすればいいのでしょうか」

「いや……なんていうか、もうちょっとラフにっていうか……慣れ慣れしくつ、て言うのも微妙だけど、そんな感じで」

「ラフ……ですか」

考え込む仕草を見せるフラット。やがて、口を開く。

「つまりこんな感じデ話せばいいイノのかナ？」

「いやちよつと待って！？ 確かに君の雰囲気にはあってるけどそれはタメ口じゃないよ？ 君の雰囲気にはあってるけど！」

「何でもえーやないですか、気にせんといて下さいな」

「方言！？」

「HEY、YOU、何をSONなにSURPRISEDしてるんだい」

「詠語かぶれ！？」

ちなみに、これでもかという棒読みで、いつそ潔いほどの無表情である。滑稽を通り越して不気味ですらあった。

「それとも語尾に？ごめんなさい？と常時つけるというのは……」

「ちょ、待つ、待ってごめん！ ごめんあたしが悪かったから！

だからもつと自分のキャラを大切にしてい！」

「……？ その言葉は私には理解できません」

首を傾げるフラットに、ミドはひどく疲れて肩を落とした。どう

してそうなるのだ。何故タメ口はできなくてその辺のニツチなものばかり知っているのか。

「私の知っている限りの、周囲にいた同年代の人間の口調を真似てみたのですが、どうやらどこか違うようですね」

「どんな知り合いなのさ……って、え？ 知り合い？」

聞こえて来た単語に、思わずミドは足を止める。フラットは記憶喪失だったはずなのに。

「記憶、思い出したの？」

「ですから、私は記憶喪失ではありません」

「……本名と住居はどこ？」

「分かりません」

「残念でしたー！ それが分かるまでは記憶喪失扱いでーす！」

ミドはべーつと舌を出す。いい加減彼の奇妙な言動への対応にも慣れて来ていた。

そのうちに足を止める。目的の場所にたどりついた。

「ここは？」

「うん？ ああ、3Cの？ 教室？ ま、総合修煉場。基本的には、あたしたちがいつつもいなきゃいけない所……まあ大半は任務や私事でいいんだけど。自由登城だからね」

そこは、城の一階の中心部にあった。いくつもの勉強机に、図書室ほどではないが充実した図書類。分室の中には十人ほどの聖服姿の呪剣聖が、思い思いに雑談したり、書物を読んだりしたりしている。隣接した中庭からは、誰かが修行をしているのか、素振りの音や激しい金属音が響いていた。

ミドが声を掛けたのは、一人で長机一つを占拠している少年だった。

「やつほー」

銀縁眼鏡を掛けた少年だった。顔だけを見れば一応は美形の部類に入るのだろうが、雑に着崩した制服や、年齢に沿わないオールバックの髪型がそう思わせない。

「ミドか。ふむ、さして独創性を求める類では無いのであくまで標準的な対応を返すことにするが、お早う、相変わらず元気そうだな」

「……相変わらずだね、クレサト……。ん、何やってるの？」

クレサトと呼ばれた少年は、机の上に広げられた地図と真剣な顔をして向かい合っている。地図にはまず大きな街が載っていて、その街を囲い守るように棒人間の塊と、外側の森に、怪物らしき獣をディフォルメしたものがあちこちに書き加えられている。

「これ、もしかしてテストの出現範囲の予想？ 後であたしにも教えてよ」

「いや、これは今度の文藝誌に出す小説で使う環境設定だな。具体的には戦力図だ」

「何やってるんだよ君はテスト週間に！」

戦記モノだが、とあっさり答えるクレサト。そういうことを聞いているのではない。

「形から入るタイプなのでな。こうやって状況を目に見える形で書き出さなければ読み手が納得するものは作れんぞ。たとえ読み手にそれが伝わらなくても いや伝わらないからこそこだわる必要がある。貴様、それでも呪剣聖か？」

「呪剣聖と関係ないし！」

だーっと、頭を抱えるミド。そこに戦力図とやらを見ていたフラットが口を挟む。

「文藝……物語を書いているのですか？」

クレサトが顔を上げた。いきなり現れた見知らぬ少年に対し、しかしそのこと自体は特に気にもせず、むしろその質問の方に目を輝かせる。

「ほう、貴様我々に興味があるか！ ルークハイス皇国文藝部は世界的に見ても評価の高い創作界隈の一つだ！ SF、ラブコメ、耽美系、現代モノなどあらゆるジャンルでレベルの高い書き手が揃っていてだな、月一で皇都から文藝誌を出しているので読め！ 及ばずながら俺もその一員であり」

「ハイそこまでえーっ！」

ミドが、手をかざして二人の間に割り込む。

「クレサトのそれに付き合ってたら、日が暮れてまた昇るよ！」

「フツ、その言い草は俺を舐めているな、ミド。 季節が一巡りしてもまだ足らん」

「自慢げに言っつな！ ああもう、フラットも変な事聞かないの」

「はあ。すみません」

素直に頭を下げるフラット。だがそれを見て、即座にクレサトが口を開く。

「む、謝る必要は無いぞ、見知らぬ少年」

びし、とペンを向ける。

「 分からなければ分かるまで聞く、それは呪剣聖ならば必須の態度だ。勝手に脳内補完したり後回しして情報すなわちフラグを見逃せば、それは即ち大抵の場合は死亡フラグになるからな。ベタな話だが、ベタということはすなわちありふれているということだ。」

もつとも、創作物においてありふれているということは二通りあり、現実によくあるから創作でもよくある場合と、現実には起きないが創作だと映えるからよくある場合があり 」

「だからそういう説明はいいっての、てりゃ」

突っ込みと共に、ミドが滑らかな動作で柄に手を遣り、呪剣でクレサトの頭を抜き打った。

「おっと」

しかし、鎬を立てて空を切った黒い刃は、硬い音を立てて受け止められる。受け止めたのは、鞘に収まった長剣だ。中心部に銀色の宝石が輝いている。クレサトはそのまま、手首の捻りでミドの呪剣を小さく弾く。

「おお、……割と本気だったんだけどなあ」

「呪剣の解刀容姿を晒さずに本気を出せる呪剣聖がいるなら、ソイツは呪剣聖のフリをした人型テストくらいだ」

「む、それもそうだね。よしクレサト、中庭で模試やろう！ 解

刀容姿見せて！」

「また後でな。貴様のような脳の礫女を四六時中相手にしていては身が持たん」

痺れたらしい手をぱたと振りながら、面倒くさそうにクレサトが肩を竦める。どうやら、態度ほどには余裕があったわけではないようだった。

「だいたい、テスト週間になって急に対策を始める奴ほどアテにならない奴はない。本当の実力者は、普段からテストに備えているものだ。たとえば」

だが、そのとき。クレサトの言葉を遮って、教室を重い震動が襲った。

「うわ、……え、何？」

「これは……あの馬鹿、だからやめておけと言っただんだ！」

舌打ち一つ、クレサトが彼の呪剣を手に立ち上がった。まるで局地的な地震でも起きたかのようなその揺れは、教室のすぐ隣から生じていた。揺れが来た方向を知って、ミドが目丸くする。部屋の中にいる他の呪剣聖達も、どうやら気付いたようだった。

「まさか、誰かが？ 契約？ してるの？」

「ソウマだ。この時期になって新しく願書を出すなど無謀極まりない口を下手な柑橘類より酸っぱくして言ったのだから　おい待てミド。今の少年はどこだ？」

「へっ？ ……あれ、フラット？」

そして。二人の会話に全く参加していなかったはずのフラットが、独自に動いていた。

「

彼が何を感じたのか何を考えたのか、その表情からは推し量ることは出来ない。しかし、あるいはそれは、部屋の中にいた誰よりも早い反応だった。震動の元へと通じる扉の前に立つ。ミド達が気付いた時には、彼は扉を開け

「くっ」

内側から迸った白い閃光に、吹き飛ばされた。

「ちよつ、フラット！」

「おい少年！」

焦った二人が慌てて駆け寄る。しかしそこまで勢いが強かったわけではないらしく、フラットは背後の机を二、三個ほど倒して尻餅をついただけで、すぐに立ち上がった。開かれた扉から中を見て、そしてミドに問いかける。

「ミド。ここは何の部屋ですか？」

「……実習室。基本的には秘密のお話とか、危なっかしい教禍の練習とかに使うところなんだけど……今は、呪剣との契約をしてる聖徒がいるみたい」

？使用中？と書かれた板が、くると落ちて来た。扉に掛かっていたものが、今の拍子で吹っ飛んだのだろう。ミドがそれを背後に蹴飛ばして、慎重に部屋に入り込んだ。フラットとクレサトも続く。

その部屋は、汎用性に富んだ教室とは違い、極めて武骨に出来ていた。

窓は高い所に一つだけ。継ぎ目すらない壁に、部屋の片隅にランプを置いた机が一つ。必要最低限のもののさえ置いていないその様子はさながら牢獄か何かのようにも見える。

その中心で、震動と光は生まれていた。

「
」

光の線が、床に奇妙な紋様を描いている。その中心で少年が一人、呪剣を抱えて蹲っていた。かろうじて開かれた目には光が感じられず、ただ、その手に持った剣が 正確にはその聖石が、脈動するように光を放っている。

「呪剣と、……あれは何かの魔法陣でしょうか？」

「そうだ。呪剣聖の個人情報をも魔法記号化した呪剣の契約陣、通称？願書？。いくら呪剣聖でも、契約せずに呪剣の力を引き出すことは出来ん。故にこうして時間と手間を掛けて願書を構築し、契約を

行つ必要がある。そんなことも知らんのか　　というか今更だが、貴様は何者だ？」

「申し訳ありませんが、ミドに聞いて下さらなければ、如何せんその質問には答えようがありません」フラットが返答を濁す。「それより。彼は、もしか暴走しているのでは？」

「これで暴走していなかったらソウマのクーデターを疑う必要があるな」

口の端を歪めるクレサト。閃光を長剣で危なげなく弾きながら、冷や汗を浮かべて部屋の中心の少年　ソウマというらしい　を見る。中心に近づくほど、閃光と突風は強くなっていく。下手に近づけば、怪我ではすまない。

「だがまずいな、このままだと最悪？墮ちる？ぞ！　誰か　」
他の呪剣聖を呼ぼうとしたクレサトの隣を、……一陣の風が駆け抜けた。

「滾れ《レッドブレード》！」

ミドが解刀しながら突っ込んでいた。クレサトの言葉も聞こえていない。呪剣の黒い刀身が、血の刃に覆われる。周囲に血液が無くとも、レッドブレードは一度吸収した血は貯蓄する。手加減の為やや小ぶりの刃を形成して、ミドは部屋の中心へ突っ込む。

「
ソウマの呪剣が光を放つ。

一閃、二閃、三閃。弓張るような形の銀色の波紋が迸る。爆ぜた天井のランプの欠片が更に粉々に吹き飛んだ。正面衝突したミドのレッドブレードが、刀身を削られながら弾かれる。

「ソンのっ……！」

暴走しているだけあって、威力は無駄に大きい。狙いは大雑把で無差別、しかし速く、重く、何より多い。更に続けて、五、六、七閃。ここまで来ると、もう刃の壁だ。だが、ミドは引かない。引けない。出鱈目な方向に出鱈目な角度にバラバラに打ち出されるこの暴走に、いくら引いても意味が無いから、というのもあるが。

クラスメイトが墮ちそうになっているのに、自分を気にしてなんていられない！

「シッ」

ミドは踏み込む左足から意図的に力を抜く。かくりと体が傾き、頭を垂れた。崩れた態勢を倒れるように加速することで無理やり保つと、飛んできた閃光が三つ、頭上を通り過ぎた。

今度は、強引に踏み出した右足一本で小さく跳躍、体を丸める。

回る視界。世界は回転。飛んでくる閃光がまるで万華鏡のように見え　ミドはその回転の勢いのまま閃光を飛び越える。もうソウマは、手の届きそうな位置にいる。

レッドブレードを力任せに床にぶつけた。加速すると同時に、跳ね返る力を利用して伸びあがるように剣を前に突き出した。

新たに放たれた閃光が、右肩を撫でるように過ぎ去っていく。走る痛みを、気合で押し伏せる。分厚い刃を押しこまれるような鈍くも決定的な痛みが脳裏に危機感を走らせる。

だが今はどうでもいい。それよりも、大切なのはこちらの剣を届かせること！

「！」

きいん、と澄んだ音を立てて、少年の手から呪剣が打ち上げられた。クレサトが瞠目し、フラットが鏢に嵌められた聖石をその目で追った。

そして、それで終わり。脈動していた聖石は主を失って瞬く間に光を放つのをやめ、それまでの騒ぎが嘘だったかのように実習室の中は静まり返った。ゆっくりと瞳に意識の火を宿していく少年に、肩口を赤く染めたミドが呼びかける。

「痛ったあ……ソウマくん！　良かった、生きてる？　どこもおかしくない？」

「う、……え、ミドさん？　どうして……あ！　ミドさん、怪我を……！」

ソウマが、ミドの怪我を見て慌てて頭を下げる。ミドは若干痛み

に顔を顰めながらも、無邪気に笑って彼を見る。

「いいっていいって。それより、君が無事で良かったよ」

「う……」

笑顔を向けられたソウマの頬が、リンゴのように真っ赤に染まる。しどろもどろになり、何やら言葉にならない言葉を呟く少年を笑みで見つめるミドを見て、クレサトは呆れたように呟いた。

「……相変わらず、危なっかしい奴だ」

果たしてそれは、どちらに向けた言葉か。

「？主はしずくを流された　しずくは愛に　愛は塵に　塵は泡沫に
泡沫を以て生と為す？」

羽根をあしらった儀式剣。それがソウマの本来の呪剣の解刀容姿であった。

ソウマの詠唱に応えるように、鐔の部分に花のように咲き誇る羽根の内の一つが舞う。

「？人と獣とを救う我が主の愛よ　尊き七つを抱きたまえ　人の子
がしずくを分け与えれば　主は微笑み　月の泡沫は十重二十重と姿
を増す？　【セル・デイヴィジョン】」

光で出来た純白の羽根が、ミドの傷口を速やかに癒していく。

「おおー」

腕の切り傷が跡型も無く消えて、思わず感嘆の声を挙げるミド。

憧れるような、羨ましげな視線を傷口とソウマに交互に向ける。

「相変わらずソウマくんの呪剣は凄いなあ……ありがとね」

「そ、そんな！　僕の方が怪我させたんだから。ごめん、服とかは直せなくて……」

とんでもないとばかりに両手を顔の前に上げて交差させ、ソウマが言う。

艶のある黒髪のおかっぱ。一見、少女と見紛うような、細身の少年だ。服は上着の裾が足元まである、後衛用の聖服。胸に口ザリオ

が掛かっているのと合わさり、どことなく聖職者をイメージさせる着こなしだ。ソウマは儀礼剣を鞘に納める。傍らには、つい先ほど彼が契約しようとして暴走した呪剣が、嚴重に封をされて置いてある。

「馬鹿者め。だから、多重専攻などやめておけと言ったのだ。いくら貴様の聖物教禍に対するST適性が高くても、他の教禍の呪剣にまでそれが適応されるとは限らないのだからな」

「うー。まあ、反省はする。ミドさんに怪我させてちゃ、何の為に戦おうとするんだか……」

「気にすることないって。怪我させたって治してくれたんだし。そう思わない、フラット？」

「そうですね、結果としてプラスマイナスは0になります」

「そ、それはちよつとどうなのさ、ミドさん……？」

「……ミドに親類なぞ珍しいと思ったが、価値観まで似た者同士か、貴様ら」

「え、親類？ この……彼が？ ミド」

「はい。フラットと申します」

機械的に小さく頭を下げるフラット。その外見と態度に、ソウマがいかに怪訝そうな目で見上げる。ミドが若干口ごもりながら、あまり悪そうに頬を指で掻いた。

「あー、うん。ちよつとまあ色々あって、しばらくウチに居候させることになったの」

「居候？ ……ってミドさん、確か一人暮らしだったよね！？」

「がたたん、と派手に椅子を揺らしてソウマが身を乗り出した。

「うん、そうだけど？」

「って、ちよ……それは、なんて……！ ああ……なんてことだ……」

「へ？ 変なソウマくん。何か問題あった？ ウチがそれなりに広いの、知ってるでしょ」

「がたん、とその言葉にクレサトが立ち上がって、にわかに机を回

り込み、ソウマの首根っこを引っ掴んだ。そのままずるずると引きずって、ミドに会話が伝わらない距離まで離れる。

「なんだ、ソウマ。ミドの家には行けたのか。進展はあったか？」

「う……い、行ったよ！ 行きましたとも！ 前の修行で出たプリント届けに行ったときに！ なんならお昼でも食べてく？ って言われて！」

「相変わらず無駄にフラグ体質だな、あの女は。それで中に入ったのか。ほう、チキンの貴様にしては良くやったではないか」

「ハッ、僕を舐めないで下さいよ。 丁重にお断りして帰りましたが何か」

「今日から貴様の呼称はスズメだ」

「ランク下がったあああ！？」

聞こえないように悲鳴を上げる。ソウマの匠の一芸である。

何やらごちゃごちゃと自分に聞こえないように会話をする二人に、ミドが不満そうに口を尖らせた。机の上に顎を載せる。

「なーんのかな。これだから男子は全クー」

その傍らにフラットが立ち、首を機械的に傾げて、丸めた掌を口にあてる。

「いえ、彼らの動揺も当然かと、ミド。貴方のような少女が無条件で自宅に男を泊めるというのは、極めて非常識的な行為ですよ」

「……お前が言うな！」「……」

まるで他人事なフラットの言い分に、三人が揃って突っ込んだ。

「はあああああああああああああ！」

「フッ、さあ来いミド！ 俺は一回刺しただけで死ぬぞおおおおお！」

「それ普通じゃんっ！ おらおらおらおらおらおらあっ！」

「フハハハハ無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！」

ミドが叫ぶ。クレサトも叫ぶ。どっちも戦闘だとハイになるタイ

ブだった。

楽しそうだなあ、とソウマは呟いた。隣ではフラットと呼ばれていたあの細身の少年が、座りながらひどく機械的に二人の模試を見つめている。

ミドは片手刀より少し大きめ程度の長剣一刀、対峙するクレサトは、右手に鞭、左手に小太刀の変則にも程がある二刀。もちろんどちらも殺傷力の無い訓練用だが、沸き立つ気迫と衝撃は本物だ。これでもかと言わんばかりのガチバトルであった。

修練場でも一際目立つ（というか五月蠅い）二人の戦いの周りには、自らの修行をほっぽり出して観戦を始める兵たちの姿も見えた。中には賭けをしている聖徒までいる。

「相変わらずだなあ」

「二人とも、お強いのですか？」

「それは強いさ！ 特にミドさんはね！」

フラットの疑問に、ソウマが眼を輝かせる。

「少なくとも単純な剣技でミドさんの右に出る人なんて、ウチのクラスじゃ室長くらいさ！ 順位こそまだ二桁級だけど、いずれはきっと、彼女の兄と同じく、一桁になるに決まってる！」

「はあ。そうなのですか」

熱弁するソウマに対し、フラットは曖昧に相槌を打つだけ。

「それでいて驕ったりもしないで人を守ることを最優先にしてるし

……さつきも格好良かったよなあ……ああ、いいなあクレサト……羨ましい……」

「何故ですか？」

「なぜって、好きな子とガチバトルしたいって欲望は誰でも持つてるものだろう？」

好きな子、というところをあえてソウマは強調した。彼はこのフラットという奇妙な少年にそれなりの警戒心を抱いていた。といつても、不審者としてではない。身内だか何だか知らないが、いきなり現れてミドの家に居候しているというだけで、十分に牽制に値し

た。もつとも、言ってる内容が割と電波なものには自分では気付いていない。

「寡聞にして私は聞いたことがありません。 そうなのですか」

「そんなの決まってるじゃないか」

全然決まっていないのだが、生憎フラットにはそれを突っ込むほどの知識量が無かった。

「三勝五敗。 まあまずまずだな」

「ねえクレサト。 今更だけどさ、 鞭と短剣の二刀流VS長剣って模試としてどう？」

「そう思うなら誘うな阿呆が」

模擬戦の後とは思えないくらい消耗しきった二人が戻ってきたのは、それからしばらくしてだった。 ミドは服の裾を所々まくって簡単に汗を拭いながら（胸元や脇を拭く時にはソウマが目を逸らした）そろそろ帰ろうか、とフラットに言った。

「えっ、ミドさん、もう帰るの？」

「うん。 まあ、あんまり遅くまでいても良くないでしょ。 元々フラットは部外者だし」

「そついえばミド。 ナチュラルに部外者を引きこんでいるが、門番の許可は取れたのか」

「ああ、申し訳ありません、実は許可が取れなかったので不法しんブッ」

「言わなくていいから！ …… あ、あはははは！ まあ特例？ みたいないな！」

「思いつきり今、？ 許可が取れなかったの？ って聞こえたんですけど……」

「…… まあいいが、ミド。 一つだけ言っておくぞ」

ソウマが呆れるのに対し、いつの間にか戦況図ではなく何らかの参考書を読み始めていたクレサトが、酷く面倒くさそうに言う。

「思うままに動くのもいい。が、それは、周囲の情報を無視しているということにはならん」

「……………」

ミドが動きを止める。

「それも、小説の話？」

「いいや。　　呪剣戦争の秘訣だよ」

クレサトの口調は強く、言い聞かせるような色があった。忠告というよりも、警告。

「？ノリ？で？なんとなく？？テキストに？テストを倒していると、いつか壁にぶつかる。そしてそういう奴に限って、ぶつかった後の立ち上がり方を知らん」

ミドが勢いよく振り返る。感情の見られない　押し殺したような眼で、クレサトを睨む。だが、数秒の沈黙の後、ミドは向き直って何事も無かったかのように足を進めた。

「頼れるのなら俺達だって力にはなるだろう。貴様一人で動くな」
「……………」

続くクレサトの言葉にも、ミドはしばらく返事をしなかった。じり、とひりつくような沈黙が降りる。それを破ったのは、ミドの明るい　少なくとも表面上は明るい声だった。

「やだなー、何も気にすることなんて無いって！　大丈夫大丈夫！　行こ、フラット」

「会話は終わったのですか？」

そんなことを聞きながらも、ミドに追従するフラットであった。扉を開け、早々に出ていく。その様子を最後まで見もせず、クレサトはまたシヨールに何やら書きつけた。

「何言っただよ、クレサト」

言葉の意味が分からなかったソウマが、ミドが不機嫌になったことだけを理解して、クレサトに恨みがましい視線を向ける。

「馬鹿か、ソウマ。あのフラットとやらは、ミドの、少なくとも親類ではない。　　ミドの家がどうなったのかを忘れたのか」

「……あつ」

クレサトが言わんとすることに気付いたのか、ソウマの表情に驚きが広がり、そして、にわかに影が差す。

「どんな事情かは知らん。まあ十中八九、ミドのいつものお節介だろう。……アイツに親類がいるはずがない。万が一遠縁がいたとしても、それが《血雨》の血統であるミドを訪ねてくるなど、まずありえん」

クレサトは、忌々しいものを吐き出すように、それらの推測の論拠を言った。

「ミドの一族郎党は全て、奴の呪剣に喰われてしまっているのだから」

「ミド。一つ聞いてもいいですか？」

「え？」

城を出た頃には、夕焼けで街は紅色に染められていた。

街道を歩きながら、フラットがミドを見る。無機質な瞳は、いささか逆光気味だったのでそこまで目立たなかった。そのシルエットは夕陽色に縁どられている。ミドは目を細めた。

「どうして、私にここまで世話をしてくれているのですか？」

「……………え？」

「考えたのですが、やはり、分かりません。見ず知らずの瀕死の相手を、助けるだけならまだしも、ここまで世話をするのは理に敵いません。言葉にしてみれば簡単ですが、貴方に何一つ利益は無いでしょう。私が悪人である可能性、スパイである可能性。それだけでなく、結果的に貴方にとって損になる可能性しかないのでは？」

「いや……だって、見殺しにしたら寝覚め悪いし。途中で放り出すのも抵抗あるし」

何と言つことも無い。むしろ、どうしてそんなことを聞くのか、

分からなかった。確かに、理屈の上ではそうかもしれない。シーナもそう言ってたし。

だけれど、勝手に人を悪者にして、見殺しにしたら、それこそ悪人じゃないか。

「寝覚めが悪い？」

「そう。えっと」

首を傾げるが、改めて言葉で説明する、というのも、ミドには難しかった。寝覚めが悪い。気分が悪い。そう言うのは簡単だが、この少年には　まるで、記憶とともに感情も忘れてしまったのではないかというこの少年には、伝わらないような気がした。

んー、と考えて、ふと、道端にある店に眼を止める。

移動屋台の看板には、『ぜっ？タイ？落ちない！　乙屋の鯛焼き出張支店』と書かれている。よくあるお店だ。ぴいん、とミドの脳裏に一つの発想が思い浮かぶ。

「あ。そだね。ちょっと待って」

フラットを置いてそちらへ近づく。

「おじさん、二つ下さーい」

「お、城帰りがい、呪剣聖の嬢ちゃん。はいよ、ちよいとお待ち」
代金を払って、代わりに紙袋を二つ。

「ありがと！」

「乙屋の鯛焼きを今後とも御贖に！　で、その兄ちゃんは何だい、彼氏かい？」

「あはは、違いますよ。ただの親戚です」

二言三言。以心伝心ではないが。買い物はリズム良く。紙袋に詰められた菓子パンに手を熱くしながら、フラットの下に戻る。

「どっか座ろうか」

「はあ」

見つけたのは、近くにあった広場の街路樹の下にあるベンチ。広場の中心には噴水があり、まだ幼い子供達が遊んでいた。

はぐ、と鯛焼きを口にし、ミドは頬を緩ませる。香ばしい匂いが口の中に広がり、幸せな気持ちになる。

「おいしー」

その隣で、鯛焼きを受け取ったフラットが、物珍しそうにその珍奇な外見を見つめていた。

「食べなよ。美味しいよ？」

「……何故？」

「いーから」

楽しげに笑うミドに押され、おそろおそろと言ったゆっくりな動作で、フラットがそれをかじる。歯を立てると、熱かったらしく口を離し、もう一度、大きくかじった。

「……………！」

ほんの僅か。

そうなるだろうと思って見ていたミドですら、見逃してしまいそうなほどに、ごく小さな、ほんの僅かの変化ではあったが、フラットの眼の色が変わった。

ぱくぱくと、食べるペースを上げて、あっという間に呑み込んでしまう。

「美味しいでしょ？」

改心の笑みを浮かべて、ミドはフラットの表情を見る。彼は、食べきってしまった後の紙袋を意味ありげに見つめ、

「……このような味の食べ物は初めてです。これが、？美味しい？ということなのですか？」

「たぶんそうだね。良かった。だから、つまりそういうこと」

ミドが、最後の一口を口の中に放り投げた。

「これも、貴方からすれば、利に沿わないこと、なんでしょ？」

「……そうですね」肯定までには、ほんの一瞬の間があった。「貴方に利があるとは思えません。食べたいのなら、一人で食べればいいのでしょし」

「ふうん。まあ、君ならそう言うだろうと思ったけどさ。でも、一

「つ忘れてない？」

「何がですか？」

「君が？美味しい？と思ってくれたこと。それが、この場合の、あたしの利益」

くしゃ、と紙袋を握り潰して、くるくると丸める。

「誰かが嬉しかったらあたしも嬉しい。誰かが悲しそうにしてたらあたしも悲しい。それだけの話だよ、君を助けたのなんて」

ぽい、とゴミ箱に向けて投げる。かさん、紙クズはゴミ箱の内部側面に当たってうまく中に落ちた。やりい、と笑ってミドはガッツポーズ。

「だいたいさ、何かしようとするたびに、いちいち論理的に利があるか無いかーなんて、考えても疲れるだけでしょ」

首を傾げる。自分の思うままに、感情の赴くままに、選択し決断し行動する。それは、フラットというこの少年とは、真逆の価値観なのだろう。

「理解……出来ません」

だからこそ、フラットはそう答え。

「そのうち分かるよ、きっと。……大体、フラットだってやってるじゃん？ あたしが落とした単位届けてくれたじゃない」

「……ああ。あれは、そう教わりましたので」

「は？」

だからこそ、ミドもまた、フラットのその言葉を理解することが出来なかった。

相も変わらず抑揚のないイントネーションで、フラットは続ける。流水のように淀みなく、自らの行動原理を語る。

「現状、私は貴方に対して、死ぬ時期を遅らせて頂いたという恩、借りがあります。私は貴方に対して、貴方と同じように、利害を度外視した行為をいくつか行う必要がありました。……現状、然るべき時まで私が生存を続けるには、貴方の庇護が必要不可欠です。その為には、貴方及び、シーナ様をはじめとする、貴方の周りの人間

から信頼を得ることが最善の手段です。そして、信頼関係は相互行為から作られるものだ、私は学んでいます」

ミドを見据えるのは、ガラス玉。生きた人間を、限りなく精巧に再現した作り物のような瞳。

「……………っ」

ミドは息を呑む。そして、この時に初めて、彼が記憶喪失であるという自らの認識に、疑問を持った。やたらと無感情なのは、何も知らないから、分からないからこそだろう、というその認識は、間違っているのではないか。

何も知らない人間は、こうはならない。

だったらどんな人間なら彼のようになるのか、ミドにはまるで分からなかったが、戦慄したように、ミドは問いかける。

「あたしだって、分かんないよ。……君は、一体」

その瞬間、ミドは顔を上げ

「きゃあああああああっ！」

絹を裂くような悲鳴が、空気を引き裂いた。

「な!？」

ミドがベンチを立つその頃には、フラットは走り始めていた。

ソウマの暴走の時と同じ、余りに迅速な、迅速すぎる対応だった。慌てて彼の後を追う。コンマ以下の判断でフラットは、正確に悲鳴の方向に向かっていた。そして何より、

「は、やつ……………!？」

態勢を低く沈め、両腕を背後に流し、滑るように駆けるフラットのスปีドは、ミドですら 轢土教禍を専攻する、近接戦闘型の呪剣聖であるミドですら追いつけないものだった。

半径二メートル近くある広場の噴水を、距離短縮の為だろう、平然と飛び越える。今更ながら、彼が城に不法侵入出来た理由を理解する。ただの兵士ではとてもこれには追いつけまい。第一、そんじ

よそこらの人間に乗り越えられるほど、城を囲う塀は低くは無いのだ。

「くっ……！」

何者だ、こいつ。

ミドはなりふり構わず、本気を出してフラットの後を追う。

その先に何がいるのか、既に感じ取っていた。聞こえるのは悲鳴、混乱、そして。

あるべき現実が乱される？ 偏差？の気配。

「何でこんなところに……！？」

テストの気配を、ミドはフラットの行く先に感じ取っていた。

「ひ、あ、ああ……！」

喉の奥から、自分の物とは思えないような声が漏れる。

少女は、花売りだった。今日もいつも通り道端で花を売って、そろそろ日も暮れて来たから帰ろうかと、そんなことを考えていたところに、突如それは現れた。

腰が抜けてしまっていた。体は震えるばかりで言うことを聞いてくれない。涙が頬を伝う。だらしなく開いた口が、恐怖のあまり笑みに歪んだ。

「……………ガ……………」

目の前には、鬼がいる。

初めて見る。街の中にいる限り、滅多なことでは見られない。見る必要も無いものが、何故か今日、彼女の前にいた。周囲の人間は、大人も子供も関係なく、蜘蛛の子を散らすようにあっさりと逃げ出してしまった。

テスト。異形の筋肉を持つ、やや怪物よりの人型。

巨体に相応しい緩慢な動作で、それはゆっくりと片手を上げる。人間の腕を模したとはとも思い難い、鋭く堅牢で禍々しいその形状は、少女の体など薄紙を破るように破壊してしまうだろう。

鬼の右腕が少女にとっての？死？そのものが、高々と振り上げられる。

「い……」

少女は、震える手で地面を掻きながら、絹が裂けるような悲鳴を上げた

「いやあああああー……っ！」

そのとき。

「戦闘状態に移行します」

鬼の向こうに、人形が現れた。

驚いて少女は眼を見開いた。テストの頭の上に、飛び上がった人間の姿があった。彼は右手で短剣を逆手に持ち、コンパクトに左肩へと引きつけている。

少女の視界は涙で曖昧だ、だがそれでも、

「テストは殺す。そこに、例外はありません」

現れた人形の、その無機物のような言葉は、嫌でも耳に残った。がじゅ、と肉が擦るように引き裂かれる音。

「……オオオ！」

振り上げていた腕を傷つけられ、鬼の罵声と悲鳴が入り混じったような叫びが場を震わせる。その隙に人形は少女の前に降り立ち、袖を引っ掴んで引きずる。そうしてなんとか、少女は鬼の脅威から離脱した。

「あ、あ、あの……」

見上げると、そこにいたのは簡素なシャツを着た少年だった。彼は油断なくテストを見つめながら、少女に語りかける。

「怪我はありませんか？」

「え、あ、は、はい……」

「そうですか。では、速やかに逃げて下さい。足手まといです」

「え？ ちょ、ちょっと待って！ わた、わたし、腰が抜けて……」

少女は、この少年が呪剣聖だと思っていた。ゆえに慌ててその手を掴んだ。不安になっていたし、この状況で一人で動くという行為

そのものが怖かった。頼るものが欲しかった。

しかし、掴んだ少年の手は、酷く冷たくて

「あくっ!？」

その瞬間、少女はまるで心臓が掴まれたかのような衝撃に襲われた。

手を離し、地面に倒れる。視界が霞んでいく。何をされたのか分からない、だが、理由の分からない壮絶な負荷が、ただの一瞬で少女の精神を猛烈に苛んだのだ。

「か……」

直前までの恐怖もあつたのだろう。

極めて暴力的に、少女の意識は刈り取られた。

これは失敗しました。私には触れない方がいいと、そう言うべきでした。

フラットは、自らの失策に気付き、気を失った少女を見た。前方への集中は解かない。過ぎたことだ。反省は後ですればいいし悔やむ意味はない。

テストを倒す。それが、彼にインプットされた？原則？である。五メートルほど先には異形の人型テスト。俗に『鬼』と呼ばれるものだ。それがどうして、突然こんな街中に現れたのが不明だが、それは今考えても恐らく答えは出ない。

テストをこの場に放った何者かがいる、と仮定する必要があるですね。

「ガッアッ!」

暴風のように、鬼が動いた。倒れるような歩行。一見の行動こそ緩慢だが、その巨大な体から生み出される終端速度は十分な脅威になる。

フラットが少女を踵に引つ掛けながら、片足を軸に半回転する。紙一重で、突進の勢いそのまま繰りだされた拳が、眼前を通り過ぎる。

フラットは再びの現状確認。

鬼が足を止め、弧を描くように腕を振り上げる。退こうとするが、踵に引っかけ蹴っ飛ばした少女がすぐ後ろに転がっていて邪魔だ。

瞬間、フラットの左手が跳ね、鬼の肩口に掌底を喰らわした。どんな強大な力でも、出始めと力の支点は弱い。このようなタイプなら尚更だ。軌道を僅かに逸らす。振り下ろされた腕は、フラットの横数センチを通り過ぎる。

みしりと、鬼の肩口を押さえた左手の骨が軋んだ。

「！」

咄嗟に一閃。胸元、硬い感触。斬れているのは薄皮程度か。直後に襲ってきた長大な腕による薙ぎ払いを屈んでかわす。遅れて通り過ぎた大気が、髪を数本飛ばした。

こと、この瞬間において、圧倒的に有利なのは鬼の方だった。鬼の攻撃が一つでも当たればフラットは土人形のように破壊されるだろう。速度はフラットが上だが、距離を取ろうにも背後の少女が邪魔だ。パワー型のテスト相手に、足を止めての殴り合い。論外だ。

鬼が、挟み込むように、眼前の小さな人間へと両腕を叩きつけた。逃げ場は無い。長大なリーチとそれなりの速度、何よりその硬度と質量は、フラットの身体能力では、下がることも避けることも受けることも許されない

「【ボイル・シャルル】」

故に、フラットは使った。身体能力以外の能力を。

ぱあん、と音がして、振り下ろされた両腕の勢いがにわかに弱まる。まるで水の中のような抵抗が、局所的な逆風でも吹いたかのように、鬼の両腕は動きを留める。

それは『風』。

何が起こったのかと眼を凝らそうとした鬼の視界を、蹴り上げた花束で塞ぐ。それは少女が持っていた売り物の花であり、そしてそれはフラットの視線を受けて、唐突に燃え上がった。

それは『熱』。

次の瞬間。熱された木の実のように、何の変哲もない花が内部から弾け飛ぶ。

「ガ　！？」

破裂と同時に、迸った熱風が、鬼の両目を焼いた。

ざわり、と空気が震える。

それは、全てのテストが生来持つ力。全ての呪剣聖が契約と修行によって身につける力。現実を本来あるべき姿から歪め、その偏差を用いて対象を破壊する。現実にはあり得ざる事象が、今ここに顕現していた。

鬼が目を開けたタイミングを見計らって、フラットは跳んだ。ズキズキと脳髓が痛む。体中の血管が悲鳴を挙げている。脇腹の傷が開いた。地面に降る血が点々を作る。損傷率五パーセント、とフラットは静かに思考する。まだ十分です、とも。

火傷を受けながらも、かろうじて眼を開けた鬼は、その視界に地面に倒れた少女を見つける。彼女目がけて、腕を振り上げた。すぐ上にいるフラットには気付きもせずに。

人間を殺す。より殺しやすい人間から殺す。その本能でしか動かない下位のテストは、こういった罔によく引っかけられることを、フラットは教わっていた。

「？体積は圧力に反比例し、絶対温度に比例する？　理架教禍・

物理【ボイル・シャルル】」

オーソドックスな音韻詠唱と共に、短剣を振り上げる。銀一色だったその刃は、その周囲の大气ごと、真つ赤に熱されていた。今まで、テストの硬質の表皮に弾かれていた短剣の一閃は、今度こそその使い手の要求に応え、武器の本領を発揮する。

「　　」

静かに息を止める。体重全てを掛けて、一息に振り降ろした。

斬る。テストの振り上げた腕を、斬る、その先の爪を、斬る、壊れれば消える紛い物の肉を、斬る、紛い物の骨を、斬る、焼き、炭化させ、燃やし、崩し、斬る。壊す。殺す。

たし、と鬼の背後の地面に着地し。

力任せに、鬼の？残り？に引っ掛かっていた短剣を、振り切った。ぶち、と音がして。ひつついてきた肉は炭化し、消える。その背後で、真つ二つになった鬼が、地面に倒れた。

すぐに質量を失い、その構成がほつれるように薄らいでいく。

「テストの構成解放を確認。戦闘状態、終了します」

その一部始終を見て、ミドは絶句していた。

「教、禍……」

すぐに加勢に入るつもりだった。いくつかの例外こそあれ、武装もしていない普通の人間がテストに勝てる筈が無いからだ。多少足が速かろうと、多少言動が変だろうと、そんなことは関係ない。それだけの差が、テストと一般人の間にはある。

だが間違いない。あの力は、教禍だ。同じ力の使い手を見たことがある。主要五教禍の内の一つ『理架』の魔法、大気と熱を操る能力【ボイル・シャルル】。

「フラット……？」

茫然として呼びかけると、フラットは、そのとき初めてこちらに気付いたようだった。消えたテストから単位を取り、すぐ傍で気を失っていた花屋の少女の息を確認していた彼はこちらを見て、

「ミド。 申し訳あります」

立ち上がるうとして、崩折れた。地面に倒れ、激しく咳き込む。

「ごほっ！ かっ……、げほっ、ガハッ！」

「え、……え？」

ただならぬ状態に、疑問を一端脇に置き、咄嗟に駆け寄る。彼は、鬼の行動でぐしゃぐしゃにひび割れている地面にうつ伏せに倒れ、何度も、苦しそうに咳き込んでいる。血交じりの咳。じわりと、脇腹の辺りから、服に血が滲み始めていた。

「これって……?! ねえ、ちよっと！ フラット！」

ミドの必死の叫び声は、すぐに気を失ったフラットに、むなしく

空を切った。

呪剣は、ただの剣ではない。

この時代が呪剣戦争と呼ばれる所以となった剣。そもそもは、テストに対抗するため、ズイ・ノ・ヨーケンという名の魔性の刀鍛冶によって生み出されたものが始まりらしい。ちなみに最初の呪剣の名前は【^{かきよ}科拳】という。

テストの核である『単位』、その良質なものを合わせ、溶かし、精錬し出来た『聖石』を、武器と共に鍛えて核とする。

それによって作り出された呪剣は、テストが扱うのと同じ特別な力。後に？人ヲシテ禍ヒ教シムモノ？、すなわちちに『教禍』と呼ばれ分類される力を内包していた。

血液を吸収し刃とする、刀身から雷撃を放つ、周囲のものを無差別に風化させる。あるいは、空間を切り裂き外世界の怪物を召喚する、他者の身体能力を増幅する、斬った対象の傷を癒す。呪剣の力は様々だ。

しかし、この世の多くのものがそうであるように、強大な力には、多大なリスクが伴う。当然だ。だからこそ、それは魔剣でも聖剣でもない、？呪？の一字を冠したのだから。

そして、そのリスクの代表格が、使い手に掛かる莫大な脳髓^{ストレス}負荷である。

呪剣聖は、恒常的に深刻なストレスに見舞われる。

教禍制御の為に膨大な情報量进行处理するからか、或いは原料となったテストの怨念か。大半の人間は、教禍を使うのはおろか、抜き身の呪剣に触れることすらまならない。耐性の無い人間が迂闊に触れてしまえば、意識を失うか、最悪脳や感覚機能に障害が残る場合すらある。そう、以前ミドの呪剣に触れた、あの新兵のように。

このストレスに耐える能力、『ST耐性』は先天性のもので、訓

練しだいで多少は伸ばせるが、一生でほとんど変わることはない。

同じ呪剣聖の間でもその違いは顕著で、耐性の低い者ほど、大規模教禍の行使や長時間の戦闘が行えなくなる。具体的には、平均的な耐性の持ち主が呪剣の解刀容姿を維持するだけでも、五十分ごとに十分あたりの休憩が必要だと言われている。

「……………」

ミドの目の前。ベッドで、フラットは寝返り一つ打たずに、静かに眠っている。

あれからのこと。

騒動を聞いてやってきた警備兵に、ミドは自分の分かっている限りのこと（フラットのことは伏せ、テストは自分が倒したと言った）を簡単に説明すると、早々にその場を後にした。

倒れていた少女はショックで気絶しているだけだったので、実質の被害者はほぼ0。路面や出店が少々破損しただけだ。町中に突然テストが現れる、という事件にしてはこれは非常に幸運だったろう。テストが小物で、動きの鈍いパワータイプだったのもあるだろうが、何より対応が早かったのが良かった。

「う……………」

「……………あ、起きた？ 全く。一日に二度も、同じ人間をベッドで看病するとは思わなかったよ、あたし」

「おはよ、う、ございます。……………ありがとうございます」

「ああ、起きなくていいよ。まだ頭痛いでしょ？」

ゆっくりと体を起こそうとするフラットを、つまるところ今回の事件で唯一の被害者を押し留めて、ミドはため息をついた。

「……………呪剣聖だったんだね」

「はい」

「……………もしかして、森の中で一匹、テストを倒した？」

「はい。少々、腹部に傷を負ってしまいました」

事前の報告では二体いたはずの今朝のテスト。一体しか見つからなかったのはそういうわけか。相討ちの形でこの少年が倒していた

のだ。テストの死体はすぐに消える。単位はどこかへ行ってしまったのだろう。

「……フラット。少なくとも、3Cの所属じゃあ、ないよね」

その言葉を口にするには、ある程度の覚悟が必要だった。だが、フラットの返答は相も変わらず簡素なもので。

「はい。私はレーヴァという都市で、呪剣候補聖のような立場にいました」

「レーヴァ……聞いたことないけど。……どうして黙ってたの？」

「聞かれませんでしたので」

責めるような言葉に、平然と返すフラット。なるほど確かに、ミドは？君は呪剣聖ですか？？とは聞いていない。はあ、と癖になりかけている溜息をつき、ミドは頭を抱える。

呪剣聖。意識の外にいていたが、あの短剣が呪剣だったのだろう。同時にこれは、シーナの言っていたことを肯定することになった。記憶喪失で身元不明の少年と、記憶喪失で身元不明の？呪剣聖？ではワケが違う。今は定期テストで忙しいからともかく、それが終わったら城へ連れていき正式な取り調べを受けさせることになるだろう。

しかし、それよりも。

「ねえ」

ミドが感じていたのは、それとは別のことに對する 怒りだった。

昏睡状態。鼻や耳からの出血。呼吸器官の一時的な不調。腹部の傷が開いたのは、ただ単に暴れたからだろうが、それ以外はすべて呪剣のストレスによる拒絶反応だ。

「君程度の耐性しかない人間を呪剣聖にするなんて。 親は何を考えてるのさ？」

この少年は、間違いなく最低ランクのST耐性しか持ち合わせていない。呪剣の起動が出来るギリギリの数値だ。

断言しよう。先ほどのテスト、ミドならば一瞬で倒せる。スピー

ドのみならず、パワーですらあの程度のテストに負ける気はしない。それはミドが通常の呪剣聖よりもレベルの高い二桁順位であることもあるが、それにしただって、相打ち　ましてや、テストを倒してから反動でぶっ倒れるなど、三桁級の最下位どころか呪剣候補聖でもありえない。なのに教禍の出力も並以下。はつきりいつて、ポンコツもいいところだ。

「さあ。私は親のことをよく知らないのよ」

「っ……！　つまり君が、そんな体でもいいから、テストと戦うことを選んだってこと？　それとも、君程度の呪剣聖すらも必要とするほど、その街は困窮していたってこと？」

「いいえ。レーヴァには私以外にも十数人、私よりよほど強力な呪剣聖がいました。私は、先生に言われたことを実行しているだけです。テストを倒す。それが、私の存在理由ですのよ」

「そんなっ……！」

ミドは、声を荒げる。呪剣のストレスは、なんだかんだでやりすごせるほど甘いものではない。戦いの果てに身体と精神を病み、ストレスに耐えきれず自殺したり狂ってしまう呪剣聖は山ほどいるのだ。

ミドは、それを良く知っている。

「そんな体で戦闘してみなよ！　せいぜい一年、下手すればもっと早く限界が来て、良くても狂ったり廃人になるのがいいところだよ！？」

「それは貴方が関知するところではありません」

「どうしてそこまでのさ！」

フラットが、ゆっくりと体を起こした。身を乗り出したミドと向かい合う。それは別に、この口論に本腰を入れる為では無く、ただ単に、その方が声を出すのに負担が掛からないと判断したからだっただ。

「やれと言われたから戦闘する。それでは、不足ですか？　先生に言われた通りに行動する。それは、不自然なことなのですか？　ど

「こがおかしいのですか？」

「おかしいでしょ！　だって、だって……！」

言葉にならない。言葉に出来ない思いを持って余し魚のように口を開閉するミド。フラットはその様を酷く不思議そうに観察していた。

「分からないよ！　そんな理由で、君は……！　君には感情つてもが無いの！？　自分の意志つてものが、心つてものが無いの！？」

ミドは、自分でもよく分からない情動に襲われていた。どうして自分がここまで怒っているのか、ほとんど分かっていなかった。

「身体を動かす意志ならあります。ですが他の二つに関しては分かりません。戦闘するのに、それらが必要なのですか？　利害ならばともかく」

「当たり前じゃ」

はた、と、ミドの言葉が止まる。

「ならばミドは、何の為に戦っているのですか？」

「あたしは　あたしが」

その言葉に、ミドは答えられない。

理由？　利益？

自分にそんなものは無い。あるわけが無い。ミドより強い呪剣聖は沢山いるし、彼らは別に、他人の　がなければ戦えないわけではないのだから。

ああ、そうか。一瞬の自問に、答えが出るのは早かった。

だから、あたしは

「　ッ！」

ぱぁん、と高い音が鳴った。

「あ……」

茫然とした、ミドの声。

ミドの手のひらが、フラットの頬を張っていた。フラットは、回った首を弾かれた軌道にそって戻し、赤くなった頬を抑えもせず、

何故頬を張られたのか考えるように首を傾げた。

ミドは、自分の手を、化け物でも見るような目で見下ろして、

「うあああつ！」

逃げるように、部屋を出た。

ずばん、と派手な音を立ててドアを開け、そのまま跳ね返るように閉じる。

それを見たフラットは、やはり首を傾げたまま、無機物な言葉を
呟く。

「……頭部に損傷。数値換算する必要がないレベルです」

それは彼の習慣の一つである。自身の損傷具合は言葉にして伝えなければ、スムーズな？実験？の遂行に支障をきたすから。

しかし、やがて、ゆっくりとその手が上がり。

叩かれた頬ではなく、彼は無傷の胸を抑えた。

「胸部損傷が認識出来ません。数値換算、出来ません。……原因不明」

二時間目【聖物（せいぶつ）】（後書き）

教禍【聖物】

いわゆる神聖魔法。場合によっては神の血や十字架ワイン クロスなどの媒体も必要になる回復・聖別支援などを主とする教禍。

使用者は少なく、主として女性に多い。理系教禍だが、他の理系教禍との相性はそれほど良くない。

ただし、使い方によっては人体実験や死者の支配にも繋がり、その点ではもっともおぞましい教禍でもある。

休み時間【予習・告語（こくご）】

休み時間【予習・告語】

時間は、少しばかり遡る。

「……………」

クスノキ城執務室にて、マユは苛立たしげに机の上の資料を叩いていた。それは、一枚の地図と、何枚かの資料。

地図の端の方、ある一点に、赤いペンで×印がつけられている。

マユはその地図と資料を見比べ何やら考えこんでいる。

やがて、じっと見ているのに疲れたのか、肩から力を抜いて目元を指で揉む。

「だーれだっ？」

もみゆ、と。

突然、彼女の背後から伸びた手が、マユの胸の膨らみを優しく包みこんだ。細い五指が胸に沈み込み、慣れた手つきで揉み込む。

「あ、ちよつと大きくなりました？」

「呪剣解刀。 《エーミール》！」

マユは何も言わずに腰に帯びた短剣を抜き、背後の空間に無造作に突き立てた。

感触は無い。だが同時に、胸に触れていた手も離れる。

マユはチツ、と露骨に舌打ちして、前に回り込んだ相手に苛立ちの視線を向ける。眼鏡にセミロングの黒髪。人好きのする笑みを浮かべている。3C所属の呪剣聖、シーナ・ミナーチ。階級的にはマユより下ではある。

しかし、今の彼女は？もう一つの役職？としてこの場にいた。

「やだなーふくちょー、冗談じゃないですか。ミイラにしようとないで下さい」

「安心しろミナーチ。変態の標本は貴重だからな。大切に保存して

やる！」

「失礼な、わたしは変態じゃありません！　　　　　可愛い子なら誰でもいいだけです！」

「もつと悪い！」

額に青筋を浮かべながら、神経質に片眼鏡のずれを治すマユ。呪剣を鞘に納める。いちいち反応しては話にならないのは分かっているが、どうにも愚痴らざるを得ない。

「これだから『聖徒会』^{せいとかい}の連中は……どうしてこんなばかりなんだ」

「全くそうですよね。常識人なんて私だけなんで、いつも大変なんですよー」

頬に指を当てて、私今考えてますのジェスチャーを取るシーナ。白々しいことこの上ない。

聖徒会。それは、通常の分室体系とは独立した、軍事戦略専門の呪剣聖部隊である。表独自の連絡網による情報や任務の伝達から、場合によっては隠密などの裏方仕事まで請け負うその特性上、実力はともかくあらゆる意味で性質が悪い人種が揃っている。

「でも、私なんか会長とかに比べたら全然マシじゃないですか」

「黙れ口ごたえするな。標本にした後念入りに揉みほぐしてバラバラにしてやろうか」

畳みかけるように脅迫しながらも、シーナの台詞自体を否定しなかった理由は、まあ推して知るべきと言ったところか。それでもあえて言うなら、ルークハイスの呪剣聖層は、とてもとても厚いということである。

「とにかく。聖徒会役員、シーナ・ミナーチ。本題に移るぞ」

「……念入りに揉みほぐされるなんてそんな、いやらふい……」

短刀を投げた。刃はシーナの耳を掠めて跳び、部屋の隅に生けてあった花を斬り飛ばし、背後の壁に突き刺さった。それまで室長室に彩りを添えていた花は哀れ宙に飛び

そして、床に落ちる前に、茶色にくすんで、枯れ落ちた。

マユは笑った。

「やるぞ？」

「サーイエツサー！」

シーナ、見事なまでの最敬礼であった。厳密に言えばマユは女性なのでサーは間違っているのだが、これ以上話を反らせたくなかったマユは溜息一つ、机の上の地図を示す。

「……先程皇都から秘匿連絡が来た。曰く、三日前、クゾフィードのある地点で、極めて莫大な偏差値が観測された、とな」

偏差値。それは、呪剣やテストの教禍によって生じる、？本来あるべき現実が歪められた程度？を数値化したものである。大なり小なり呪剣聖なら感じ取ることができ、感知の教禍も存在する。種類や場所などによって違いはあるが、一般により強大なテストであるほど、より強力な教禍であるほど、その数値は大きくなる。

マユは、書類に載った地図の一点を差す。

「場所はここ。奴らの帝都『クサナギ』からもかなり離れた辺境だな。見ての通り、ルークハイスの分室駐屯都市の中では、クスノキが最も近い。恐らくは何らかの警戒をしることだろうが、それ以上は伝えられなかった。……つまり、貴様が来たのは、そういう意味だろう？」

「ええ、その為の聖徒会です」

こくん、とシーナは頷いた。

「聖徒会では、以下の事柄を確認しています。今月九日、午後六時十三分。クゾフィード帝都から西に大きく離れた小都市『レーヴァ』にて、極めて大規模な教禍の発動が行われました」

つらつらと、シーナは資料一つ持たずに暗唱する。

「観測された偏差値は最大で八十近く。平均を取ると七十後半と思われるています」

「八十、だと……？」マユが明らかに怪しげなものを見る目をした。「……信じがたい数値だな。およそ、普通の人間が教禍で出せる偏差値の限界を超えている」

「聖徒会は情報の精度を確認しています。また、どのような術式かまでは特定出来ませんでした。が、教禍は詠語魔法だと推測されています」

「詠語……召喚か？」

「そこまで確定は出来ません。ただ、大規模な詠語の発動といえば真つ先に高位の？外神？の召喚が思い浮かびますが、八十といえはかつて、かの【キング牧師】が召喚された時の偏差値に匹敵・凌駕します」

「……」 I have a dream ”に匹敵すると、そう言い
たいのか。……悪夢だな」

「はい。よって我々は各隊に、極めて強力な外神が、今後クゾフィ
ーダ間との抗争にて出現する可能性を示唆しています」
「そうか。……それで、それだけか？」

マユの問いはいささか、退屈そうなものだった。確かに危険だが、
情報が曖昧すぎる。今すぐ何らかの対応が出来るわけでもない話が
そこまで重要なのか、という苛立ち混じりの対応だ。

しかしシーナは、首を振る。

「いいえ。……むしろ、ここからが本題と言った方がいいかもしれ
ません」

「何？」

彼女は、机の上にあった資料の上に、懷から取り出した紙をもう
一つ重ねる。資料に載っているものより、数段大きな地図だった。

この周辺　クゾフィーダとルークハイスだけではない。大陸全て
を網羅する地図。

「おい、何を？」

シーナは淡々と、そこにペンで×印をつけていく。

ルークハイス西端の港、クエンガ中央の山脈、ワクタ・シツリに
広がる広大な平原の一角、セーテージの旧王都、どこの国にも属さ
ない未踏の砂漠地帯、そして、ここクスノキのすぐ隣の森。シーナ
が付けた×印は十以上に昇り、そしてその印は一つたりとて、クゾ

フイーダ国内にはない。

「……何だ、これは？」

「レーヴァでの教禍反応と全く同種の偏差値が観測された場所です。一つ一つの反応は大本と比べると極めて微弱ですが、連鎖的に発生したので感知できたそうです」

「この広範囲に展開する教禍？　流星群を召喚して降らせました、とでも言うのか？」

「それも、あり得ない可能性ではありません。これは未確認ですが……レーヴァでは、『トクシンクラス』と呼ばれる特殊呪剣聖部隊が養成　研究されていたという話もあります」

「……トクシンクラス？」

「これに関しては、不本意ながら詳細は完全に不明です。国からも半ば見限られた研究施設だったようで、情報がほとんどありません。

とにかく間違いないのは、クゾフイーダの領内から、全世界に向けて教禍が　攻撃が放たれたということ。意図は不明ですが、その危険度は改めて説明するまでもありません。聖徒会の決定を伝えます。速やかに、近辺の偏差値発生地点に調査隊を派遣して下さい。……会長の言葉を伝えます」

そしてシーナの口から、まるで別人としか思えない声が　？全く別人の声？が出る。

「『まだ呪剣対策がさほど発達していない時代』」

奇妙な声だった。声というよりは、音。まるで、大量の金属の破片を擦り合わせて出したような音が、途方も無い精密さで、均整の取れた人間の声に無理やり形作られているような。

「『テストは、人類の天敵だった。外敵であり、故敵であり、強敵であり、仇敵であり、頸敵であり、怨敵であった。故に、人々は皆それに抗う為に手を取り合い協力した。一つの敵に対して団結して挑むのは、人間がまだ猿だった頃からの習性だ。テストは人類の対極であり　そして、それゆえにあらゆる人間を？人類？と一括りに纏め上げられる存在でもあった』」

しかし、今は違う。とその金属音は言う。

「『現在。呪剣対策も普及し、より強力な教禍が開発され、テストが必ずしも脅威とは言えなくなった時代。どころか、絶賛遠征中の君の所の室長のように、テストを単位を落とす獲物としか思っていない呪剣聖も大勢いる。』」

天敵に対して向けられていた力は、持て余せば間違いなく同類に向く。』」

最後の一言は、シーナ自身の声も重なった。

「『呪剣戦争が、本当の意味での呪剣戦争が始まる』」

淡々と、金属音がそう告げた。たつぷり一拍置いて、マユが頷いた。

「……相変わらず、勿体つけた言い回しを好む奴だ」

「まあ、聖徒会長は聖徒会長ですからね。……あ、それとこれは私自身の報告なんですけど」

聖徒会としての仕事を終えたからか、シーナの口調はかなりラフなものになった。

「何だ、言ってみろ」

通常業務に戻ったマユが、書類を整理しながら答える。

「さっき言った観測地点。森の中で。その辺りで、ミドが妙なの拾ったみたいなんです」

「妙なの？ ネコでも拾ってきたか？」

「いえ、人間です。すつごく変な人間」

「お前に変と言われるとは相当だな。……もしかしてあれか？ あのひよろ長い」

何を表現しようとしたのか、マユが曲げた手首をひよろひよろと横に揺らす。何も表現できていないが、なんとなく雰囲気伝わったのか、シーナが答えた。

「え、見たんですか？」

「まあな、カレキシの馬鹿が単位を忘れたのを届けに、……不法侵入してきた」

「それはまた……」半目になるシーナ。「……捕えなかったんですか？」

「この時期に、一般人相手にどうこうしている暇はない」

「……あ、やっぱり一般人ですよ、彼」

意図せず聞きたかった答えを得られて、シーナが同意を求めるように笑う。何を馬鹿な事を、と言ってマユがペンを回した。

「当然だろう。短刀を持つてはいたが、あれは呪剣でも何でもない、普通の武器だ。それで我々に害を与えられるとすれば、よほどの達人か、生身で教禍が扱える、高位の人型テストくらいのもんだ」
「流石にそれはありませんね。それだったら私だって気付きますし」

ふざけたように笑うシーナ。そして言葉にこそすれ、マユもまた、そんなことが実際に起きるわけではないと思っていた。

慣れたが故の油断。着実に、不穏の影は近づいていた。

定期テストの刻まで、もう残された時間は無い。

休み時間【予習・告語（こくご）】（後書き）

エーミール。鼻持ちならない少年。正義を背負う物。標本の専門家。

クジャクヤママユ。少年の日の想い出。

三時間目【詠語（えいご）】

三時間目【詠語】

見よ、血の雨が降る。

見よ、刃の雨が降る。

街全体に、血で出来た刃　血刀が降り注ぐ。その数は幾十、幾百を超え、本物の豪雨の数にすら匹敵しかねない数と勢いで、世界を決っていく。

少女は、ただそれを眺めている。

やがて血刀の雨は止み、その後、……街に歓声が生まれた。それは、普通の人々の声だった。血の雨に守られた人々の声だった。

街を埋め尽くしていたテストの群れが、一息に討伐されたことを喜ぶ、人々の声だった。

少女は、ただそれを眺めている。

歓声も、血の雨も、まるで少女の意識に入らない。

何故なら彼女の目の前には、それらを見せざるをえない？ものが山ほどあったのだ。

かつて彼女が母と呼んでいたものが、父と呼んでいたものが、祖母と、祖父と、姉と呼んでいたものが、？それ？としか形容出来ないような　血の一滴まで絞り尽くされ、乾いたミイラになって、転がっていたのだ。親も、家族も、馴染みの使用人も全て、全て。彼女の家にいたもの、ほぼ全て。血刀が降り、血統が途切れたと、後の世の者は語った。

『なんだ、こんなものか』

血の雨と共に、ふと、まるで失望するかのような　失望そのものの言葉が降ってきた。

少女の目の前に剣が突き刺さった。血で出来てはいない。真っ黒

な、刃すらあるか怪しい、鉄板のような剣。

『契約破棄だ。お前にやるよ』

聞こえて来る声に応じるように、少女が手を伸ばす。

少女の華奢な指先が呪剣に触れ、

呪剣だったはずのものは、その瞬間に真っ赤な牙に覆われた口に
変貌し、襲い掛かる。

少女は悲鳴を上げた。

目覚めたフラットは、頭がまともな思考を取り戻すまでの数分間、
じっとベッドに寝て、視界が明瞭になった瞬間を見切って滑らかに
身体を起こした。窓から見る外はまだ薄暗く、人の気配はあまり感
じられない。

身体機能は、おおよそ回復している。だが若干の空腹と渴きを認
識し、フラットは立ち上がった。食事は家主に無断で取るわけには
いかないが、水くらいならあるだろう。

フラットが寝ていた　　というか看病されていたのは、家具を見
る限りミド自身の寝室らしかった。だとしたら彼女は、一体どこで
寝ているのだろうか。

私は、これからどうすべきなのだろうか。

そんなことを考える。まるで人形か何かのように思われているフ
ラットだが、かといって本当に何も考えないわけではない。ただ、
その価値観が常人とは大きく異なり、その感情が極めて希薄で、そ
の思考形態がかなり独特なだけだ。

真っ先に思い浮かぶのは、元いた場所に帰る、という選択肢だ。
どこにあるかは分からない。そもそも地図を見たことが無いからだ。
彼は家族なんて知らない。会ったことが無いからだ。彼の世界と言
えば、レーヴァだけだった。

『お願い、逃げて』

頭の中に、声が響く。

『ここから逃げて、そして』

いや、ただの記憶だ。ただの、過去に起こった事実。だがそれが、フラットの思考に、大きくノイズを落としている。

自分がどうしてあんな森の中にいたのか、フラットには分からない。だが、ああいった台詞の跡に移動したことを考えれば、彼女が何かしたのだろう。彼女はレーヴァにおいて、フラットよりも数段上の領域にいた。

分かりません。

いくら思考しても、答えは出ない。

私には、何も

そんなことを考えていたフラットの耳に　小さな、しかし恐ろしげな悲鳴が聞こえた。

「……………」

居間の方からだ。この状況で悲鳴が聞こえるとしたら、その主はおおよそ一人しかないだろう。そして悲鳴というものは、大抵の場合、発言主が何らかの脅威に襲われている時に発するものである。フラットは、無音で立ち上がった。

ミドの家は、少女が一人で住むにはいささか以上に広い。使われていない部屋がいくつもある。実際に使われている場所はごく僅かで、悲鳴の上げられた部屋を探すのは容易だった。

居間へと続く扉を開ける。

予想通り、部屋の中にはミドがいた。

昨日、あのままここに寝たのか、脱ぎ散らかした聖服が周囲に散乱している。着衣も乱れ、はだけたシャツから露わになった肩口と首は、寝汗でぐっしり濡れていた。ミドは荒い息をつきながら、手にしたタオルケットと、もう一つの何かにしがみつくように身体を縮こめていた。解かれた黒髪が、まるで流れる水のように、頬から首にかけてひつついている。

「ミド。どうかしましたか？」

呼びかけるも、返答は無い。フラットは淡々とミドの正面に回り込んで、身を沈める。

「ミド？」

「……………」

虚ろな眼。明らかに様子がおかしい。フラットがよく観察すると、ミドの片手が握っているものに眼が行った。鞘に収まったレッドブレードだ。

「ミド。たとえ鞘に入った状態でも、呪剣を握ったまま睡眠するのは良くありません」

手を伸ばす。呪剣と呪剣聖は、単なる剣とその使い手という以上に、極めて緻密かつ濃密な繋がりがある。霊的、精神的という若千オカルトな表現になるが、いわば魂のレベルで繋がっていると言ってもいい。呪剣と契約するとはそういうことだ。

とにかく、フラットが知っているのは、自分のような例外ならともかく、ただの呪剣聖が呪剣と直接接触したまま寝るのは良くないということだ。それでは十分な精神的休息がとれない。

取り上げる、というほどでなくても、彼女の手から引き離そうとして

「っ！」

びくりと、ミドが動いた。

床を手ではたき、飛び跳ねるように背後に下がって、すぐにソファーにぶつかる。呪剣を堅く握った手は、まるで玩具を離そうとしない子供のよう。普段の鋭い動きからはかけ離れた、無様な動作だった。

「……………あ」

しかし、その自身の激しい動作によって、ミドは意識を取り戻したようだった。ゆっくりと瞳に焦点が戻ってきて、フラットの無表情を見て、

「あ……………ああ、そっか。今は、君が、いたんだっけ……………」

そんな呟きと共に、かたん、と呪剣を取り落とした。

「ミド。大丈夫ですか？」

最初の目的が達成されたことでフラットは立ち上がった。見下ろして、淡々と聞く。

「悲鳴が聞こえましたが」

「……ううん、大丈夫。起こしちゃった？」

「いえ、私はその前に起床していました」

見上げて笑うミドの声は、弱々しい。

「気にしないで。割とよくあること、だから……」

そこでミドは、自分の格好に気付いたようだった。慌ててはだけた肩を引き上げ、顔を赤くして立ち上がろうとする。だが、すぐに足がもつれた。

「あ……」

それを、まるで分かっていたかのようにフラットが受け止めた。彼は至って平常な態度で、ゆっくりとミドをソファーに座らせた。

ミドが何か、弁解のような言葉を放とうとして、しかし、滑らかな動作でフラットの額が額に当たったことで遮られる。ソファーの背もたれが邪魔をして下がれない。ばさりとミドの長髪が広がった。ミドびびる。フラット無表情。

「みつ……！」

「手足の痙攣。それによるふらつきに、思考能力の鈍化。いわゆる知恵熱までは出ていないようですが、典型的な呪剣疲労の症状の一つですね。一晩中握っていれば当然です」

呪剣を握っていた腕を取る。僅かに指先が震えていた。そしてフラットは、撫でるようにそのまま腕を擦り上げて、ミドの肩に触れて、

「っ！」

げし、とその顔面を、ミドの足裏が蹴っ飛ばした。

「い、い、いきなり何しようとしてんのっ！？ 細切れにするよ！？」

自分の身体を掻き抱いて、ミドが叫んだ。ぜえ、はあ、と荒い息

で立ち上がる。どうやら眼は覚めたらしかった。ふむ、と蹴っ飛ばされたフラットは起き上がると、なんら悪びれない様子でミドに応える。

「偏差状態の接触感知はコンディショニングの基本ですが。深刻な異常は無いようですね」

「わ、分かったから！ いいからあっち行って！ 着替えるから！」

「了解しました。……水分摂取も、ストレス緩和には効果的です。

飲み物をお持ちしますが、どうしましょう」

「好きにしてっ！」

怒りと呆れと恥ずかしさがないまぜになった表情、平たく言えば半泣きのミドが、やけっぱち気味に叫んだ。

「肯定と解釈しました」

背を向けて、フラットは居間を出て行った。

「……フラット」

「何でしょう」

そして。

汗ばんでいた肌着を替えて聖服を着て、乱れた髪も縛り直したミドが、静かに言う。

机を間に挟んで、カップから水を飲んでいたフラットが首を傾げる。何か間違いをしたのだろうか。適当な容器を見つけ、そこに水分を注いで持ってきただけなのだが。

「これは何かな？」

「水分です」

「具体的にはどこの？」

「水道から直接注いだものです。清潔な水道が完備していましたので」

「……ねえ、フラット。百歩譲ってお茶とか持ってこなかったことは責めないよ。でも」

机の上に突っ伏して、ミドはそんなことを呟いた。先程から一口

も水を飲んでいない。額を載せながら、掴んだカップをフラットの方に押し戻す。

水が入っているのは、金属製の小さめの器だった。ただし 内部に目盛がついた。

「とりあえず、計量カップで水を飲むのはやめよう？ ね？」

「これはその為のものではないのですか？ 現時点で必要な水分量ちようどを測定し、摂取できる容器かと思っていたのですが。間違えてしまったのなら申し訳ありません」

といいながらも、中に残っていた水を飲み干すフラットだった。

「いや……間違ってるってほどでもないんだけどさあ……そうじゃないんだけどさあ。君には教えることが山ほどありそうだねえ……」
「なんだかんだいいつつも諦めたのか。ミドもまた、カップを雑に持って上を向き、だーっと口に流し込んだ。あー、と脱力しきった声で椅子にもたれかかる。

「うん、なんかラクになった。……ホントに楽になるね」

最初こそ適当だった口調が、少しだけ驚いたようなものになる。
「脳髓への負荷と大げさに言ったところで、結局ストレスというものは肉体へのダメージにすぎません。適当な食事、水分摂取はストレス解消の為のもっとも効果的で原始的な手段です。私はそう教わりました」

「……詳しいんだ」

「ストレス軽減は、全ての呪剣聖にとっての大きな課題でしょう。私は一際効率が悪かったので、他の方々よりも更にこういったことを覚える必要がありました」

ミドが、なるほど、と相槌を打つ。それから少しばかり考える仕事をして、意を決したように切り出した。

「フラット。……考えたんだけど、君が呪剣聖だつてこと、他人には言わない方がいい。少なくとも、あと数日は」

「貴方の命令ならば受け入れます。しかし、何故ですか？」

「……あと、三日か四日くらいで、定期テストが始まる。毎回規模

は違うけど、まる一日近く続く都市の防衛戦だ。君が呪剣聖だと分かったら、たぶん君の事情がどうあれ、それには参加させられる。出来る限り戦力は強化したいからね。……でも、君は戦っちゃいけない。君がそんなものに参加したら、間違いなく死んじゃうよ」「間違いなく、という表現は訂正して下さい。教禍を使わなければ半日は継続戦闘が出来ます」

「教禍使わない呪剣聖なんて雑魚同然じゃない」

「対人ならば必ずしもそうではありません」

「なんで定期テストの日に人と戦う必要があるのさ？ とにかく、黙ってて。あたしの立場的にはいつまでも隠しておくわけにはいかないから、定期テスト終わったら流石に報告する。けど、それまでは」

「はい。ですが、テストを倒すのは私の最優先事項です。目の前にテストが現れたら、戦うことを止めるわけにはいきませんが、構いませんか」

「……まあ、昨日のようなこともあるから、それは仕方ないけど」
眉をひそめて、ミドがしぶしぶ頷く。

「でも、自分から、たとえば自分からテストに向かって行くとか、そういうのは禁止ね」

「分かりました、守りましょう」

「……………」

あまりの即答に、ミドが眼を細めるも、疑っても無駄だと思いつぐに立ち上がった。

「朝ごはん、食べようか」

「お願いします。実を言うと空腹です」

「うん、まあ、大体そんな感じの返答が来ることは予想ついてたけど。でも、もうちょっと遠慮してくれない……………」

「がくりと肩を落としてから立ち上がる。もう手足のふらつきも無い。歩いて行こうとして、ふと、止める。」

「…………フラット」

「はい、何でしょう」

フラットに背を向けて、消え入るような声を出した。

「昨日は、ごめん」

「損傷は既に完治しています。気にするほどのことはありません」

「……そっか」

ミドは振り返る。消え入るような儂い微笑みが、朝日に照らされた。

「ありがと。ごめんね」

「……？」

フラットは、その言葉の意味が理解出来なかった。

「……フラットくん、それは何かな？」

「ただ作って頂くだけというのは良くないかと思われるので、調理の手伝いをしようかと」

「さも当たり前のように包丁を逆手に持つてるけど、料理の経験は？」

「ありません」

「うん。引っ込んでろ」

そんな一幕はあったものの、朝食を滞りなく済ませた後、ミドは登城し、フラットは家の留守を任された。

一度不法侵入してしまった以上、許可を取るのは難しそうだし、何より呪剣聖の中にいることでフラットが呪剣聖であることがバレては大変だとミドが判断したからだった。

「暇なら本でも読んで。夕方くらいには帰って来るから」

とミドは言ったので言われた通りに本を読もうとしたのだが、彼女の持っている本はひどく偏っていて、フラットの求める、周辺の地形や地図などが載っているものはほとんど無かった。礫土呪剣聖の偉人の伝説をまとめたものであったり、極地戦闘レベルの戦術論、戦闘技術、そんなものだけだ。クレサトという少年に轢女と呼ばれ

ていたが、まさしくそういうタイプらしかった。轢土教禍は全教禍の中でも近接戦闘に特化した魔法である。

そんなわけでフラットは、時々思い出したように本を見る（読む、ではない）以外は、ひたすらにぼーっとしていた。それはもう、これでもかというくらい何もなかった。それでも苦痛の欠片も見せない彼の精神性は流石と言うしかないだろう。

そんな状況が止まったのは、昼の少し前のことだった。

「……………」

カラアン、と。入口のベルが鳴った。フラットが顔を上げる。

「す、すみません、ミド・カレキシさんは、おられませんかあ……………」
どこか聞き覚えのある声が、玄関から聞こえた。

誰か来た時の対応は、聞かされていない。しかし、誰かが質問している以上、それには答えるべきだろう。フラットは立ち上がり玄関へと行く。ドアを開けると、そこには一人の少女が立っていた。

「ふえっ!？」

その少女は、フラットを見て驚いているようだった。両手を口元に遣り、眼を白黒させて、明らかに驚愕で言葉を失っていた。

「ミドは現在登城しています。伝言程度なら承りますが」

「え……………あ、いえ、その……………え!？」

フラットやミドよりも幾分か年下の少女である。10歳前後だろうか。驚いた拍子に、背中まである金髪がふわりと揺れた。質素な白いワンピース。腕には、籠に入った花を持っていた。

声もそうだが、どこかで見た顔である。少し考えて、思い出した。「もしや……………昨日、テストに襲われていた方ですか？」

「え、あ! は、はい! そうです!」

ぱあっと少女の顔が輝く。どうやって切り出したものか迷っていたのだろう。

「あ、あのあの、だから、昨日、見たら貴方がいなくて、えっと、でもカレキシさんという方が助けてくれたって聞いて、その! おかしいなって思って、でも、その……………」

「落ちついて下さい。要領を得ていませんよ」

「だから、わた、私……」

「……………」

どうやら言ってもどうしようもないらしい。疲れているのだろうか。このままここで話していてもラチが開かないとフラットは判断した。

きい、と大きめに扉を押し開ける。同時に、少女に対する警戒レベルを引き上げる。他者の家に勝手に余所者を上げる以上、その程度の対応は必須だろう。自分がそもそも余所者であるという認識は見事なまでに棚に上げた。

「疲れているようですね。中で休めますか」

少女はイリナと名乗った。

彼女は、フラットが普通のコップに入れて差し出したただの水を、未確認飛行物体か何かのような眼で見つめていたが、何を勘違いしたのかやがて持ってきた花を生けた。とにかく落ちついたのでまあいいかとフラットは何も言及しなかった。

落ちついた少女が語った内容は、次のようなものだった。

昨日彼女は、襲ってきたテストから、見知らぬ少年に助けられた。だがどういうわけかその途中で気を失って、目覚めた時にはその少年はどこにも見当たらない。どころか、彼女を助けたのはミド・カレキシという女の呪剣聖だと言う。

少女には何が起こったのか分からなかったが、とにかく姿を消した青年を探そうと思った。そこでとりあえず、彼女を助けた？らしい？ミド・カレキシを訪ねることに決めた。

「でも、いきなり、フラット……さん、がいるとは、思わなくて、びっくりしました、です」

「成程、それであれほど動揺していたのですか。驚かせてしまって申し訳ありません」

「ひつ、いえ、こちらこそ、ご、ごめんなさい！」

イリナの、丁寧を通り越して、臆病にすら思える態度に、フラットは若干対応を考え直す。謝るのは良くないらしいと学習。

「怪我などはありませんでしたか？」

「え、あ、はい。大丈夫です。……あの、一つ、聞いてもいいですか？」

「答えられることならば」

「えっと、フラットさんは呪剣聖……なんですか？」

「いいえ。私は呪剣聖ではありません」

「え……そうなんですか？」

「はい。私はミドの遠縁の親戚で、今は訳あってここに居候させて頂いています」

驚くイリナに、フラットは迷い一つせずに頷いた。さっそく約束を守ったフラットであった。無意味に嘘をつくのは余り良い行為ではないが、イリナへの誠意よりもミドの命令の方が優先度は上である。

もともと　そこまで嘘というわけでもないのだが。

「……すごいんですね！　呪剣聖でもないのに、テストを倒せるなんて！」

イリナは、フラットの言葉を怪しむなどということは全くなく、むしろ声を弾ませた。

確かに、一般人でテストを倒せるものは希有だ。一対一なら尚更である。確かにいることはいるが、大抵は年季に年季を重ねた巖のような外見の男である。フラットの線の細い外見はそう言った印象とはまるで正反対だ。

「テストを倒すことが、私の存在意義です」

「ほあ……」

淡々とした態度がストイックに映ったのか、目をキラキラさせてフラットを見つめるイリナ。予想していない方向に誤解を受けている気がしたが、自分の立場ではどうしようもない。

フラットはそのときふと、大切なことを思い出した。

「イリナ様。一つ質問してもよろしいでしょうか」

「あ、はい！ な、何でしょうか！？ さ、様！？ そ、そんな様なんてわた、私」

敬称に目を白黒させるイリナ。敬称も良くないらしいと学習しつつ、気になったことを聞く。

「あのテストは、どうやって出現したのですか？」

「え……あ」

少女の言葉が途切れる。考えてもいなかったらしい。当然だ、昔ならいざ知らず、呪剣聖でもない限り、一般人にはテストと出会う機会なんてないに等しいのだから。

テストの発生条件は説明されていない。つまりそれは逆に言えば、人のいる場所でテストが発生することがほとんどない、という事実を差す物でもある。

「わ、私は……」

かたかたと、華奢な肩が震え始める。よほど恐ろしかったのだろう。なんでもない日常から一転、本物の殺意に晒されたのだから。しかし彼女にとっては残念なことに、フラットには、そういったものを介する神経はない。

「う……あ、あの、私、ちゃんと出る瞬間は見なくて」

「よく思い出して下さい。どんな些細なことでも構いません。不審者がいたなどは」

「あ、えっと。……そのちよつと前に、通りすがりの呪剣聖の人に、飴もらいました。ちよつと格好良くて、アクセサリーをいっぱいつけた人に」

「格好良くて、アクセサリーをいっぱいつけた人、ですか。分かりませんね」

「あ、で、でも格好良いつていつても、あのときのフラットさんの方が……」

「は。……なんでしょう？ 私が何か？」

「……え、あつ、なつ何でもありません！ ごめんなさい！ ごめ

んなさい！ ああもう私何言って……！」

イリナが俯いて顔を隠す。耳まで真っ赤に染まっていた。相も変わらず良く分からない行動をする少女だとフラットは繰り返し思った。害も無いので放っておくことに決めた。

「……ご、五年後に期待って言われました。どういう意味なんでしょうか……？」

「さあ。私には理解出来かねますが、恐らく、それは関係ないかと」「そ、そうですね……ごめんなさい」

そういった情緒は二人ともまだ持っていない。この場にミドがいれば誰かおおよそ見当がついていたのだろうが、それは無い物ねだりというものだろう。

イリナが口元で両手を合わせる。怯えも引ききらないままだが、健気にその時の記憶を掘り起こしている。

「……あの、？大きく？なりました」

「大きく……とは？」

「はい、えと」言葉を探るように視線を巡らせる。「目の端で見ただけなんですけど。親指くらいの大きさの何かが道端にあったと思ったら、一瞬で大きくなつて、あの姿になったんです」

「……つまりあのテストは、どこからかやってきたとか、たとえば上から降ってきたとか、召喚されたではないと？」

「はい。私の、覚え違いかもしれませんが……」

「ふむ」

考え込む。いくつか可能性は想定出来るが、どれも仮定以上の意味は無い。実はテストはそうやって発生するのだ、という新事実の可能性と、あのテストの持つ教禍であるという可能性。後者の方が確率は高いだろうが、そうならば分かった所で何の意味もない。教禍分析にはなるかもしれないが、フラットの専門は実戦であり研究ではない。

「成程、分かりました。協力ありがとうございました」

「あ、いえ、ごめんなさい、ちゃんと覚えてなくて」

頭を下げ合う二人。

「さて、これで私の用は済みました。帰られますか？」

「え、あ、はい。……あ」

咄嗟に答えてしまい、すぐに後悔した表情になるイリナ。だがフラットはそんなことには気付きもせず、話が終わったならと立ち上がる。フラット自身の行方を知るといふ、相手の目的は果たされているはずだという判断もあった。

「あ、あのー！」

ふと、意を決したようにイリナが立ち上がった。

「はい、何でしょうか」

「今更ですけど、助けて頂いて、ありがとうございました！」

イリナは、まるで前のめりに倒れるような勢いで頭を下げる。フラットはと言えば、どうしてそんなことをするのか分からなかった。「私は、自らの行動原理にそってテストを倒しただけです。感謝を受ける謂われはありません」

ふるふる、とイリナは首を振った。フラットの言葉を否定するように。訴えるように口を開く。

「行動原理とか、難しいことは、よくわかりません。けど……とっても嬉しかったです。いきなりのテストに、みんなは逃げていったのに、フラットさんだけが来てくれたこと」

「……………」

ふわりと笑んで、少女は言った。

「感謝させて下さい。テストに勇敢に向かっていったフラットさんに」

分かりません。

イリナが帰った後、フラットは部屋の中で一人、そう思考した。自分はテストとさえ戦えば良かったはずなのに。ただ戦っていればそれで良かったはずなのに。考えなくていいことばかり考えてし

まう。考えざるを得ない事態ばかり起きている。

落ちつかない。落ちつけない。落ち付きようがない。

胸に違和感がある。痛みではない、実害の伴わない痛み。ざわざわ、ごろごろというような擬音で表現するしかないような、奇妙な感触だ。いつまで経ってもそれが消えない。レーヴアにいる時はほとんど無かった、いや、唯一？彼女？と接した時にのみ感じた、奇妙なざわめきに似ているような気もする。

たとえばミドに頬を張られた時に、胸を襲った痛みは何なのだろう。

たとえばイリナにお礼を言われた時に、胸に宿った温かさは何なのだろうか？

理解出来ない、分からない。分からないものには触れるべきではない。分からないものには接するべきではない。そうじゃないのか。私は、一体どうすれば

からあん。

「……………」

フラットは顔を上げる。玄関のドアベルがまた鳴っている。

またか。それとも、他人の家というものはみんなそうなのだろうか。個人の家というものを知らないから分からない。

こんこんと叩き続けられるドアの音に、急かされるように玄関に出る。

「どなたでしょうか。家主であるミドならば現在出掛けていますが

」

フラットの言葉が止まった。

フラットの言葉が、自分で止めたのではなく、ただ、凍った。「久しぶりだね、十三番。いや、今はフラットって呼ばれているんだっけ？」

そこにいる男は、低い唸りのような笑い声を交えながら、声を出

した。

「……驚きました。どうして貴方がここにいますのか？」

疑問を投げかけながらもフラットは、自らの精神の中にあつた動揺が、急速に冷えて行くのを自覚していた。混乱と困惑が、まとめて氷水で押し流されるようなイメージ。

その心理状態は、人が安心と、あるいは 諦観と呼ぶものだつたかもしれない。

「？先生？」

「うん、覚えていてくれてうれしいよ」

そこにいたのは、無精髭を生やした壮年の男だつた。パサついた髪を油で強引に撫でつけ、もう春だと言うのに、いささかよれた、白いコートのようなものを着ていた。

『先生』の元の皺が弧の形に歪んだ。しかし、彼は笑っていない。「君達が逃げてしまったあの時、僕はまさに身をも引き裂かれる思いだつたんだよ。だからこうして探しに出ただけけれど、最初に見つけたのが君で本当に良かった」

男が話す言葉は、極めてスムーズにフラットの脳裏に染み込んでいく。何百と言われた命令を思い出す。何百と聞かれた質問を思い出す。何百と繰り返された確認を思い出す。

全てが終わる。

フラットは考える いや？引き出す？。このようなシチュエーションの時には、どのような言葉を言えばいいと教えられたのだったか。

「私も、会えて嬉しいです」

もう、何も考えなくていい。私の全ては、この人間が持っているのだから。

「先生に、私は従います。ここを出て、レーヴァに戻るのですか？」

「いや、それがそうもいかないんだ。すまないね」

だが、ゆるやかに男が首を振ったことで、フラットの思考状態に

また、乱れが走る。

「あの馬鹿女が君たちを逃がしたことで、上の方は大層お怒りでね。実験兵器である君たち『トクシンクラス』を逃がしたのももちろんそうなんだが、なんでも、その行為が攻撃と取られて、各国間の関係が悪化していると言ったよ。分かるかな？」

「はい。分かります。確かに、全世界に自国の呪剣聖を前触れなしに送るという行為は、そうとられても仕方ありませんね」

「その通り。優秀な聖徒を持って僕は幸せ者だ」

男は頷く。そして、浮かべていた鷹揚な笑みが、禍々しいものに変わった。

「だが、僕はこう思うんだよ。どうせ世界はクゾフィードの元の一つになるんだ。今更何を取り繕ったって仕方ない。むしろ動くのは早ければ早いほどいいんじゃないか、とね」

「……」

「そして僕は君たちの有用性も証明したい。既にあの馬鹿女……『エスペラント』も僕の手の内にある。堕ちている分効率的な運用は出来ないが、戦力というだけなら、アレ一つで十二分だ」

いっそ無邪気な笑みすら浮かべて、男は楽しそうに語る。その口から出た名前に、フラットが僅かに反応した。

「話が見えません。先生は一体何をするつもりなのですか？」

「まず、君のことを知ってしまったミド・カレキシを生かしておくわけにはいかない」

「！」

今度こそ、フラットの目が見開かれる。だが、男はそれに気付かない。声こそ穏やかだが、彼の表情は、微笑みは狂気に彩られている。追い詰められた人間特有の、瞳孔すら開いているのではないかと思わせるぎらぎらした瞳が、フラットを見る。

「もつとも、十三番は何もしなくていいよ。どうせ君は戦力にならない。幸いもうすぐ定期テストの時期。隠蔽工作は極めて簡単だ。なんなら、この都市ごと滅ぼしてもいいな。ルークハイス

の分室駐屯都市を一つ壊滅させる。僕が開発したトクシンクラスのデモンストレーションには十分だろう。そうすれば、僕のかつての地位だって取り戻せるかもしれない」

くつくつ、ぐっぐつと、泥が沸騰する様な音を立てて男が笑う。

押し殺しているわけではない、これが彼の普段からの笑い声だった。

「」

フラットは何も言わない。彼は普段から余計なことは何も言わない いや、そうではなかった。

彼は何も言えなかった。

ただ、言葉を失っていた。

「調べるのはこの辺りよ、ミド。気を引き締めてね」

「……………うん」

「ミド？　ねえ、聞こえてる？」

「……………うん」

「ミド。…………ミドッ？」

「……………うん」

「……………えいつ」

「あぎゃんっ!？」

ミドが跳び上がった、触られた部分を手で抑えながら振り返る。

背後には、手指を酷く滑らかな動きでくねらせるシーナの姿があった。咄嗟に数歩離れて、赤面して叫ぶ。

「ど、ど、ど、どこ触ってるのさ!？」

「ああ、どこに触ったのか言ってくれないかしら？」

「変態！　もれなく無駄なくまなく変態！　セクハラ反対！」

「反応は合格点だけど、もうちょっと色っぽい声出せればねえ……………」

「スルーしないでよ！　もーっ！　もーっ！」

「そうね。あえて言うなら、いつも胸じゃ芸が無いかと思って」

「誰に対して芸をしてるのさ！」

「誰というわけでもないけれどね。それよりこの場合は、ゲイというよりレ」

「あーあーあー聞こえないー！」

ミドは突っ込み代わりに足元にあつた石を蹴飛ばす。下手に叩く為に近づいたら更にセクハラされかねなかった。それをひよいこらと避けるシーナ。蹴飛ばす蹴飛ばす蹴飛ばす。避ける避ける避ける。「やれやれ仲が良いねえ、お二人さん」

それを見て、呆れるようにその場にいたもう一人が、薄笑いを浮かべながら肩を竦めた。

「俺としては、両手に華かと思つたら華は華でも百合だった……E教室に帰ってー……ってな具合なんだがよ」

「あらあらそれはごめんなさい。で、本音は？」

「ぶつちやけ超眼福ですイエー！」

ぐつ、とサムズアップする青年に、ミドが呆れたようにジト目を向ける。

「……でいうか、なんで君 ユージン・クドーさんまで来てるんですかあー？」

「んなの決まってるんだろ、ミドちゃん。単位稼ぎ もとい、俺の海より広い親切心からの、点数稼ぎだよ」

「あんまり変わってないわね、それ。半ば強引についてきただけでしょ、貴方」

「何だよあーシーナちゃん、俺には態度がお堅いぜー」

「可愛くない子には厳しいの、私」

「こつ見えても結構純情なんだぜっ？」

「うわウザッ」

「率直に言つてウザいわ」

「うわひっでー、とあまり傷付いていない風に両手を上げるユージン。ちゃらちゃらと体中につけた多種多数のアクセサリーが揺れる。」「んで、この辺なんだろ、シーナちゃん？ さっさと始めようぜ」

つつつても、何するんだっけ？」

「テストの搜索よ。いわゆるサーチ&デストロイって奴ね」

彼らが今いるのは、クスノキから少し離れた森の中だ。ミドがフラットを拾った場所よりももっと奥の方である。

定期テストはあと数日以内に起こると言われている。それに備えた、既に発生している街周辺のテストの索敵及び討伐。それが今回の彼らの表向きの任務だった。街の警備を行う呪剣聖は必要最低限に抑え、現在3Cの半数はこの任務についている。

「……………」 Dear Lewis ”」

すらりと、シーナが剣を抜いた。刀身が弓のように大きく反っていて、その内側に刃がある、巨大なフックのような剣。シーナ。本来は盾を構えた敵に攻撃する為のものだが、シーナの呪剣であるこれは、どちらかといえば儀礼的な要素が強い。

それを垂直に構え、シーナは目を閉じる。

「I have the passport to the foreign country. My blade connects the world. Can you hear my voice?」

音韻詠唱　そう、まさに詠唱だ。精神安定の為の自己暗示でも、術式構築の為のキーワードでもない、ある意味もつとも現実的な意味を持つ詠唱。

シーテルの刀身が、仄かな赤に光る。

その光は、呪剣が揺れるたび、まるで闇の中のランプのように真昼間の空間に残光を落とす。そして、シーナが　呪剣を手の内ですくると回した。

「I ask you to become my follower and to work. Reward is awarded rose. Come, Soldiers of Cards,」 呪剣解刀、【Alice's Adventure
s in Wonderland】

光の紡ぐ軌道が、真円を描く。

そうして出来た『門』から、奇妙な生き物がその体を覗かせる。

「トランプ兵か。相変わらず、どうやって立ってるのか不思議な体形だね」

「外國の存在だもの。こつちとは身体を構成してる法則から違うわ」
現れたのは、トランプのカードの身体を持った、槍を持つ兵士だった。大きさはシーナの半分ほどの、コミカルな姿の兵士たち。最初の一人（？）に続くように、十人ばかり出て来る。

「ふふ、でも外見に騙されないほうがいいわよ？ 自慢じゃないけど、私の詠語召喚獣は性格がイカれてるのが多いから」

シーナがそう言ってお茶目に微笑んだ。

詠語。詠う為の言語。

主要五教禍の一つであり、詠唱に使うことで若干だが教禍の威力を向上させる第二言語だ。また、告語に次いで一般に膾炙している教禍であり、子供の名や物品の銘に詠語の意味を載せる者は、呪剣聖に限らず決して少なくない。

そして、出て来た十数人のトランプ兵が、帽子を被った一匹を筆頭にその場に並び、シーナを見上げ、口を開いた。

「I was summoned by the contract. We become your followers in this world as long as you observe the contractual coverage. What is today's order?」

慣れていないミドには一音ほど聞きとることすら出来ない、異界の言語がトランプ兵の口からすらすらと流れ出る。シーナは笑ってそれに答える。

「Please survey around this area, and find signs of the "English spell's" deflection. Signs are left on several days ago, b

ut I suppose they are stronger
enough to find them.”

「Yes, my “Alice”.”

シーナの命令を受けて、速やかに散開するトランプ兵たち。

このように。詠語の真なる力は全く別のところにある。

この世界とは異なつた次元にある世界『外國』。この世界と外國を繋ぎ、そこに無数に存在する亜人、幻獣、或いは精霊 総称『外神』と会話し、契約及び召喚する。それこそが詠語専攻者の能力なのだ。

「なんて言つたの？」

「ん？ この周辺でテストの痕跡がないかどうかを調べて、ってね」
ショーテルを鞘に収め、シーナが息をついた。

「とにかく、しばらくは彼らに任せておけばいいわ。足で探すのは面倒だしね」

「へえん、召喚士だったのか、アンタ。まあ突っ立ってるだけでいいってんなら、それに越したことはねーか」

言葉とは裏腹に少しばかり不満そうな顔で、ユージンは適当な木にもたれかかった。どこか焦るかのように貧乏ゆすりをする。退屈が嫌いなのだろうか。

「それで？ ミド、なんでぼーとしてたの？ ミドらしくもない」

「え？ えーっと……」

「まさか、あの子と喧嘩でもしたの？」

凶星を突かれ、にわかにミドの表情が固まる。

「えっ……ホントに？」

しかし意外だったのはシーナの方もらしかった。顔を暗くするミドを慌ててフォローする。

「だったら、ごめんなさい。でもあの子、そんな風には……」誰かと衝突するほど能動的な人間には。「見えなかったんだけど」「うつん……いや、悪いのは、あたしだから」

軽く頭を振って、ミドは腰に帯びた剣を見下ろした。呪剣の鯉口

を切る　真似をする。フラットの言葉が脳裏に走る。フラットは、ミドの疑問そのものに疑問を抱き、ミドはどこまでも純粹なその疑問に答えられなかった。それだけの話。

自分の戦う根拠。

「……シーナは、何の為に戦ってる？」

「？」

「シーナ。あたし、戦う必要あるのかな？」

「何でそんなこと……」

「この呪剣は【鉄血製作】だよ。　カレキシの血統で出来た、呪われた剣」

レッドブレード。周囲の血液を吸収し刀身と為す呪剣。

その魔法効果は刃だけに及ぶのではなく、貯蓄した血液は契約を介して呪剣聖のミドにまで影響を与え、肉体の基礎能力をより強く長く、鋭く発揮させる。当然その貯蓄量は多いに越したことはなく、その為、ミドの家は代々この呪剣を受け継いできた。

だが、この術式にはある前提がある。偏差体であるテストの血液は、本体となるテストが消滅すれば連動して消滅し、貯蓄することは出来ない。

この剣が貯蓄できるのは、人間の血液のみなのだ。

「あたしは所詮二桁順位。もっと強い呪剣聖なんていくらでもいる。それなのに、人が死ななきゃ戦えないあたしが、同じように戦っていいのかな？」

人を犠牲にしなければ戦えないものと、人を犠牲にしなくても戦えるもの。

実力が同じならば、どちらの方が有益なのか、考えるまでも無い。「なのにあたしは、大した理由も無いのに」

「ハア、馬っ鹿じゃねえの？」

反応は、ひどく意外なところから来た。

「……なに？」

「だーから、馬鹿じゃねえのかつつたんだよ、お嬢さん」

目元と口を歪めて、ユージンが吐き捨てた。

「なっ……なんだよ！ アンタにそんなこと言われる筋合いなんて無いでしょ！」

そもそも彼がいたことを忘れていたのか。ミドの顔が怒りと羞恥で真っ赤に染まる。今にも斬りかかりそうな勢いの少女を、慌ててシーナが押し留めた。

「いいや、あるね。血雨の血統だから警戒してみれば　とんだ甘ちゃんだ、ミド・カレキシ。いいか？　？　だから？　とか？　なんで？　とか。根拠とか理由とか信念とか、そんなもんはどうだっていいんだよ」

組んでいた腕から手先だけを上げ、ユージンは雑にミドを指差した。

「問題は、てめえが何を為すかだ。　何を為せるかだろうが。違うか？」

「……………」

ミドの動きが止まる。ユージンは木から身体を起こし、あーあー、と面倒そうに頭を掻きながら言葉を続ける。どうしてこんな簡単なことを教えなければならぬのか、とでも言いたげな態度だった。

それは恐らく、その考えを、彼が当たり前のように持っているから。

「花壇を見て、まあ土が綺麗ですねなんて言う奴がいるか？　土壌がどれだけ枯れてようが　たとえ毒だろうが、最後に綺麗な花さ

え咲けば問題ねえんだよ。……どうせ、人間って奴アそこしか見ね

えんだからな」

最後の一言の時は、ユージンは嫌な事を思い出すかのように表情を歪ませていた。そこにシーナが、軽く口を挟む。

「……目的の為に何したって良いって事？　あんまり感心出来ないわよ、そういう思考」

「それが本当に必要ならやるべきだね。もつとも、安易に外道に走るのはそれこそ怠け者のやることだけだよ」

悪党の死体の方が綺麗な花が咲く、ってわけでもねーだろうしな。

ユージンはそう締めくくって、手持無沙汰に掌の中のキーホルダーを弄る。

「ふーん……なんだ、わりかし良い事言うじゃない、ユージン。……弱そうな癖にさ」

「バカやろ、俺は良い事しかいわねーよ。それに弱そう？ テメエが俺の呪剣の解刀容姿見た後でも同じことが言えるかぁー？」

「……あはは、ごめんごめん。……ありがとう」

「はぁ？」

唐突に放たれたお礼に、ユージンが眉を顰める。

「ちよつと……楽になった、から」

流石に、素直に言うのは恥ずかしいらしい。消え入るように呟き、目を逸らし頬を染める。

「……」

ユージンは毒気を抜かれたように、間抜けに口を開けていたが、やがて舌打ちと共に踵を返す。

「ケツ、るっせえよ、ばーか！」

「ちよつと、どこ行くの？」

「見回ってくる。いつまでもこんなところで留まったら身体が固まっちゃう」

ユージンは、レイピアを抜いてそれを背中越しに振った。澄んだ金属音に加え、アクセサリーがじゃらじゃら揺れる。後ろから見える耳が赤くなっているように見えた。

「……もう。やっぱり3Eの呪剣聖ね。勝手なんだから」

「でも、悪い奴じゃなさそうだね」

「……それより私は、貴方のフラグ体質が怖いわ」
「？」

「いえ、何でも。ライバルが多くて何よりだわ」

首を傾げるミドに、はあとシーナは溜息。

「それで、どうするの？ ユージン追う？」

「……ああ、そうね。ちよつと待って。丁度、部外者ユージンもいなくなっ

たことだし、ミドには一応、教えておきましょうか」

「え？」

シーナが注意深く周囲を見渡す。

今回の、呪剣聖を総動員してのテスト搜索と討伐。

言うまでも無く本来の目的は、先日起きたクゾフィードからの大教禍の痕跡の調査である。そのことを知っているのは、彼女が必要だと判断した数人のみだった。下手にこの情報が漏れれば、どんな尾鰭がつくか分からない。最悪、こちらからクゾフィードに付け入る隙を与えかねないから、という聖徒会長の判断である。

ミドに話そうとしたのは、彼女本人が、戦闘能力だけならC分室においては室長級に次ぐ実力者であること。そして、もしかしたらこの件が、あの少年　ミドはフラットと呼んでいるのだったかとも、何かの関わりがあることかもしれないからだ。

シーナは口を開き、

「実はね、数日前に……」

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!？」

彼女の声を掻き消して余りある絶叫が、森の中に響き渡った。

「な」

二つの意味で、シーナの顔色が驚愕に染まる。第一に、悲鳴そのものに対して。まるで演劇の中の一台詞のような、模範的とすら言える悲鳴だった。そんなものが突然、自分たち以外に誰もいない場所で聞こえてきたら、驚くのも当然だ。

そして第二に。その声の主が、どう考えても、今しがた見送った同胞　ユージンのものにしか聞こえなかったからだ。

「? あらゆる問題は、演説や多数決ではなく、鉄と血によってこそ解決される?!」

ミドが、驚くよりも先に反射的にレッドブレードを抜いた。

周囲の虚空から湧き出るように、呪剣内部に蓄積された血液が解放され、少女の右腕全体を覆うような鮮血の武装が解放される。

「シーナ、下がって!」

詠語専攻であるシーナは直接戦闘には向いていない。ミドは先んじて悲鳴の聞こえて来た方向へ行こうとし、……そして、その必要が無い事をすぐに理解した。

進行方向の木々が、破壊される。メキメキと、力づくで木の筋が引き裂かれる音と共に　それは、姿を現した。

「な　」

今度こそ、二人は絶句した。

強靱な足が、木を踏み潰す。

物など掴めそうに無い、鋭い爪指が何十と生えた手が、ゆつくりと開かれる。

巨大な体躯が揺れるたび、大気が鳴動する。空に穴が開いたかのような、漆黒の鱗を身に纏い。その表面には、血管の如き赤い紋様が鼓動のように鳴動している。

背中にそびえる小さな翼は、退化していて飛べそうにない。だが、ミド達の視線から見れば、その身体は十分に天を衝いていた。

爛々とした瞳が輝き。

「　　」

膨大な偏差値を伴った咆哮が、大気を割り砕いた。

「竜……！？」

そこにいたのは、巨大な一匹の竜だった。

全世界共通の怪物。どんな言葉よりも雄弁に？恐怖？を物語るその姿。この世全ての条理をその存在の時点で擦じ伏せる、生きた伝説。

しかしその深紅の瞳は殺意に蠢いており、ミドがその正体に思い至る。

「これは、テストなの……？」

「竜型テスト……！？　なんで、こんな偏差がここまで近づいてきて、気付かない訳が　」

そう。その瞳は独特の赤色に爛々と輝き、感知能力は鈍いミドにすら、その全身から埒外の偏差値が感知出来る。偏差体。即ち、テ

ストだ。

「一体どうして」

そのとき。未だ混乱冷めやらぬミドの頬に。

はた、と。真つ赤な液体が降りかかった。

高さ十メートルはくだらない高さにある竜の口。鯨のように重ねられた牙の列。その外側に、引つ掛かっているものがある。

「」

人間の 青年のものと思われる、脚だった。

引つ掛かっていたそれが、竜が動いた拍子に地に落ちる。跳ねて転がる傷口からの血は、速やかにレッドブレードが吸収した。脛から先の部分しかない為、そこまで大した量では無い。

鮮血の刀身が、少しだけ大きくなった。

ミドは激昂した。

「レッドオ、ブレードアアアアッ！」

「待つて、ミド、駄目！」

「うわああああアアああああああアアアアあああああ！」

シーナの制止など耳にすら入らない。呪剣に込められた特異教禍を最大発動させ、レッドブレードが更に先鋭化、極大化する。ミドの装備というよりは、武器の側面にミドが嵌まっているとでも形容すべき、バランスの悪い巨大な槍が形作られる。

一陣の槍の穂先となって、ミドは突貫しようとし、

そしてそれに先んじて、竜の眼が赤色に光り、

「！」

獰猛極まりない牙の列が、虚空を齧った。

鈍い音を立てて、ミドのレッドブレードが、粉々に齧り取られた。
「……………えっ？」

何が起きたのか分からない。ミドは茫然とした表情で、一瞬で視界を埋め尽くした竜の顎と、砕かれた呪剣の破片が舞う様を見つめることしか出来なかった。

「な……………」

すぐ傍にいたシーナの視点からは、かろうじて何があったのかは分かった。ただ、何故そうなったのかがまるで理解出来なかった。ミドの刃が構えられた瞬間、大口を開けた竜の口が突如？ミドのいた座標に？現れ、その全容を噛み砕いた。

彼我の距離は十メートル弱はあった。竜の口は地上十メートルの位置にあった。何をどうすればそんなことが出来るのか。一目見た瞬間から勝ち目が無いと分かっていたが、それだけでは足りなかったのだ。人知の及ばぬ事象を起こすからこそ、奴らは？試練？と呼ばれるのに。

「ひ、あつ……！」

ミドが、右腕を抑えて膝をつく。

元の位置に戻った竜の口の中で、鮮血の刃がただの血に還る。ミドの右腕は血塗れになっている。しかし、それらの血はもうどこにも集まらない。レッドブレードは根元から噛みちぎられて、もはや元々の刀身すら半分も残っていなかった。

竜が、一步も動かずに、また大口を広げた。口腔内は全て、牙で覆われていた。生存を度外視した、テストの異貌。

「ミド！」

噛み千切られる。

「馬鹿げてる……！ あんなもの、一桁順位の管轄よ……！ 下手な呪剣聖が何人集まったって敵うものじゃない……！」

シーナが、脱いだ聖服で、ミドの右腕をまるごと覆うように縛る。
「つつ、うぁ……」

ミドが呻く。もつとも、人間を丸のみ出来るような竜に喰われたのだ。腕が繋がっているだけで僥倖だと言える。レッドブレードとて、ただ破壊されただけでは無かったようだ。

「Thanks……I'm sorry」

シーナは詠語で、ここにいない者達への礼を言った。

竜の二度目の噛み千切りから二人を救ったのは、轟音に気付いて戻ってきたランプ兵だった。彼らの投げた槍の一つが竜の目にぶつかり、その意識を二人から逸らしたのである。ほんの僅かな隙だったが、それが無ければ今頃二人は揃って竜の腹の中にいただろう。

だが、そもそも戦闘用として召喚したわけではないランプ兵たちである。既に全滅しているだろう。召喚獣の多くは死んでもそのまま元の世界に帰るだけだが、それでも申し訳なさはあった。

「シ、いな。も、大丈夫……」

ミドが、無事な方の腕を上げて制止する。左手に持ったレッドブレードの残骸。

服に滲んでいた血が、もう固まっていた。いや、違う　金属化している。

「……驚いた。レッドブレードにはこんな能力もあるの？」

「うん。……契約主である呪剣聖の、傷口周辺の血を金属化させて止血するの。……ねえシーナ、一体……」

「……ッ待つて！」

ミドの口を抑え、自らも息を殺す。

ずうん、と地響きが鳴る。現れた時と同じく、木々がゆっくりと倒れる音がこちらに迫って来る。近づいてくる。シーナの頬に冷や汗が浮かんだ。息を止める。

近づいてくる。地面が震え、木々が倒れる。

近づいてくる。遠く離れたどこかで、鳥の群れが飛びたった。

近づいてくる。舞い上がった鳥の群れが、虚空に湧き出た竜の爪に引き裂かれた。

止まる。

二人の周囲に、赤い光の粒子が瞬いた。

「っ！」

転げるように、木の幹を飛び出す。

一瞬前までいた場所を、現れた竜の顎が挟り取った。舞い散る木

と土、牙同士がぶつかり合っただけで巻き起こる莫大な衝撃が、二人を纏めて押し飛ばした。

「そん、なっ　！」

吹き飛ばされながらもシーナはかろうじて理解していた。このテストの教禍とその能力を。

赤い光は、詠語教禍の証。そしてそれが示すことは一つ　召喚だ。

？異世界？と？この世界？を繋ぎ、別世界の存在を呼び出す。それが詠語教禍の力。

だが、あのテストは違う。奴は？この世界の場所？を繋ぎ、自らの肉体を攻撃する位置に轉移させている。　いわば、攻撃する瞬間、自らを敵のいる場所に？召喚？しているのだ！

「なんて、イレギュラー……っ！」

常軌を逸している。破格にして規格外。そんなことが本当に可能なのか、理論さえ提唱されているか疑わしい。召喚という術式を根本から書き換えた上、自らの位置と対象の位置を逐一把握し続け、一点の誤差なく一瞬でそれを行う。どれだけ常識外れの偏差値と、緻密な制御能力が必要なのか、想像すら出来ない

「シーナ、前っ！」

ミドが叫ぶ。進行方向に赤い発動光が灯り、そこに、鱗に覆われた竜の腕が出現した。滅茶苦茶な力任せの、薙ぎ払い。出現した瞬間から木々や地面に引っ掛かって、勢いが大きく減衰している。だが、今の二人にとって、その薙ぎ払いは余りに強すぎる。

衝撃が、全身を突き抜けた。

視界が明滅する。回転する。更に衝撃が重なる。意識が飛び、次の瞬間に戻り、また消える。ほんの数秒。上下の境すら不確かになって、いくつもの枝や葉を突きぬけて、最後に巨大な壁に激突して止まった。

「あ……」

意識は、かろうじてあった。全身が鈍痛に苛まれる中、右腕だけ

鋭く痛む。吹き飛ばされる最中に、枝か何かが突き刺さったらしかった。だが、起き上がれる気がしない。巨大な壁から、遠い地響きが伝わって来る。そこで始めて、自分がぶつかった壁が、地面であることを理解した。回りの悪い頭を、自嘲的に笑う。

「シー、ナっ……シーナ！」

視界が翳る。掠れた風景に薄っすらと、泣きそうな顔をしたミドの姿が映った。体中血塗れで、そしてそれによって補強されている「ミド」。……よく、聞いて」

地響きは鈍く、近づいてこない。どうやらあの馬鹿な竜は、自分で吹っ飛ばしたことによってシーナ達を見失ったらしい。

腕を上げようとして、そもそも身体が動かないことに気付いた。血と一緒に、身体の活力まで奪われていつているようだ。呪剣も、吹っ飛ばされた拍子にどこかへ飛んで行ってしまった。呪剣が無ければ、呪剣聖など唯人にも劣る。

「貴方一人なら、逃げられる」

「駄目！ 駄目だよ、シーナあ……」

ミドがゆるく首を振る。目の端から滴が落ちて、血と土でぼろぼろの顔に線を引く。口調こそ激しいが、その声は擦れきっていた。お互い、まともに動けていることが奇跡だ。

「あれの教禍を伝えるから。後は副長や、他の聖徒会員に任せればいい」

「だったらシーナも一緒に！ あたし馬鹿だから、そんなの伝えられても分かんないよ……！」

「テストは生きた人の気配を察知する。アレはどうやら随分鈍い奴みたいけど、早く行きなさい。いずれこっちに気付くわよ」
既にシーナは自分の命を諦めていた。あのテストが、クゾフィーダの例の事件と関連があるのか、今すぐには答えは出せない。とにかく、何よりもこの情報を持ち帰る必要がある。

もう少し身体を鍛えた方が良かったかしら、と思いつつも、今更どうしようもない。

「私は聖徒会員だから。 他の生徒を、友達を守りたいの。分かって？」

聖徒会に入った時から、他の聖徒の為に生きて死ぬ誓いを立てていた。

目が霞んできた。ミドの表情は分からないが、彼女とて馬鹿では無い。もはや二人揃って生き残ることは不可能に近いということも分かっているだろう。どころか、ミド一人ですら、あの竜から逃げられるかどうか分からないのだ。動きは鈍かったが、もし仮に奴が飛んだり駆けたり出来れば、間違いなく希望は潰える。

早くして、と。シーナはもうひと押し口を開こうとして、そのとき。

流れ出ていくままだった血液が、ふわりと浮いた。

「……………え」

茫然と、ミドの眩き。

ミドの左手に、未だに保持されていたレッドブレードの残り。その柄の聖石が、一度は消えていたはずの光を放っていた。刀身を形成し、ミドの傷口を補強していく。

そして、それと引き換えに、シーナの流血がほんの少しその勢いを強めていた。どく、どく、と脈動に合わせて傷口から血が流れ、ミドに吸い込まれていく。

「……やっぱり、貴方はまだ死ぬべきじゃないわ」

それをむしろ好意的に受け入れて、シーナは笑った。

「私の血、私の命、役立ててくれる？」

そして。

その言葉に。

ミドは、絶叫した。

「 いやあああああああああ！！！」

「貴方一人なら、逃げられる」

どうしてそんなこと言うの。

「後は副長や他の生徒会員に任せればいいから」

任せればって何。シーナはどうするのさ。

「早く行きなさい」

見捨てろっていうの。背負えっていうの。

「私の命、役立ててくれる？」

あたし、もう何も背負いたくないのに。

ミドには、兄がいた。

カレキシ家は、極めて優秀な呪剣聖を輩出する貴族の家系であった。文字通り伝家の宝刀である《鉄血製作の呪剣》を代々受け継ぐ家系。そのご多分にもれず、優れたS.T耐性を備えたミドは、呪剣聖となる為の修行を幼少の頃から受けていた。

しかし、彼女の四つ上の兄であるシオン・カレキシはミドに更に輪を掛けた天才だった。ルークハイスにおいて一桁順位を与えられるほどのズバ抜けた力を持つ呪剣聖だった。

《幾万の朱》（ヴァーミリオン）。それが当時のレッドブレードの名であり、またシオンの二つ名でもあった。ミドはそんな兄が誇らしくもあつたし、自らも追いつこうと、遊びたい盛りの年頃から修行を重ねていた。

だが、彼はある時 乱心した。

彼らの住む町が定期テストに襲われた時。シオンは、ただの一撃で、街の周辺に群がっていた全てのテストを惨殺したのだ。

彼の家族・親戚・使用人全てを殺し、その血を搾取すること
で。

たまたま家を離れていたミドは、唯一その虐殺を逃れた。そして家に帰って来た彼女は、血液全てを搾取されて斬り殺されている家族と、その中心で佇む、黒い峰部分だけ残した呪剣を持ったシオン

の姿を目撃した。

彼がその有様を見て呟いた言葉を、ミドは今でも覚えている。

『　なんだ、この程度か』

そして、放り捨てるように契約を取り消した呪剣を置いて、シオンは姿を眩ました。

彼の蛮行は瞬く間に国家全土に知れ渡った。呪剣のストレスに耐えきれず狂ったのだ、というのが人々の統一見解であった。だがそんな分析、ミドにとっては慰めにもならない。

カレキシ家は没落し、数少ない縁者も《血雨》の忌み名を押された。

それでもミドは呪剣聖を続けた。兄を探し、家の名誉を取り戻す為　表向きにはそう謳ったが、真相は違う。

全てを失ったミドには、兄の残した呪剣だけが唯一、失ったものの繋がりがだった。

理由も目的も無く、ただ想いに、感情に縋ることしか、ミドは自らを保てなかった

「ミド、そんな声を出したら　！」

シーナの言葉は届かない。

ミドは頭を振りながら、剣の聖石の輝きを抑え込むように驚掴みにした。

「？賢者は歴史から学び、愚者は経験からしか学ばない？！」

いやだ。

いやだ。いやだ。いやだ。いやだ！

シーナの血なんて使いたくない。友達の血なんて使いたくない。またあたしは誰かを犠牲にして戦うのか。またあたしは親しい人の血で戦わなきゃいけないのか。またこの呪剣は、あたしの大切な人の血を吸って強さにするのか。

いや、いや、いや、いや！

ごめんなさいユージン。キミを守れなくて。キミの言葉を活かせなくて。

何が出来るかだって。言い訳にすらならなかったよ。あたしは、誰かが死ななきゃ、何も出来ないんだよ。

もういやなのに。あたしは、 になんか、なりたくなかったのに。

「?十八の清輝。六十二年の年。彼の者は王ヴィルヘルムの右腕。彼の者はプロイセンの首相。

彼は結び、彼は壊し、彼は傳き、彼は掲げ、これにより彼は統べる?！」

足跡が、地響きが近づいて来る。シーナは逃げてと叫ぶ。

ミドの表情に笑みが浮かぶ。鮮血と涙でぐしゃぐしゃになった顔が、凄絶な覚悟に染まる。

「?六十四年の戦に勝利する。 その戦の名は第二次・シュレー
スヴィヒ」ホルシユタイン。

六十六年の戦は七週で終わる。 その戦の名は普^ふ塹^{おう}?」

驚掴みにした聖石から、抑えきれないほどの光が迸る。

舞い上がっていた血液の流れが、変わる。ただ搾取されるだけだったシーナの血液が、シーナの傷を覆うように、シーナの身体を守るように固化した。今の今まで術者一人しか守らなかった 守れなかったはずの術式が、変化していた。

溢れ出る極大の偏差値。轢^こ士魔法の銀光が、夕暮れの森を白く照らし出していく。ミドがやろうとしていることの正体に、その時ようやく、シーナは気付いた。

「ミド、まさか……駄目っ!」

傷が塞がっても、動くことは出来ない。それはただ体力が奪われているからか、目の前の少女から迸る力の奔流に、彼女の身体が怯えているからか。

木々の向こうで、地響きが止まった。

目の前にあった巨大な木が、その半ばを残して丸ごと食い千切ら

れた。

舞い散る木端。その向こうに、竜の姿が見えた。

「？七〇年に世界は変わる。エムスの電報は付箋となる。その

戦の名は普仏。宮殿ヴェルサイユにて、かの命題の証明は終了する

即ち、あらゆる問題は、演説や多数決ではなく、鉄と血によってこそ解決されると？」

同時に、血液の集束が止まった。薄い網目のように、極めて効率的にミドの身体を覆い、それ以外の血液は全て、ミドが片手に持つレッドブレードの刀身が変わっていた。

薄く長い、鮮血色の片刃の刀。

「轢士教禍【鉄血製作】満天解刀。　　？独り逸した国よ、一つと

成れ？」

「！」

竜の咆哮。ミドの周囲に、赤い光の粒子が舞う。

一瞬。最初の繰り返しのように、ミドの姿を、その視界を竜の口腔が埋め尽くした。上顎と下顎いっぱい、犬歯も臼歯も前歯も奥歯も関係無く、一つ一つが鋭利な杭のような牙の山が生えている。

凶暴な殺意そのものを形にしたその口が、その中心に捕えた少女を微塵に噛み砕こうとした。

そしてミドは、無造作にレッドブレードを振り降ろした。

鮮血の剣が、景色を真つ二つに引き裂いた。

三時間目【詠語（えいご）】（後書き）

教禍【詠語】

召喚魔法。詠う言語。

恐らく、もつとも世界的な教禍。

異世界の言語を介し、それを通して別世界との扉を開く特殊言語。他の教科における詠唱が「能力を発動させる為の言語媒体」なのに対し、この教禍における詠唱は「異世界の存在」がいじん外神がいじん「召喚獣」との交流言語であると、より切実な意味を持つ。

異世界の存在と言語によって交渉、召喚獣として任意の条件で対象を呼び出す契約を行う。

何より実践が意味のある教禍であり、たとえば生まれつき外神の親を持つ『混血』ハーフや、そもそも生まれが異世界である『鬼国子女』きこくこじむすめは、修練も無しにこの教禍を自在に扱える。

主要五教禍（告語、礫士、詠語、枢学、理架）の一つ。文系教禍。

四時間目【告語（こくご）】

四時間目【告語】

カツカツカツと、早足の靴音がクスノキ城の廊下に響く。

足音の主は、片眼鏡の小柄な女性。蛾の刺青が、焦りと苛立ちに歪んでいた。

ルークハイス皇国副室長、マユ・クジャ「クヤマはとある一室の前で足を止めると、一息にそれを開いた。

「何があつた、シーナ・ミナーチ」

「……開口一番それ？ もう少しわたし自身の心配はしてくれないんですか？」

「軽口に付き合っている暇はない」

医務室には幾つものベッドが並んでいる。壁には何十もの薬品、教禍書、包帯や、何故か怪しげな義手・義足らしきものまで並んでいる。定期テストの時は人でごった返すが、そうでない今は静かなものだ。

ベッドに寝たまま、未だ少し荒い息で、シーナはマユを見上げた。まだ意識と体力が回復しきっていないのか、ぼうつとしている。近づくマユを、ベッドの傍らに座っていた癖っ毛の少年　ソウマが制した。

「……副室長。シーナさんはまだ完治してはいません。あまり無茶は」

額に汗を浮かばせながら呪剣を収める。全教科唯一、神聖回復魔法を操れる聖物教禍。しかしその使い手は少なく、また、万能というわけではない。怪我が大きいほど、治療される相手の消耗も、使いに掛かる負荷も大きくなる。

「治療自体は済んでいるのだろうか？　ならば問題ない」

「ですが、死にかけていたんですよ！」

「大丈夫よ、ソウマ君。……申し訳ないのだけれど、わたしがどうしてここにいいのかを、聞いてもいいかしら」

その言葉に、マユが僅かに目を細める。やや委縮したような表情で、シーナが曖昧に頷いた。冗談ではない。つまり、彼女が記憶を曖昧にするほどの事態だったということだ。

「……昨日の深夜、当直の門番が、貴方を背負ったミドさんを発見、保護しました。すぐに僕が呼ばれて治療にあたった後、こちらに運び込まれました」

「……ミドは？」

「それが……自分は大丈夫だと言って、僕が来る前に自宅に戻ったそうです。僕は貴方に罹りつきりだったので、人伝ですが」

「そう、なの。……ソウマ君。少し、席を外して貰ってもいいかしら」

シーナの申し出を聞いて、ソウマはマユを見上げる。

「……聖徒会関係ですか、副室長」

マユが頷くと、ソウマは立ちあがって椅子を引いた。

「分かりました。僕は退散しま」

「それと、もう一つお願い。……ミドの所に行ってくれる？」

シーナがそう言って笑い掛ける。ソウマは、一瞬しかめっ面をしたものの、ほぼ即答で首を縦に振った。立ち上がって背を向ける。

「……分かりました。ただ、いち医療関係者として、いち聖物専攻者として言うておきます。回復と破壊は、肉体を変異させるという点では全く同じです。……傷こそ治しましたが、今の貴方の体力は、衰弱死の二歩手前といったところです。決して無理はしないで下さい」

「ええ。肝に命じておくわ」

「……そうやって即答する奴に限って無理ばかりするんだよなあ……」

今度こそ、はっきりとした愚痴と共に心底疲れたように溜息をつくソウマ。静かに扉を閉めると 石造りの廊下を駆ける音が響い

て、あつという間に遠ざかって行つた。

シーナが苦笑する。笑い声は、少し掠れていた。

「やっぱり気になっていたのね」

「仕事熱心なようで何よりだ。……貴様もな」

「ええ」

ソウマの足音が、完全に聞こえなくなる。僅かな静寂。

「ユージン・クドーが死んだわ」

「！」

そうして呟かれた言葉には、遊びの色が全く含まれていなかった。シーナは簡単に語った。森を散策している途中、何の前触れも無く竜型テストが現れたこと。ユージンが喰われたこと。詠語教禍を応用することによって、身体の各部を瞬間移動させること。それを聞いたマユは、絶句するしかなかった。

「……馬鹿げている」

それも当然だろう。そもそも保有偏差値七十以上の幻獣系テスト（この世界に存在しない生物を象っているテスト）という時点で、本来は一桁級呪剣聖を含めた討伐部隊が組まれるような存在なのだから。また、この場合は別の意味も含んでいた。

「信じられん。……だが、そうだとすると……まさか、そういうことか？」

「仮定に過ぎないけれど、辻褄は合いますね」

マユは慎重に、今までに聞いていた情報を繋ぎ合わせていく。超大規模詠語教禍の発動、それに前後してのテストの出現。

「……クゾフィードにおける三日前の偏差値の突然発生が？ 竜型テストの誕生？。そして世界中に起きた同質偏差の反応は？ 転移能力の行使？。……自分を、いや、同時に複数個所だったな。各地に？ 何か？ を飛ばした、ということか。何をかは分らん。ただの暴発という線も考えられるが……理性はなさそうだったんだな？」

「ええ。対人感知も鈍かったわ」

「ならば暴走の方が確率は高いか。……そんなことより、その存在

が単純に危険すぎる。効果範囲は実質無限大、視界内ならほぼ確実に一瞬でやられる。そんなものが定期テストで攻めてきたら、教室ではそれこそまともに相手になるのは室長級しか……」

「ああ、それに関しては大丈夫。もう奴は仕留めたわ」

「……何？」

「構成解放を確認する前に、不覚ながら気を失ってしまったけれど……真つ二つにされていたから、よっぽどのが無い限り大丈夫なはず」

「待て、待て、待て！ 話通りの実力なら、お前達が敵うはずが

」

問い詰めようとしたマユの言葉が、そこで止まる。

ありえるのだ。敵うはずの無い、自らの力量を遥かに超えるテストと相対した時、呪剣聖が取れる手段がたった一つだけ。しかしそれは、この世全ての呪剣聖が、死ぬことよりも逃げることも、忌避し、忌避される手段でもある。

「恐らくは《幾万の朱》の技でしょうね。彼女は溜めた血液を金属化しつつ一気に放出、全てを切り裂いた。……そこまで追い詰めてしまったのは、私。私のせいだった。あの子が、誰かを犠牲にすることを嫌うだなんて、これでもかって知っていたはずなのに」

シーナは、悔やむように唇を噛む。彼女の態度がどこか殊勝だった理由は、竜の発生を読み切れなかったことでも、考えが甘かったことでもなく、恐らくはそこにあった。

彼女は語る。自らの限界を超えた偏差値の教禍の行使、その結果を。

「ミドが、テストに堕ちたわ」

堕ちる。

呪剣に堕ちる。テストに堕ちる。

どう表現しようが、現象は単純　　呪剣聖がテストに変化してしまふこと、である。

呪剣の持つ数々のリスクの中でも最も致命的なものの一つであり、唯一分かっているテスト誕生の方法でもある。

呪剣との契約の失敗、過度にシンクロした呪剣の破壊によるフィードバック、或いは限界値を超えた教禍の発動による反動。　　呪剣の対策に失敗したとき、呪剣聖はテストに堕ちる。それは呪剣聖にとつては、死ぬよりも忌むべきことと思われる。真に馬鹿馬鹿しい話ではあるが、験担ぎの為に『おちる』という言葉を使わないよう心がける者さえいるのだ。

「あは、は」

しかし、そういう者の気持ちも、今のミドには分かる気がした。彼女は自分の寝室で、ベッドの上で手を掲げて、その甲に埋まっている　　侵食している聖石を見る。いや、今のこれは聖石ではない、ただの単位、テストの核だ。

「どうしよう。どうしようか」

身体が妙に軽い。喰われ、吹き飛ばされ、あれほど重傷だったはずの身体が。

何もかもから解放されたような、何もかもを失ったような感覚。ひたすらに空虚。そのくせ、じわじわと、布に水が染み込むように、焦燥と絶望が喉元に昇り詰めて来る。

「だ、大丈夫、あたしは、あたしは。シーナだって、シーナを助けられたんだから、あたしは」

「　ミド。帰ってきているのですか？」

部屋の入り口から聞こえたその声に、びくり、とミドはいっそ哀れなほどに怯えた。鍵は、そもそも締めていなかった。そこまでの余裕は昨夜には無かった。

「フ、フラット……」

「ミド。……ミド？　その偏差は」

フラットが、真っ直ぐミドを見つめた。ミドは、何かを否定しよ

うとして、目を閉じて、いやいやをするように小さく首を振る。

「違う、違うの、あたし、あたしは……ユージンが死んで、シーナが、シーナが……」

「堕ちたのですか」

「っ！」

恥ずかしくて顔を隠す。目元に涙がにじむ。明確に突きつけられた事实に、崩れそうになる。消え入るような、やだ、という言葉が喉から漏れそうになって、口から出る前に消え行った。その声は、フラットには聞こえなかった。彼は何も感じられない目で、何も感じられないということすら感じられない人形の瞳で、ミドを見つめる。

そして、腰の短刀を抜き放った。

「テストは殺す。そこに、例外はありません」

「あ」

その言葉に。どくん、と心臓が震えた。

いや、フラットを見た瞬間から、それは始まっていた。右手の聖石から生まれた熱が全身に広がった。絶望と焦燥で染まっていた心を、たった一つの衝動が広がって埋め尽くす。

殺せ。

「うわあアアアアッ！」

世界の色が反転する。

予備動作も何も一切無い。血流が熱され加速する感覚。人外に強化された肉体で人外の力を以て人外の速度を行使する。蹴飛ばしたベッドが半ばから挟れて中身の綿が吹き飛んだ。引き放たれた矢、或いは一陣の突風の如くミドが翔ける。

右手の甲の聖石が光り輝く。銀光と共に血煙が舞った。一瞬の後、レッドブレードの姿を再現するかのように右手に構築される刃。だがそれは、歪に捻じ曲がった奇怪なものでしかなかった。

フラットが掲げた短刀は、根元から？消し飛ばされた？。

血刀が僅かに欠けるも、しかしすぐさま刃に引き寄せられ修復さ

れる。

突撃を、フラットは横へ転がるようにかわしていた。ほとんど偶然とすら言えるような、かろうじての回避である。ミドの刃を受けた扉が砕け散り、硝子と木の鋭い欠片が舞い上がった。

ミドは床を挟りながら足を止め、方向を変えて再び突撃する。右手を後ろに引き、床を蹴ると共に突き出す。態勢を崩したフラットには、今度こそ避ける術が無い。ミドの刃が、真っ直ぐにフラットの心臓目がけて突き進み

「【ボイル・シャルル】」

真横からの熱風を受けて、その軌道がほんのわずかにずれる。

「！」

そして、二人は衝突した。

ミドの刃はそれでも、フラットの脇腹を挟りつつ背後の壁に突き刺さった。小柄なはずの体は、血刀に補強されて人外の強度を備えていた。タツクルする形となったミドの耳に、フラットの身体の中から何かが千切れ、押し折られる音が聞こえた。体格差を覆ってフラットの身体が押し飛ばされ、背後の壁に衝突する。

「か」

壁に衝突したフラットが、密着したミドと壁によって胴を圧迫され、血の塊を吐いた。その吐血すらもミドは自らの刃と化した。少女の瞳は真っ黒に塗り潰されていた。だらん、とフラットの身体が脱力する。僅か数秒の決着だった。

そして、フラットが動いた。

腹を挟まれ、胴の半分を砕かれておきながら、フラットは四肢を蛇のように走らせた。

左手を、ミドの右肩から背中側に回し、左腕を後ろから掴んで固定する。

肩口にぶつかっていたミドの顎を逆にかちあげ、そのまま首の稼

働域の限界まで押し上げて、頭部を固定する。

そして、足払いをするようにミドの細い両脚に自らの脚を搦めて僅かに浮かした。

「っ!？」

そうしてミドの身体が、壁に突き刺さった刃と背中から左腕に回ったフラットの左腕、それに肩に乗った顎、絡んだ両足でのみ支えられる形となる。

「づ? あ、あああああ!」

ミドの叫び声ごと、フラットは彼女を抱き止め、抑え込んでいる。

否、そもそも暴れることすらさせてない。いくら頑張ろうと、いくらテストであろうと、ヒトの構造上、物理的に力を込められない態勢。抱きあうように絡み合った姿は、しかし正攻法では敵わないと判断した結果行われた、捨て身の拘束だった。

自由なのはただ一つ、フラットの右手のみ。

「拘束成功」

そこには、硝子の破片が握られていた。先程ドアが碎かれた瞬間に掴み取った、武器とすら呼べないようなものだが、少なくとも、密着した少女の喉を切り裂くことくらいは難なく出来るだろう。握りしめたフラットの掌から血が流れる。

「ごふっ」

フラットが激しく咳き込み、流れた血がまたミドの身体に収束された。当人はしかし、表情一つ歪めない。せいぜい視線を巡らせて、自らと相手の状態を確認し、この態勢がどれだけ続くかを分析する程度である。テストは殺す。まず戦闘に突入し彼我の戦力差を分析勝てない敵ならば逃げる。逃げられない敵ならば刺し違える。

何より 彼の? 先生? は、この少女を生かしておくわけにはいかない、と言った。だから彼はそれに従う。

フラットはそして、そのまま尖った部分をミドの首元に当てて、

「……?」

そこで、手が動かないことを気付いた。

どれだけ力を込めても、震えるばかりで、引き切れない。

身体が限界なのか？　そんなことは無い。確かに脇腹が抉られて内臓に甚大な被害を受け、肋骨や鎖骨はほとんど折れたりヒビが入っていて連鎖的に呼吸機能及び血流機能にも大きな障害は生じているが、まだかろうじて右腕の先端程度なら完全に動く。そう計算して攻撃を受けたのだから当然だ。

「おか、しい。ですね」

動かないのではない。動かそうと思えないのだ。

この人を死なせてはいけない。

この人は死んではならない。

そんな声が、聞こえて来た。精神の制御不良だとフラットは判断した。燐理^{りんり}教禍の効果を受けた時にも似た、意志と行動の不一致だ。しかし、ミドの教禍は典型的な轢士教禍だったはず。そのような能力があるとは思えない。

「どうして？　何故。想定外です」

だが、そこまでだ。この期に及んで完全なる不確定要素を分析、そして対処する時間があるはずもない。時間切れ。そう思い、フラットは静かに自らの命を諦めて、

「……あれ。フラ、ット……？」

耳元に、ミドのそんな呟きが聞こえた。

それに続いて。

玄関のドアベルが、鳴った。

「もうっ、我ながら働きすぎだ！　僕はミトコンドリアじゃないんですよ！」

意味の分からない愚痴を呟きながら、ソウマが目を閉じて剣を構える。

「【セル・デイヴィジョン】！」

居間の絨毯の上に寝かされたフラットの傷が、白色の光に包まれ

て癒されていく。

「それに、コイツの方から仕掛けたんでしょう、自業自得だ！」

「テストは殺す。そこに例外は無い……そのはずです。そうだったはずなのですが」

「ミドさんはまだ、テストじゃない！ いい加減にしろ！」

フラットの言葉に激昂するソウマ。それに応じて、白色の光が弱まる。

「いいよ。ソウマ。お願い、治療してあげて」

ソファーに腰かけたミドが、静かに言った。その全身は赤色の斑で汚れている。だが、返り血で血塗れなのではない。その全てがミドを守る為に皮膚と一体化した血刀による鎧であり、すなわち彼女が呪剣と融合　テストに堕ちている証だった。

「……まだ、ね。うん。そうだ。あたしは？まだ？テストじゃない」

「あ、ち、違つ。そんなつもりじゃ……！」

呟かれた言葉に、ソウマが自らの失言を理解して狼狽する。

「っ……………」

やがて、ぎり、とソウマが奥歯を噛み締めた。もう少し髪が長ければ少女と見紛う童顔が、悔しさと無力感に歪んでいた。やがて、フラットを包んでいた白光がゆつくりと消えていく。

「……はい。傷は、一応直したよ。ただあれだけの重傷を一気に直すと体力も大きく削られる。下手に動かないように」

「はい。……ありがとうございます」

フラットはそれだけを言うと、起き上がろうとして態勢を崩す。

「話を聞け」

「いえ、そういうわけではないのですが……おかしいですね」

自分で自分の行為に首を傾げるフラット。それに、訳の分からないものを見る目を向け、ソウマは舌打ち一つ、ミドの方を向く。

「ミドさんの怪我も……」

近づこうとして、手で制される。

「近づかないで。そこから話して。」

いつ、その、さっきみたい

になるか、分からないから」

その言葉に、いつそ泣きそうな目で、ソウマが俯く。

「どうして！ どうして、ミドさんが堕ちなきやいけないんですか……！ 貴方は、強くて、格好良くて、鮮やかで……！ 僕の憧れ、なのに……」

直接、呪剣聖が堕ちて生まれたテストは、往々にして通常のテストよりも強大な存在になる。堕ちるということが、ともすれば死よりもおぞましいものとして捉えられるのはこの為だ。堕ちたと認められた呪剣聖は、何よりも優先して討伐される。

「ソウマくん……。ごめん、ごめんね……」

こうするしかなかった。こうしなきゃ、シーナが死んでいた。

ミドにはそう考えることも出来た。だが、それは間接的に責任をシーナに押し付けることになる。ミドはそれすら出来なくて、ただ自分を責めていた。

その弱々しい姿に、ソウマが叫ぼうとして

「そんな風に、……」

言葉が、途中で止まった。

かーん、と鐘の鳴る音が聞こえた。

一つだけではない。その一つの鐘を中心に、クスノキの各地にある鐘が連動して鳴らされ、きーん、こーん、かーん、こーん。と、街全域に音が広がっていく。

それは、定期テストの始まりを告げる警報。

「戦時特鈴！？ チャイム よりにもよってこのタイミングで…… ああっもう、空気読めよ！」

ソウマが呪剣を取って立ちあがる。しかしミドをここで放っておくわけにもいかない。

「ミドさん、貴方は」

ここにいて。そう言おうとしたソウマの声は 別の言葉で遮られた。

「……逃げて下さい」

寝ていたフラットが、上半身だけを起こして、ミドにそう告げた。
ミドが首を傾げる。

「フラット？」

「ミド。ここにいれば、間違いなく貴方は死にます。この定期テストの騒ぎに乗じて、街を出る。それでしか、貴方の生き残る道はない」

「……あたしに、浪人になれっていうこと？」

浪人。特定の国家に所属しないフリーの呪剣聖の通称である。国家の補助を受けられない為、実力者も多いが、半ば野盗や傭兵となっている者も多く、現役の国家所属の呪剣聖からは距離を置かれる傾向がある。

だが、今の状態ではどのみち呪剣聖として教室に留まることは出来ない。姿が変わり、理性を失くして完全なテストになる前に、早々に討伐されるだけだ。

「今の貴方がそうであるように、堕ちて聖石の侵食を受けた呪剣聖が、必ずしも即座に完全なテストになるわけではありません。最長で二、三週間、意識を保ち続けた例もあります」

「でも……いずれテストになるんなら……」

僅かに涙を止めたミドに向かって、フラットが淡々といつもの平坦な調子で言う。

「ミド。あなたは、死んではいけない」

「……………え？」

「何故が分かりません。分からないのですが、そうなのです」

フラットの言っていることは支離滅裂だったが、本人もまた、何が何だか分かっていないようだった。表情は相変わらずほとんど動かないが、目線がわずかに泳いでいる。

それでも、そこに何かを感じたのか、ミドは頷いた。

「分かった。……ソウマくん、フラットのこと、頼んでいいかな」

「え……………」

面倒だと思ったのか、あるいは単純に印象が悪いのか、ソウマは

若干嫌そうな顔をした。がしがしと頭を掻きながら。

「分かりました。任せて。……僕としては正直、ミドさんについて行ってもいいかなあ、なんて思っただけです」

その時、ソウマのポケットが震えた。それに気づき、ソウマが取り出す前に、それ　ポケットの中の携帯端末が声を出した。

『こちら呪剣番号067324、ルークハイス皇国第三部隊C分室副室長マユ・クジャックヤマ。呪剣聖各員に到達』

メッセージは、いつものように頭の中に語りかけてくるものではなく、音が実際に大気を震わすものだった。大規模な連絡のときはいつもそうだ。

副室長マユの専攻でもある告語教禍・幻代聞げんだいぶんの術式。

誰かの？代？わりとなる？幻？の声を？聞？く。言葉の本質、

コミュニケーションの魔法。それが幻代聞の基本術式だ。伝え、伝わる能力。この場合は媒体である端末を介して、別の場所にある景色・音などをやりとりすることが出来る。

『先程のチャイムの通り、定期テストの開始が確認された。呪剣聖各員は指定された席につき、主要五教禍の内三つ以上を備えた小隊単位で行動し防衛線を構築せよ。』

聖物及び限遮専攻の呪剣聖は一端登城し怪我人の治療と結界の破壊に備える。詳細な発生情報は追って連絡する。繰り返す。これより定期テストが開始される　』

「ですよ」

その声を聞きながら、ソウマが溜息をついた。

「僕は、ルークハイスを守る呪剣聖です。……ごめんなさい。流石にそこは曲げられない」

「当たり前だよ。それでも来るって言ったらあたしがぶん殴るから」

「あはは、そりゃ怖い。　　そういうところに惚れたんですけど」

「えっ？」

囁くような言葉は、ミドには聞き取れなかった。

「いや、何でも。それじゃあ、僕はもう行かないと」

「うん。ありがとう。 さよなら」

「……それは、ちょっと言えませんか」

くしゃりと顔を歪めて、背を向けた。 玄関の扉を開けて、

「頑張つて下さい」

そして、城の方に走って行った。

「じゃあ……あたしも行こうかな。フラット」

「……はい」

フラットは、ミドが最低限必要なものを鞆につめていくのを、ソファーに寄りかかって、ただ見つめている。

「せっかく助けたのに、いきなり放り捨てるみたいになっちゃって、ゴメン」

「いいえ」

「……でも、約束は果たしたよ？」

「？」

ぴ、と。ミドは悪戯っぽく笑って、指差す。フラットの脇腹。ソウマによる癒しは、ミドがフラットを拾った時に負っていた傷口までも、いっしょくたに綺麗に治していた。

「傷が治るまでは、面倒見てあげる。そういう話だったね」

「そうですね。貴方は、約束を守りました」

「うん。……ねえ、フラット」

「はい」

「助けさせてくれて、ありがとう」

「」

言いながら、彼女はタンスの中から大きなローブを取り出した。聖服の上から羽織ってフードを被ると、いささか怪しくはあるものの、全身に浮かぶ血色の斑は隠せた。

フラットは、疲労で顔を上げることもままならなくなっていた。

ミドは靴を履いた後、少しでも足を留めた。死んだように動かないフラットを見て、名残惜しそうに笑った。

「……………。さよなら」

そして、ミドは出て行った。

部屋の中には、フラットだけが残された。

「……………」
彼は、独り言という習慣を持たない。

戦闘の際に、その開始と終了、及び損傷具合などを口を出すのが、それはあくまで彼がレーヴァにいたときデータをより簡単に取る為に教えられたものであった。それ以外の時、たとえば状況の確認ならばわざわざ口に出す必要は無いし、心理的状态ならば尚更だ。言わなければやってられない、などということを彼は経験したことは無かった。

しかし、この時。ただ一言、彼は、こう呟いた。

「……………」私は、何をやっている？」

大勢の人々が駆けていく中を、逆方向にすり抜けていく。

人々の表情には焦りが見られるが、そこまで深刻そうなものでもない。非常事態ではあるが、いつものことなのだから。

「落ち着いて避難して下さい！ 急ぐ必要はありません！」

時折、事故が起きないよう、兵士が人々の流れを整理している。

大半が通常兵だが、その中にはクラスメイト 呪剣聖の姿も見られる。ミドは彼らに見つからないよう、身を沈めた。逆走しているだけで相当に目立つのだから。見咎められたら厄介なことになる。

「っ」

改めて、自分がそういう状態になってしまっていることを自覚し、泣きそうになる。だが、自棄になるわけにはいかない。フラットとソウマの気持ちを無駄にしてはいけない。

そしてミドは、いつもとは違う重い鞆とローブを着て、その中を駆け抜けた。人の数がようやくくまばらになり

「？」

コトン、と。

ミドの目の前に、？何か？が落ちた。小石のような大きさのそれを思わず見下ろす。黒く小さな、獣のような形をしている。

それが、にわかに姿を変えた。

「！？」

青色の光。風船が膨れるように、いくつかの雲が一つになってその姿を変えながら増すように、それは姿を現した。

黒い瞳、金色の目、異形の爪、凶暴な牙。巖のような腕。それは、人間よりも二回りも大きな猿の姿をした

「な……」

「う、うわあああああ！ テスト、テストだあっ！？」

ミドの驚きと共に、周囲の一般人から、悲鳴が上がる。

「なっ……なっ、何で」

「おい君、逃げろ！」

近くの男性が叫んだ。聖服を見せていない以上、周りにはただの少女に見えるのだろう。同時にテストがその強靱な両腕を合わせて振り上げ、自分に向けて叩きつけてくる。

ミドは背後を確認する。避難経路を確保しているオールバックの呪剣聖 クレサトが、こちらに気付いた。だが、あまりに遠い。ミドの周りにはまだ数人の人間がいる。

どうする。どうする。どうする。

「……って、決まってるよね」

壮絶な音を立てて。

猿の両腕が、まるで鉄製のハンマーのような威力で振り降ろされた。

土煙が舞い上がる。地面にひびが入り、近づこうとしていた呪剣聖が二の足を踏む。ばさりと、引き千切れたローブが舞い上がった。「ごめん、フラット。君の気持ち、無駄にしちゃった」

固めた拳を受け止めた右腕が、真っ赤に染まっている。

まるで鋭く固まった溶岩で出来たような腕。聖石が、肩の付け根

までに侵食していた。ほとんど身体の中に埋まってしまっていて、肌の上からはほんの一部しか見えない。

「ミド、ミド・カレキシか？」

近づいてきたクレサトが、信じられないと言う声を出す。

振り返りながら、ミドは一筋の涙を流す。もう無理だ、と本能的に察した。能力を使うほどに、どんどん身体が軽くなってくる。これまでに無いほど力が溢れてきている。二、三週間どころか、あと半日だって保つ気がしなかった。

「クレサト。……大丈夫、まずは一般人を避難させて」

「ミド、貴様……」

問いには答えず、ふわりとミドは飛び上がる。力をすかさず、つのめる猿の顎を蹴り抜いた。巨体が玩具のように吹っ飛び、ミドはそれを追いかける。

「早く行つて！ でも、出来るだけ早く、あたしを」

これだけ定期テスト初期の段階に、この場所までテストが進攻してくるなんて、前代未聞だ。性質の悪い能力を持ったテストでもあるのかもしれない。余裕はない。

人を殺せ。

脳髓を苛むその衝動を強引に押し殺しながら、ミドは叫んだ。

「誰でもいいから！ さっさと、あたしを殺しに来て！」

「はあ、はあ……」

第三区画の中心から、やや外側。この辺りまでくれば、人はほとんどいない。

解体した大猿テストが分解していくのを見送りながら、ミドはゆっくりと膝をついた。

「ふ、う……」

右腕は鋭く、より長く伸びた異形のフォルムになっていた。テストに堕ちたあと、自分はどんな姿になるのだろうと考えた。この形

状からして人型ではないだろう。そんな益体も無い事を考える程度には余裕が生まれていた。

「う……」

脳を苛む衝動はますます強くなっている。地面に額を擦りつけ、口の中を噛み切り、その痛みに集中することで、必死に耐える。早く、誰か。そう願いながら。

「おーおー、酷い有様じゃねえか」
だが。

聞こえて来た声に、ミドは衝動すらも一時忘れて、思わず起き上がった。

「これだけのテストをほぼ無傷で解体か。やっぱり堕ちかけると違うな」

軽薄な口調。じゃらじゃらと全身につけているアクセサリが鳴る。

「ユージンっ!？」

気さくに片手を上げて微笑む、あの時竜に喰われて死んだはずの男が、そこにいた。

「生きてた、の……?」

「はっ。まあな。お陰さまでこの通り、五体満足さ」

駆け寄る。喜びのあまり、涙すら滲んでいた。あの時助けられなかった彼がこうして生きている。ミドにとってはそれだけで、自分のことがどうでも良くなるほど嬉しい事だった。

ユージンは軽くウィンクして、冗談めかして言う。

「なんだよ、俺が生きてたらマズいのか？」

「うん! そんなことない! そんなことないよ!」

ミドは首を振る。俯いて、感極まって溢れる涙を左手で拭った。

「良かった……生きてて、ホントに……」

「ああ、そうか。そうか」

うんうん、とユージンは頷いた。

「俺は最悪だよ」

さくり、と。

ミドの胸を、蒼いレイピアが貫いた。

「……えっ？」

声を漏らす暇こそあれ　刀身から漏れた光が、瞬く間にミドの全身を埋め尽くす。

「なっ、……ぐ、がつ!？」

あれほど全身に満ちていた力が抜け、ミドは地面に倒れる。痛みでも衝動でも無い、体の内側を触診されるような奇妙な感覚がミドの全身を覆い尽くした。

「枢学教禍【微分】　　呪剣解刀《コールド・キュレーター》」

ユージンはレイピアを引き抜くと、悶えるミドを見下ろしつつ数歩離れて、道端にあったベンチに座った。

その姿が、変わっていく。

じゃらじゃらと、レイピアに　鞘では無く、呪剣本体であるレイピアに装着されているアクセサリーが揺れる。既視感。あの猿が生まれる直前、目の前に落ちて来たもの。

それは、丁度あのようなアクセサリーではなかったか。

ユージンはその内の一つ　真っ白な聖服のアクセサリーを鎖から引き千切る。

「積分。クゾファイダ帝国呪剣聖服【白ラン】」

一瞬。それは、若干くたびれた、しかし荘厳な作りの真っ白な聖服に変化した。それを肩に引っ掛けるように羽織り、ユージンは一つ、大きな溜息をつく。

「積分。　やれやれ、老骨には応えるな、全く」

ゆっくりと、その姿が変わっていく。

輝いていた金髪が色褪せ、パサついた。若者らしい瑞々しさがあつた頬がこけて、顎に無精ひげが生える。話言葉も、チャラついた青年のものではなく、重々しく、枯れきった声音に。ミドは蒼い光の侵食に耐えながら、それを驚愕の瞳で見つめていた。

ユージン・クドーが　歳を取っていく。

「初めまして、ではないか。先程のユージンも私には違いない。…

…十三番が世話になったね」

壮年の男は、ぐっぐぐぐと喉を鳴らす。腐った沼で泡が弾けるような、暗い暗い笑い声だった。ユージンと名乗った男は、静かに息をつく。

「どうも。クゾフィーダ帝国、元第七位呪剣聖にして、流神クラス研究機関『レーヴァテイン』主任。名前は　　いいか。今は名も無き？^{ドクター}先生？だ」

四時間目【告語（こくご）】（後書き）

教禍【告語】

告げる言葉。言語魔法。種類によって三つに分類される

・幻代聞げんだいぶん

遠隔地へのメッセージの伝達。熟練者の場合、言葉だけではなく音声、映像すらも送ることができる。

・完文かんぶん

文字の意味の現実化。その一文字で完成された意味を為す文字『漢字』を操る。その性質上、結界や罫、付加術式に長ける。

・古文こぶん

古代語魔法。遣い手が極めて少なく、詳細不明。

また、全てに共通する能力で『物語文』に分類される術式は、まさに幻想小説のような現象を引き起こすことができる。

五時間目【枢学（すうがく）】

5時間目【枢学】

殺意の群れが、雲霞のごとく押し寄せる。

空が赤い。だが、夕焼けの紅色とは全く違う、もっと深く、もっと濃く、もっと鮮やか。

定期テストの日、夕陽が沈んだ後に現れる赤色の月。
赤天。

それが定期テストの時、人々を襲う恐怖の名である。

月の光が、クスノキを囲う草原に、森に、あるいは街道に降り注ぎ、その影が、その影から立ち上がるように、異形のテストが湧いて出て来る。猿、鳥、犬、牛、人、蛇。あるいはそれらの混合体。何十の、定期テストの規模によっては何百にも及ぶその圧倒的物量。近づいてくる地響きを見る度、3C副室長のマユはこの？試験？と名付けられた存在をおぞましく思う。

「ふっ！」

クスノキ北門前。

閉じ切った門を背後に、大虎の牙を、手にした得物でいなすようにして受け止める。その牙は間近で見ると、てらてらと濃緑色に輝いていた。毒か何かだろう。虎はそのまま、力づくでマユの呪剣を押し退ける。マユの態勢が崩れた。次いで、背後からは二足歩行する猪顔の巨人が、手にした斧を振り降ろしていた。更に地面からも、何かが這い出て来るかのように盛り上がる。三方向からの同時襲撃。マユは、ふう、と嘆息する。

「？そうか、そうか。つまりきみはそんなやつなんだな？」

マユの呪剣は定期テストが始まった際、とうに解刀されている。美麗な装飾を施された大鉄扇、それが彼女の呪剣《エーミール》の解刀容姿である。

それを手に、桜花のように、マユが舞う。

跳びかかった虎の横顔を聖服の裾が撫でる。振り降ろされた斧をすり抜け、鉄扇の先から、鱗粉のような黄色の光が散る。地面から跳び出した大蛇の牙が、何も無い場所を噛み砕いた。

紙一重。ふわりとマユが区域から離脱し、

「告語：物語文【少年の日の思い出】」
メモリーズ ラットテイル

虎が、猪が、蛇が、その舞の効果範囲にいた全てのテストが、糸が切れたように地面に倒れ、動かなくなった。

まるで、時間を掛けてゆっくりと体中の水分を全て抜かれたかのように、綺麗に乾燥したその姿は、昆虫採集の標本のそれを思い起こさせる。

「？君たちはいないよ。きみたちのことならもう知っているからね？」

ぱちん、とマユが鉄扇を閉じる。

それに呼応するように、今度は鱗粉が長大なピン針に形を変え、乾燥したテストの死体に殺到した。ピン針の雨に刺され砕かれ、消滅していくテストの残骸。

彼女の呪剣《エーミール》は……正確にはそれに内包された特異教禍【少年の日の思い出】は、あらゆる生体を劣化・乾燥させ、保存に適した状態に変える力を持つ。実質、広範囲の即死攻撃だ。並みの相手では近づくことすら出来ない。

消えゆく死体を尻目に、マユは一端、城門に背をつくところまで退避した。眼前ではクラスメイト達が一般兵の援護とともに奮戦している。かなりの乱戦だが、特に今のところのこちらの人的被害はない。上空や地中を通ったテストもない。

はずなのだが。マユは苛立たしげに鉄扇を掲げ、叫んだ。正確には、叫び声を送った。

『一体何があった！ 状況を報告しろ！』

それは先程の戦闘中に突然来た、信じられない通信への返事だった。

開いた鉄扇が、黄色のスクリーンのようなモノに覆われる。幻代聞だ。

スクリーンには、黒髪の青年　クレサトが映っている。

『こちら呪剣番号095383、アキヒデ・クレサト。報告を繰り返す。一般人を避難させている途中、区域三八三にてテストが出現した。　どうも、都市内のあちこちに小テストが発生しているらしい。城壁の内外問わず、どこるか第二区画の中にまだだ。通常の定期テストでは考えられん』

『こちらの門は破られていない！　他の連中は何をやっている！』スクリーンが細分化される。別の場所にいる端末を持った呪剣聖からメッセージが、声と映像あるいは声だけで送られてくる。

『こちら北門。呪剣番号097843！　門も外壁も破られています！』

『こちら西門。呪剣番号093231。こちらも同様です。空や地面から通り抜けた様子もありません。定期テスト自体は順調に撃退出来ています』

それらの返事は、現在回線の繋がっている全員に届く。だが、クレストは全ての門からの同じ意味の連絡を受けても、首を横に振った。

『奴らは突然現れた。湧いて出るように、だ。近くの一般人どもは何とか避難させてるが、半ばパニック状態だ。幸い出ているのは小物ばかりなのが救いだが……』

それよりも、と、息をひそめてクレサトは問いかける。

『そして加えるなら、ミドが堕ちていた。堕ちた身で理性を保ち、現れたテストと戦ってくれていたよ。……ということだ。昨日の間に何があった、副室長』

本命はこちららしい。クレサトが、真偽を確かめるようにマユを見る。

ミドの持つ端末は、昨夜から反応が無い。恐らく、例の竜と戦った時に壊されてしまっているのだろ。舌打ち一つ、マユは早々に

新たな判断を下す。

『おいクレサト。テストがまだ増える気配はあるか』

『む。いや、さっき一斉に現れただけで、こちらの確認では増えた様子はないな』

『そうか』

スクリーンが一斉に消される。もう映像は必要ではない。エーミールの聖石が強く輝く。根元にある聖石に口を近づけて、大規模通信を行った。

『全呪剣聖に連絡する！ 何者の仕業かは分かんが、街中にテストが召喚された！ 街中で一般人の避難を行っているものは通常兵に任せて迎撃に移れ！ 防壁の外にいる呪剣聖は、それらしき教禍の使い手がテストの中にいないか観察しろ！ それと、第三八三地点付近で、テストに堕ちたミド・カレキシがいるはずだ！ 見掛ければ捕縛、あるいは、理性を失くしていたならば殺害しても構わん！』

最後の言葉に、次々と新しい回線が繋がれる。驚き、恐れ、信じられないかのような声色の通信が次々聞こえて来る。

『おい、副室長！』

『マユ副室長、それは本当で』

『連絡は以上だ！ 各々、自らの役割を確実にこなせ！』

それらをまとめて切断する。黄色の光が消え、マユが苛立ち混じりに荒く息をつく。

『全く、一体どうなっている……この都市に何が起きている！』

『おやおや、忙しいネエ、副室長さん』

『！』

ぱつ、と振り向く。いつの間にか、彼女の隣に一人の青年が立っていた。この状況で彼女に気付かれずに隣に現れる。それだけで只者ではないが、その姿を見た途端、マユの肩から覇気が失せた。息をつき、疲れたような声を出す。

『……？チエシャ？か』

「うん、そうだよ。ハロー」青年は微笑む。「何が起きてるかは知らないけど、大変そうだねえ。トランプ兵たちが満身創痍で還ってきたと思ったら、今度は僕まで召喚されて、我らが召喚主はベッドでダウンしてる。これじゃあ僕でも、何でもない日おめでとうとも歌いたくなるさよ

状況を理解していないかのような軽い饒舌を揮うのは、奇妙な姿の青年だった。

紫とピンクで出来た縦縞の服。一見スーツのようにかっちりしているようでいて、あちこちが破れていたり、逆にだぼだぼだったり、フリルのような装飾がついていたりする。猫の耳が生えた頭は、真つ黒なぼさぼさ髪。美しい青年の顔は、今の不機嫌極まりないマユの視線を受けても、まるで公園で遊ぶ子供のように無邪気な笑みを浮かべていた。

シーナ・ミナーチの持つ唯一の完全自立型召喚獣『チェシヤ猫』

だ。共通語を話せる数少ない召喚獣でもある。今の彼女の状態でこの状況に対応、貢献するには、確かに最も有効な手段だろう。

「？召喚士はこういう時便利なのよね？だってさ。まあ、協力するよ？ ご主人の命令は絶対だからね」

「……こういうところは抜け目ないな。流石は聖徒会と言ったところか」

だが、完全自立召喚獣ともなると呼び出すときの負担も段違いだ。まさか本当に衰弱死してはいないだろうが、相当な無理をしたに違いない。

カツカツ、と音高く靴を鳴らしながら、マユはチェシヤの隣をすり抜けようとして、ふと足を止める。振り向いて、チェシヤに片手を差し出した。

「既に？赤天？も登った。これから更に定期テストの波は加速するだろう。私は戻る。市街戦は私の能力とは相性が悪いが、仕方が無い。手を貸せ」

「困るネエ、僕はあくまでシーナの召喚獣なんだから、貴方の命令

は聞けないよ？」

「分かっている。どうせシーナから命令を受けているのだろう。……せつかくミドのいる場所を教えてやったんだ、その前に少しくらい手を貸せ」

「いやはや」降参とばかりに手を上げながらも、チエシヤはくすくすと微笑を崩さない。「これだから。僕は読解力のある子は嫌いだよ」

す、と恭しくその手を取り、

「では少々失礼。？ I grin like a Cheshire cat？」

二人揃って、その姿を消した。

「くっ……あ……」

ミドが、額に脂汗を浮かべながら呻く。傷自体は即座に血液が固まって塞がっている。今彼女の動きを止めているのは、彼女を取り巻き、神経の中に溶け込むような青色の光だ。

「安心したまえ、外傷はない。もともと、今の君が外傷で死ぬのかどうかは、やってみないと分からないところではあるがね」

それを見下ろして、？ドクター？はまるで、それこそ教え子に向かうように語る。

「僕の呪剣《コールド・キュレーター》が内包する魔法は、枢学の中でも最高難度を誇る術式の一つ【微分】だ。物事の細部の特徴を解析・補足して抜き出し、その結果に準じて現実を書き変える。曲線の物体を、ある一点の傾きを取り出して直線にしたり、あるいはつい先ほどまでの僕のように、年齢を遡る　というよりも、過去してきた人生のある一時期の姿をその性格・性質ごと再現したりすることも出来る」

いやはや、あの頃は若かったよねえ。と弁解するように頬を掻い

た。ユージンの性格は演技では無く、彼の若い頃の素らしかった。

「じゃあ、あの時、竜に喰われてたのは……」

「ただの身代わりさ。一般兵一人くらい、分室駐屯都市ならばさしたる損害でもないだろう？」

いけしゃあしゃあとそんなことを呟く。

「まあ、誤解を恐れず一言で言えば、微分っていうのは？デIFOアルメ？だよ。そう僕は考える。この刀身で刺した何もかもを、小さく可愛らしく、無害にして保持する。それが僕の呪剣の主な能力。解放する時は積分をすればいい。そっちは専門じゃないから良くは知らないけどね。つまるところ、今君は、分析されて簡略化されようとしている真つ最中なわけだ」

「な……」

顔を上げようとして、ミドの視界が翳る。慌てて頭を振って意識を持ち直す。

だが、その瞬間に、今度は殺意の衝動が襲ってくる。もはやまともな感覚は無いに等しかった。ミドは声にならない声を上げて身体を振る。頭がおかしくなりそうだった。

「ふむ。しかし、堕ちてテストに変化中の人間を微分するのは、分析する主体が定まってない分時間が掛かるな。ここに研究機材があればいいデータが取れそうだが。まあ、高望みはすまい。君が完全に人としての姿を失くした瞬間に微分出来るよう、計算しておこう」研究。その言葉が、ふと頭に残る。

「お前、さつき、フラットって……」

「ああ、そういえばアレとは一緒じゃないんだな。家に残っているのか。まあ、アレらしいといえばアレらしい判断か」

「なんだよ……何なんだよ、お前……！フラットと、何の関係がある！」

ぎり、と歯を噛み締めて睨みつける。そうできているのかは分からないが。

その様子と言葉を受けて、ドクターは首を傾げた。フラットの動

作よりよほど人間らしい。

「……なんだい、君。もしかしてアレの正体に気付いてないのか？」

「……フラットは、適性が劣等の、呪剣聖で……」

「おいおい、冗談じゃないぞ。本当に気付いてなかったのか」こめかみに指を当てる。「アレが呪剣無しに教禍を使う所を見ただろう？ 少なくとも最低一回。僕が鬼型テストをけし掛けて確認した時に、君もあの場所にいたじゃないか」

「………あ」

「………はあ？」

二人が、状況の割に、けっこう、いや、かなり間抜けな声を出した。

そつだ、とミドは言われてみて初めて気付く。てつきりあの短刀が呪剣かと思っていたが、外から聖石が見えなかったり、偏差を欠片ほども感知できないのは妙だなあとと思った。しかし聖石が内部にあるまたは極小の呪剣もあるし、そもそも自分は偏差感知力が鈍いからと脳内補完していた。

だが、確かにそつだ。何せ、先程ミドが暴走してフラットを襲った時、短刀ははつきり破壊したのに、彼は教禍を使っていたではないか。

「君……大物だな」

「い、いやあ……」

「言っておくが、褒めてはいない。……アレは、僕の研究成果さ」話の流れを無視して、ドクターはそう切り出した。

「今の呪剣聖のカリキュラムには無駄が多すぎると、そう思ったことはないか？」

「？」

不可思議な問い。だがそれはドクターにとっては途轍もなく重要なことらしく、彼の拳には力が籠もり、目の色が変わった。

「高いストレス耐性を持つ人材を揃え、危険が伴う契約を終えてようやくスタート地点。いくら鍛えても剣を起点にしか能力を発揮で

きず、どんな些細な教禍でも使うだけで脳を痛め、一部の例外を除けば聖石の力を本来の十パーセントも引き出せない。その上呪剣を取り上げられてしまえば無力と来たものだ！　これが不良品でなくてなんだろうか！」

身振り手振りを交え、まるでこれが演劇か何かのようにオーバーな仕草で話す。ミドが見えているかどうかなど関係無い。間違いなく自分に、あるいはその研究に酔っている。

「だから僕たちは目指した。呪剣と呪剣聖を一つにする。呪剣に縛られず、無手でも最強の力を発揮する？　異能者？　を作り上げることをね。　今まさに、君は体験していただろう？　呪剣と一体化した呪剣聖の力を」

「　　っ」

ミドが言葉を失くす。確かに、テストに落ちてから、ミドの力は跳ね上がっていた。それはミドがテストに近づいていることの証でもあるが、つまり、ミドの呪剣には元々それだけのことが出来るポテンシャルがあったということでもある。

「もちろん、ただ人間に聖石を埋め込むだけでは、君のようにテストに落ちるだけだ。僕たちは研究を重ねた。それはもう必死に重ねた。一般人からすれば神への冒涇とすら言われるような領域まで。その結果、アレらを創り出したのさ。　　彼ら自身が聖石であり、

呪剣であり、呪剣聖である『洩神^{とくしん}クラス』を！」

トクシンクラス。ドクターは一際その言葉を強調した。

「呪剣に縛られず、途方も無いほどの偏差値を圧倒的な精密さで行える実験体　あるいは実剣体。完成すれば、この時代に革命を起こすことすら出来たはずだった。……だが」

途端、ドクターの目が、俄かに憤怒に染まった。ぎり、と唇が切れるまで歯を噛み締め、指が白くなるほどに手を強く握った。

「……想定外の事態が起きた。洩神クラスの中でも最高位の個体が、自分がテストに落ちることを分かっていたながら、限界を超えた偏差値を行使。　　その時生き残っていた実験体を全員、世界各地に飛

ばしてしまっただ。どうしようもない不手際だ。おかげで僕の出世街道はまた白紙に戻ってしまった。どころか、僕は世界各地に散った流神クラスの回収という無茶な任務を命じられた。ここに潜入するのも大変だったんだよ？ 名前と聖徒手帳を偽造したまではいいものの、年齢が年齢だから常時微分してなければいけないし、記憶はそのまま頭の中にあるとはいえ、若い頃の僕の性格は自分勝手だし。……ま、いきなり実験体の一人に出会えたのは不幸中の幸いと言ったところだけれど」

愚痴りながら脱力し、ベンチに腰を降ろすその姿は、聖服の白ラシさえなければ、まるで家庭を締めだされた父親のようでもあり、いささか滑稽だった。

モンド・ケラムラ・リンザスベラント

「《響通言語・希望となる者》それが僕たちがソレにつけた銘だった。発動光こそかろうじて詠語寄りだったが、とても詠語専攻とは呼べない突然変異体だ。無条件無制限無詠唱で空間と空間を繋ぐ能力。転移・瞬間移動能力を持つ教禍や外神は少なからず存在するが、彼女はまさにそのハイエンドだった。完成さえすれば、まさに無敵の呪剣聖になるはずだったのに」

「……それって、まさか」

ミドは、実を言うと彼の言っていることの半分も理解出来てはいなかったが、彼の挙げたその能力には思い至ることがあった。当然だ。それは他ならぬ、彼女が今こうなっている理由の一端なのだから。

ドクターは顔を上げた。口元だけをひん曲げて笑みの形を作り、頷いた。目は笑っていない。

「さすがにそこを忘れるほど阿呆じゃなかったか。その通り、君が自分を堕としてまで真つ二つにして下さった、あの竜さ。全くレーヴァの人員を半分近く犠牲にしてまで微分したというのに、いきなりやられるとは思わなかった。やはり理性と頭脳が揃ってこそその力だな。偏差値ばかり高くても戦いが強いとはいえん好例だ。全く」

「ちょっと、待って」

ミドが、彼の問わず語りに割りこんだ。半ば愚痴と自論展開になっていたドクターの言葉が止まり、面倒くさそうにミドを見る。

ミドの頭はかなりぼやけている。霧が掛かっているどころか、海の中に沈められたかのように思考も身体も鈍っている。彼の言っていることがミドには、だいたいのニュアンスでしか理解出来なかった。

だから確認した。

「お前が、フラットをあんな風にしたのか！」

叫んだ言葉に、ドクターは眉をひそめた。

「あんな風？」

「決まってる！」這いつくばったまま、ミドは噛みつくように叫ぶ。「あんな身体で戦わせて、感情も何もかもない、まるで、人形みたいに！」

今度こそ、男は面喰らったようだった。あるいは、ミドがフラットの異常に気付かなかったと聞いたとき以上に意外そうに、肩を竦めて首を傾げた。恐らくミドは、竜 エスペラントをけし掛け、彼女を墮としたことの方を言及してくると思ったのだろう。

もちろん、ミドとてそちらに考えが至らなかったわけではない。

それよりも優先したというだけだ。ただ思い出していた。彼の異常なまでの合理的な態度を。ミドと戦ったあの一瞬、自分の命すらあつさりと勘定に入れて、自分の感情を欠片ほども持たずに戦う姿を。

反射的に分かってしまった。フラットは感情が無いのではない。失ったでもない。最初から、教えられなかった。この男にその機会を奪われていたのだ。だからあんな、無垢のまま凝り固まったような性質になった。傍から見れば記憶喪失にすら思えてしまうような、何も持っていない人間にってしまった。

「……何を言うかと思えば。アレは僕が一から作ったものだ。そう

いう風になるように創り上げた存在だ。失敗作の落ちこぼれではあるが、君に文句を言われる筋合いは無い」

「そこまでして……！フラットみたいな子たちをたくさん産んで、アンタは一体何がしたいんだよ！　どうしてそんなことが言えるんだ！」

その質問に、ドクターは表情を変えた。形だけの笑みを、それすらも消した。

「　決まっているだろう。『幸福』だ」

即答だった。

ともすればそれはフラットの返答にすら及ぶような、鏡が光を反射するようにその言葉は返ってきた。ミドの言い分にどこか困惑していた様子が一瞬で消え去っていた。

「呪剣戦争において、優秀な呪剣聖の輩出は万人の悲願だ。僕は流神クラスでこの呪剣戦争の頂点に立つ。そうすれば僕はかつての地位を取り戻し、クゾフィーダはますます栄え、結果的に流神クラス含め、誰もが幸せになれる。呪剣戦争とは、そういうものだろう？

貴様もそう教えられて育ったろう、カレキシの出なら！　この世代なら！」

「……！」

「クゾフィーダの今の世代を　そうだ、あの糞忌々しい？ワンハンドレッド？すら超える、その為に僕は流神の罪を犯した！　奴を地に這い蹲らせ、血反吐を吐かせながら許しを請わせてやる！　踏み躪り冒瀆し凌辱してやる！　かつて僕が受けた屈辱を、何百倍にもして返してやる！　それなくして、僕はもはや幸福にはなれない！」

ワンハンドレッド。ミドですら聞いたことのある、最強国家クゾフィーダの頂点に位置する呪剣聖だ。

自ら口にしたその名に対し勝手に憤って、ドクターは立ち上がった。その瞳は錆びた銅のような色合いをしていた。ドブ川を固めたような瞳だった。拳を握り爪を潰し唇を噛み切り、彼はレイピア

コールドキュレーターをミドに向ける。

そして、

「僕はその為に」

「はいはい、御高説どうも」

男の後ろに、微笑みを浮かべた猫耳の青年の姿が現れた。

「な」

ドクターが驚愕に表情を凍らせる。かろうじて反応し、背後に振り向こうとしたその喉元に、鋭い爪が突き付けられた。

「おっと、プリーズ、プリーズ。OKかい？ ナイスミドル」

その背後にいるのは、異様なスーツを着た猫耳の青年だ。ミドには見覚えがある。確か、シーナの召喚獣の

「チェシャくん？」

「そういうお嬢さんはミドだったっけ。ちよいとご主人の命令でね、助けに来たよ」

「ミドさん！ 大丈夫ですか！ まだ意識はありますか！」

次いで、ミドとドクターの間に割り込むように、おかつぱの少年が滑り込んできた。ミドの肩を取って抱き起こす。ちゃらりとその胸元でロザリオが揺れた。ソウマだ。

「……生徒会長の予想は当たっていたな。チツ、傍迷惑なことだ」

「だが問題ないだろう副室長。彼がまるで主人公に留めを刺す直前の大ボスのように饒舌に自らの事情を語ってくれていたおかげで、このように俺達は間に合い、俺はなかなか面白い話が聞けた。今後の創作活動の役に立つ」

次いで、オールバックの少年 クレサトが現れる。目を丸くして驚くミドの前に、盾をなるように立って、長剣の柄に手を掛けていた。そして最後に現れたマユが、鋭い目でミドとドクターを順々に見た。閉じていた鉄扇をドクターに向け、音も無く開く。

「君たちは……ここの呪剣聖か」

「それ以外なわけがないだろう。さて。私としては、年長の呪剣聖相手に無遠慮に接するのはいささか心苦しい。抵抗しなければ、捕

虜として妥当な扱いを約束しよう。どうかね」

「……ふむ。それはまた魅力的な提案だな」

ドクターは目だけで周囲を見渡した。

彼に首筋に突き付けられた爪は鋭く、ギリギリで止めるどころか、頸動脈に半ば突き刺さりかけている。背後のチェシヤは、血なまぐさいその行為とは裏腹に、ニコニコと笑っていた。元々この世界の人間とは価値観も何も違う存在だ。ほんの僅かでも下手に動けば首を掻っ切るだろう。ミドの前にはマユとクレサト、それにソウマ。

現在の極限状況においては、まず最良と言っていい陣形である。相手の正体も目的も、本人が懇切丁寧に説明してくれたのだから十分警戒出来ている。

「だけど、僕を捕えるのはいいが、そのテストもどきの化け物はいいのかね？」

「ミドさんはテストなんかじゃない！」

ソウマが大声で叫ぶ。ミドを抱く手が強まった。怒りと不安と、隠しきれない恐怖が滲んでいながらも、ソウマはミドから手を放そうとはしない。

その様を酷く不快そうに見下ろして、ドクターは今度はマユに話し掛ける。

「副室長殿も同じ意見かな」

「さあ。私はそこまで甘くはない。ただ言えるのは、それは私のクラスの問題であり、貴殿に首を突っ込まれる必要はまるでないということだけだ」

「……ふむ。甘いな。これがアレか。いわゆるゆとり世代という奴か」

「ロートルが出しゃばるよりもずっとマシだよ。　どうする。死ぬか、囚われるか」

「副室長マユ・クジャ・クヤマ。あとの二人は知らん顔だな」

ドクターは質問には答えない。ただ淡々と、自分の世界に入り込んでいるかのようにわけの分らないことを呟く。

「だが、確か室長の《廃墟因子》はいないんだったな。ならば……十分か」

「……何が十分だと？ 貴様を捕えるには 殺すには、十分な戦力だと思うが？」

痺れを切らしたマユが鉄扇に光を纏わせて詰問する。

「いいや」

それでもなお、ドクターは不敵に笑った。

「こいつに殺させるには、十分な手柄だと言ったんだよ、お嬢さん。積分」

間髪入れず、その背後に、巨大な口が現れた。

「！」

振り向いたチェシヤの表情から笑みが消える。人間数人を丸ごと呑み込めるような巨大な口は、その内部に剣山の如く牙を生やしていた。

「ッ」

行動は迅速だった。引き様にドクターの喉を掻っ切り、口の中で素早く何かを唱える。

閉じられた口が、チェシヤとドクター、彼らのいたベンチごと、もぎとるように全てを呑み込んだ。ぐしゃ、と木と金属と肉と骨と、そういったものが合わさったおぞましい音が鳴り響き、ミドが悲痛な声を上げる。

「チェシヤくん！」

「落ちつけ馬鹿もの、？ チェシヤ猫？ はあの程度では死なん！ だが、なんだ、自爆か！？」

「いや、違います！ ミドさんの教禍がまだ解けていない！」
ソウマが叫ぶ。そして 食い千切られたドクターの身体、その僅かに残った脛から下が、光と共に一本の剣の柄に変わった。

それを見たクレストが眼鏡の奥で目を見開く。

「これは……つまさか、替え玉呪剣か！」

「なんだそれは！」

「自らの身代わりを作り上げる特殊技術だ！ 生贄の人間一人と呪剣一本を使い捨てにして、自身のコピーを作り上げる……だが一昔前の外法だぞ！ まだ使える奴がいたとはな……！」

「前時代の遺物が……クソ、いつの間に入れ替わって」

三人の考察の言葉が、まとめて一つの轟音に掻き消される。

石造りの地面を跳ね上げ、真っ黒な影が身を起こす。今の今まで微分されて、ベンチの下にでも置かれていたのだろう。それが、積分によって、元の姿を取り戻した。

「ひ、あ」

ミドが悲鳴を漏らした。支えてくれているソウマに捕まって、ガチガチと全身で震え始める。

「そんな、何、で」

どうしようもなかった。怖がるな、怯えるなと言う方が無理がある。

強靱な尻尾が振り抜かれ、背後の家を打ち崩す。

物など掴めそうに無い、鋭い爪指が何十と生えた手が、ゆっくりと開かれる。

「あたしが、真っ二つに、斬ったはずなのに」

『言っただろう。コレは、空間と空間を途方も無い精密さで繋ぐ』

どこからか、得意げなドクターの声が聞こえた。

巨大な体躯が揺れるたび、大気が鳴動する。空に穴が開いたかのような、漆黒の鱗を身に纏い。その表面には、血管の如き赤い紋様が、鼓動のように鳴動していた。

そしてよくよく見れば、中心に一本真っ赤な線が通っている。赤色の光。空間と空間を繋ぐ、異端術式の光。

『傷口と傷口の間の空間を繋いだのだよ。そうして傷は傷でなくなり、致命傷は致命的ではなくなる。僕の想像以上の成果だ……これに、斬撃は通用しない』

背中に聳える小さな翼は、退化していて飛べそうにない。だが、ミド達の視線から見れば、その身体は、天にも届こうとしているか

のように見えた。

爛々とした瞳が輝き。

「！」

膨大な偏差値を伴った咆哮が、大気を割り碎いた。

『何の意味も無く長々と話をして、包囲されるような間抜けを、僕が侵すと思っていたのかい？ だとしたら君たちは僕を舐め過ぎだな。 不意打ちによって、より衝撃的により圧倒的に実力者を塵殺する。 効率的だろう？』

その真の名を、ミドは既に聞いている。

テストブック
エスペラント
試験化・《希望となる者》。

絶望としか言い様が無いその威容が、赤い光をバラ撒いた。

静かに、フラットは顔を上げた。

エスペラント。

ここからでも分かる。彼女の偏差値は極めて異端で、特徴的だ。だが、以前よりも遥かに強大な値になっている。恐らくテストに堕ちているからだろう。

ミドと同じく。

そして、エスペラントがいるということは、ドクターがいる。

ミドを殺す為に。

「私は……」

フラットはゆらりと立ち上がって、外に出ようとする。その動きが途中で止まる。

何の為に？ フラットは自問する。

決まっている。ドクターの元に帰る為だ。

それでいいのか？ そんな疑問が生まれる。

「……………それこそ、何故、です」

それじゃいけない理由なんて、何も無いはずなのに。 ならば何故

私はミドにあのような助言をした。どのみち彼女を死ななければならぬのに。殺されるのに。

いつもよりほんの少し、いつもより強い力を込めて、扉を開けた。
「きゃ！」

中ほどまで開いたところで、扉が何かに当たった。続いて、とすと軽い音。

「……………」

こんなところに障害物などあっただろうか。いや、そんなことはありえない。扉を回り込むと案の定、そこには人がいた。尻餅をついている華奢な少女。

「あ、フラットさん！ 良かった、やっぱりここにいたんですね」

「イリナさん。何故ここにおられるのですか？」

「えっと……………」

たどたどしい言葉で、イリナがそつと言う。息が乱れていた。よっぽど走ったのだろう。

「フラットさんが、ひ、避難場所にいなかったたので。私、もしかして貴方が、チャイムのことを知らないんじゃないかな、と思って、そう思ったら……………」

「それだけの理由で？ その為に、避難場所からここまで逆走してきたと？」

半ば詰め寄るようにそう問いかけると、申し訳なさそうにイリナは口をつぐんだ。

「ご、ごめんなさい。…………でも、もしかしたら、って思ったら、心配で……………」

目元を潤ませる少女を、フラットは心底理解出来ない、と思った。
「…………どうしてですか？」

「へ」

がしりと、肩を掴む。思い浮かぶのは、ミドの涙であり、ソウマの怒りであり、シーナの警戒であり、クレストの熱弁であり、ミドの、笑顔だった。

「貴方たちはどうしてそんなに、理に合わない行動を取るのですか？ 今の状況が危険なものであると言うことなど私は知っていますし、この街に住む貴方なら私以上に知っているはずです。私が今ここに留まっていたのは偶然です。わざわざ危険を侵してまでここに来るなんて、愚の骨頂です。……それが、貴方達が持つ心というものなのですか。私にはいつになったら、貴方たちが理解出来るのですか？」

「は、への、えと。あの、あの」

いきなりの詰問に目を白黒させるイリナ。瞳に涙が溜まる。これは返答は得られないかと推測したフラット。だが、彼女はフラットを真正面から見上げた。

「そ、そういう難しいことは分からない、です、けど。何がこころか、だなんて」

そして言う。

「なんだか良く分からないけど、やらなきゃいけないような気が、しちゃうんです」

「」

静かに、フラットは息を吞んだ。……たどたどしい口調で、続きを聞く。

「……それを行うことで、後悔しないのですか」

「やってみなければ、分かりません」

「テストに襲われて死に掛けたら、どうするんですか」

「そのときは。……フラットさんが、助けて下さい」

臆面も無く、そんなことを言う。しかし言うてから、さすがに申し訳ないと思ったのか、目を逸らして両手を上げる。

「あ、えっと、フラットさんに頼るのは駄目、だと思っんですけど」

「……なるほど」

フラットは頷いた。

「成程。成程。成程。なるほど、なるほど。それがいわゆる感情なのですね」

何度も、何度も頷いた。それは無意味な行為だった。返事は一度だけで良い。相手に聞こえているのなら尚更だ。

「フ、フラットさん……？」

「とても貴重な事実を窺いました。ありがとうございます」

「は、はあ……？」

フラットは、イリナの手を取って立たせる。

「貴方はすぐに戻って下さい。ここは危険です、送りましょう」

「送……え、あなたは？」

「私は、少々やるべきことが出来ました。……ミドの所に行かなければ」

「ミドさんって……まさか、定期テストを受けるつもりなんですか？」

呪剣聖ではない身で戦場に出るのか、と、イリナの表情がにわかに曇る。フラットはそこで、頭を下げた。イリナの手を引きながら、避難所に向けて早歩きで歩き始める。

「すみません、イリナ様。私は嘘をつきました」

いつものように、淡々と言う。

「実を言うと私は、途轍もなく強力な呪剣聖なのです」

「？ レッツ・メイク・アルカディア いいくに作ろう？！」

クレサトが叫ぶ。その詠唱に応じて、周囲の地面から大量の水が立ち上った。

「 かまくらはくふ 轢士教禍【渦枕瀑布】！」

形作るは、彼ら全員を囲う立方体の水壁。それが、無造作に振り降ろされたエスプラントの右腕を受け止めた。ばしゃあんと壁の半分近くまで腕が沈み、爪の先端がクレサトの上三十センチほどの位置で停止する。

「我が《ミナモトメソッド》総動員でもこれか……！ なんだこの化け物は！」

冷や汗を浮かべながら叫ぶクレサト。その右手にはよく見ると聖石の埋め込まれた長剣の柄だけがある。いや、柄だけではない。鍔元から伸びているのは、十数の欠片に分割された長剣の刀身が、ワイヤーによって連結されたものだ。俗に蛇腹剣と呼ばれる種の武器。刀身は水流を放ちながら周囲の家や木に引っ掛かって駆け廻り、水の壁の軸となっている。

これが彼の呪剣《ミナモトメソッド》である。元々はドクターの捕縛用に周囲に張り巡らしていたのだが、その全てを防御陣に動員しても、なおエスプラントの一撃を受け止めるのがやっとであった。

「駄目、クレサト、下がってッ！」

ソウマに抱えられたミドが、危機を感じ叫ぶ。その懸念通りに、エスプラントが吼えた。ミド達の周囲に赤い光が展開される。一瞬で水の壁を難なく飛び越え、竜の口腔がクレサトの正面に召喚される。

「な」

軽口を叩く暇も無い。クレサトの視界に一瞬で牙の群体が広がり、「退け！」

その背中を、マユが掴んで後ろに放り投げた。シーナからの話を聞いており、光自体に反応出来たのが功を奏した。がじん、と口が閉まる。その無防備な頭蓋目がけて、マユは鉄扇　自らの呪剣エーミールを振り被る。

「？　そうか、そうか、貴様は？　ッ！？」

だが、向かい合っていた光景が、一瞬で変わる。赤い光が眼前に灯った。

「しまっ」

目の前に竜の口腔。それは変わらない。ただ、足元が消え、景色が逆さまになり、眼下に竜の全身と、そこから少し離れたミド達を見た。即座にマユは理解する　自らを転移できるのだ、他の物を転移できない理屈は無い。

再び、地獄の門のような竜の口が開いた。

「副室長！」

瞬間、水流の線が、マユとエスプラントとの間に走る。ミナモトメソッドによる足場に咄嗟に手をつけて跳び、マユはエスプラントの食い千切りの範囲から逃れる。

だが、そこまで刀身を伸ばしたということは即ち、今まで水壁に使っていた分が無くなっているということである。

「……チツ」

銀縁眼鏡を押し上げ、クレサトは静かに呟いた。

「……しまった。死亡フラグを言い忘れた」

薄くなつた壁を打ち破り、振り下ろされた竜の右腕が、その姿を押し潰した。

「クレサト！」

かろうじて、致命傷となる爪の部位は避けていたが、クレサトの肉体が異様な音を上げ、地面にクレーターじみた凹みが出来た。呪剣聖が倒れたことで、呪剣が解刀容姿を失う。宙空に浮いていたミナモトメソッドの刀身から水が消え、ばらばらになって地に落ちる。

「見下せ《エーミール》ッ！」

鉄扇を広げて、マユが舞い上がった。エスプラントに上空から飛び掛かり、迎撃に振り上げられた腕の一撃を風圧に乗って舞うようにかわす。鱗粉を撒き散らしながら、たん、と腕に着地し、

「ラッズデイリー！」

乾燥し脆くなったエスプラントの右腕を、具現化した無数のピン針が貫いた。

頑強な竜の肉体も、そのものを劣化させた上で貫くマユの攻撃を完全に防ぐには足りない。蝶のような舞いの動きで、暴れる竜の手の届かない遠くの位置まで飛び降りる。マユは血振りをするように鉄扇を半月の軌道に降り、下段に構えた。怒りに駆られたエスプラントが、離れたマユを見て咆哮と共に赤い光を纏わせる。

「来いー……ッ！」

マユが叫ぶ。一か八か、相討ち覚悟の特攻をするつもりだった。

このテストは希有能力こそ持つてはいるが、根本的には物理攻撃しか出来ない。腕が来たら肩ごと貫い、牙が来たら首ごと持つていく。恐らく、攻撃自体を完全に防ぐことは出来ない。それでもやらなければならなかった。現状のクスノキの呪剣聖で、恐らくまともはこのテストを殺傷出来るのは自分しかいないと分かっていた。

だが、思いつめるあまり彼女は忘れていた。いや、忘れるしかなかった。この時の彼女に、そこにまで対応できる余裕は元よりなかった。

「積分」

エスペラントの攻撃に先んじて、ひゅん、とマユの上空に投げ上げられたものがあつた。それはフィギュアであり、アクセサリであり、一軒の、家のミニチュアだった。

強大な竜の足元で、ひっそりとその影に隠れたドクターが、嘲るように呟いた。

「？家落とし？」

ぐわん、とマユの視界を埋める『家』。

どこかの廃屋か、あるいはその為だけにドクターが買ったものか。彼女の呪剣は、生物以外にはろくに作用しない。そのことをドクターは早々に見切っていた。

「」

声さえ上げる暇も無い　マユの姿は、一瞬で一軒家に押し潰された。た。

「マユさんっ！」

茫然とそれを見つめながらも、ただ一人残されたソウマは叫ぶことしか出来なかった。

彼は極めて優秀な呪剣聖だった。聖物教禍専攻の中では、恐らく3Cで一番の聖石を誇る。ここに来るにあたって？完全にテスト化するまでミドには手を出さない？という要求をマユに出し、マユがそれを呑んだのも、ひとえに彼が優秀だからだ。

ただ、彼に単体での戦闘能力はない。そうでなければ、多重専攻

というリスクを侵してまで他の呪剣と契約しようとしたりはしない。
「ちく、しょう……！」

ソウマは、抱えていたミドを突き飛ばす。真横から襲いかかった
竜の尾が、その小柄な体を弾き飛ばした。小石のように吹っ飛び、
ソウマの体は近くの家屋に突っ込んだ。

「む。今のガキ、聖物教禍か。貴重だな、あとで貰って行くか」
ドクターがそんな独り言を呟いた。いつの間にかエスペラントの
脚元にいた彼は、どす、と無造作に竜の脚にレイピアを突き刺す。

蒼い光が輝いたと思えば竜の姿は消え、男の掌にはエスペラン
トのフィギュアが落ちてきた。

そして。

その場に立つものは、ミドとドクターしかいなくなった。

みんな。

みんな、やられてしまった。

「……………」

周囲を見渡す。クレサトは凹んだ地面の中心でうつ伏せに倒れ、
ぴくりとも動かない。民家に突っ込み、崩れた壁の下から、ソウマ
の脚だけが見えていた。

背後で落下と共に倒壊した一家屋が、道をふさいでいた。土煙が
収まっても、中のどこかで崩れる音がただけで、それっきり、静
まり返った。

いや、その三力所から小さな、確かな反応が生まれる。ミド
の表情は一瞬輝き、そしてすぐにそれ以上の暗闇に突き落とされた。
「え……あ」

それに真っ先に気付いたミドが、身を丸く縮こめる。

「ひっ、いや、やめて、……来ないで、いや！」

三人の身体から（マユに限っては、その姿は見えないが）、赤い
煙のようなものが出ていた。血霞。この期に及んで尚、ミドの

教禍はより強大化した出力を以て、周囲の血液を使い手の元に集めていた。ドクターが、笑みを深めた。

「いい教禍だね。人が死ねば死ぬほど、傷付ければ傷つけるほど、殺せば殺すほど強くなるとは。これほどテストらしい教禍も珍しい」

「や、やだ！ やだ！ やだ！ …… 何で、何でこんな酷いこと…

…！」

その言葉は、誰に向けたもののなのか。

ミドは幼い子供のように首を振ってヒステリックに喚く。寄って来る血霞を手で払おうとしても、触れた先から吸収していくため、まるで無意味だった。いや、意味はあるといえばあった。それを見たドクターがひどく不機嫌そうに顔を歪めたことだ。

「どうして、か。はあ。僕はきちんと言ったはずだよ、君に」

「……？」

「周囲は努力や信念など見てはくれない、意味があるのは結果だけだ。他者に比べてどうか、というその結果だけだ。いいことを教えてあげよう、この世界は相対評価なんだ」

そんなことは言っていない いや、思い出す。それを言っていたのは、ユージンだ。ドクターの、若い頃の人格。何世代か前のクゾフィードの一桁順位。

「第一ね。元はと言えば、君が話をこじらせたんだよ」

「！」

出来の悪い教え子にそうするかのように、分かりやすく、ゆっくりとドクターが言う。

「話はフラットから聞いているよ。死に掛けていた彼を助けたんだってね？ だけどね、そもそもあの程度の失敗作、僕としては死んでいても一向に構わなかったんだ。洩神クラスの機密がバレることの方がそれよりもよっぽど面倒なんだよ」

……？ 話は、フラットから聞いている？。

何よりもその言葉に、ミドは改めてショックを受けた。いつの間に接触していたのか。いや、時間はいくらでもあった。そして、彼

はミドの隣につきさつきまでいたのだ。

笑い出したくなった。何が、悪い人な気はしない、だ。とつくに自分は裏切られていたのか。いや、彼はこちらを騙す気などなかったのだろう。彼は初めからドクターのもので、それを強引に引き入れ、救った気になって、勝手に騙された。

「なのに君は呪剣聖の身でありながら、詳しく詮索しようともせず、あの落ち零れを迎え入れた。そして僕がここまで動く理由になった。聖人でも気取りたかったのかい？ 器の広さでも示したかったのかい？ 見直し確認は呪剣戦争の基本だよ、親は教えてくれなかったのか？」

「やだ……いや……」

耳を塞ごうとして、それも出来ない。出来ても左腕だけ。肥大化した右腕は、もう彼女の言うことなど聞いてくれなかった。

「……これが名家カレキシの果てか。見るも無残なものだね」

舌打ちし、静かにドクターはレイピアを横ざまに構えた。青色の光が、薄い刃を形作る。その鎬で、俯いていたミドの首を上げる。

「もう堕ちるのを待つのも面倒臭い。君のような呪剣聖、駒として扱うだけで縁起が悪くなりそうだ。首を飛ばす。最後に何か言いたいことは？」

「……………」

ミドは涙を流していた。泣くことしか出来なかった。

涙と疲労と、他にも様々なもので、彼女の意識はとうの昔に限界だった。ソウマもクレストもマユも、血を奪われた結果、もう動かなかった。死んでしまった。自分が殺した。留めを刺した。もう終わりだ。ここの呪剣聖ではもうエスプラントに勝てるものはいない。この街は終わる。テストに吞まれる。あたしの、あたしのせいだ！ 「あたしは、戦いたくなんてなかった。誰かを助けたかっただけなのに」

ただ。誰かを救えれば、それでよかったのに。
「そうか」

冷めた声音。ひどく露骨に顔を歪めたその仕草は、ドクターのものではない　ユージンの表情で、彼は吐き捨てる。

「だったら呪剣聖になってんじゃねえよ」

ああ。

そうか。あたしは初めから、間違っていたのか。

鋭い刃が、ミドの喉元に触れ、その血管を引き裂き

「ッ！」

そして、ドクターが身を翻した。

年齢に合わない迅速な反応で上半身を引き、地面に手をついて宙返りする。着地ざま、振り撒いたアクセサリが積分され、彼の周りを守る鉄格子の壁になった。

すとな、とミドの前髪を何かが掠めた。それは、一本のナイフ

いや、ただの包丁だった。地面に突き刺さったそれを、なんとはなしにミドは包丁に目を落とす。柄にはカレキシとペンで書かれていた。彼女の家にある、ごく普通の調理用の包丁だった。

「申し訳ありません」

そんな言葉が放たれた。

何も感情の籠もっていない声だ。ざつ、と一人の少年が、ミドの前に直立した。佇立している。重心が一ミリもズレない、ゆらぎすら感じない、人形じみた立ち姿。

色褪せた髪、色の無い瞳。彼は今しがた投げた包丁を拾い上げ、持っていた包丁入れに挿して、ポケットに入れた。

「なん……で」

人形のような瞳が、ミドとドクターを交互に見る。

「狙いを外しました」

フラットが、ただ事実を語りながら立っていた。

なんで。なんで、ここに　いや、当然か。彼はあのドクターの聖徒なのだから。

「……………。なんだ。何かと思えば君か」

鉄格子を微分しなおし、ドクターが拍子抜けとばかりに剣を降ろ

した。剣先でひょいとミドを指し示す。

「ちようどいい。君、ミド・カレキシを殺せ」

「申し訳ありません、先生。私では、彼女は殺すことは出来ません」
即座の否定に、一瞬ドクターが首を傾げる。だが慣れているのか、そこまでの動揺はない。

「実力が足りないかと？ 安心しろ、今の彼女は無力だ。僕の教禍に侵されているから、テストに堕ちればその瞬間に微分されるしな」

「そうなのですか？ ミド」

す、とこれまた機械的な動作で、フラットはミドの前に屈みこむ。

「フラット、ト……」

ぼやけた視界に、端正だが特徴の無い顔が映る。こうしてみるとひどく温度の感じない表情だった。人間のものとは思えない。ミドの心が、連動してゆつくりと冷えて行く。

「なんだか、ひどく、どうでもよくなった。」

「うん。……いいよ。殺して、ください」

彼がためらわない人間であることは、さっき暴走した時に分かっている。

助けた 助けることが出来たと勝手に思い込んだ相手に殺されるのも、あたらしいのかもしれない。呪われたカレキシの家系らしいのかもしれない。それに、テストになってアイツに使われるよりは、ずっとマシだ。

「……ごめんね」

気付いたら、ミドの口からはそんな言葉が出ていた。フラットが、首を傾げる。

「助けて、あげられなくて」

あたしはここで死ぬ。でも、この子は、この先ずっと、あのドクターに使われるのだろう。ポンコツのまま、死にかけながら戦うのだろう。あのエスプレントのように、必要に応じて、命ぜられるまに。

「……………」

フラットは、沈黙する。この状況において尚、彼の身を案じる言葉を言うミドを、何も感じられない眼で見据えた。遠くから、ドクターの笑い飛ばす声が聞こえて来る。

「何を馬鹿な事を。ソレの居場所は僕の所にしかない。いや、そもそも居場所という概念を理解しているかどうかも怪しい物だ。……君は僕のものだ、そうだろう?」

「はい」

即座の肯定。ふい、とフラットはミドから視線を外して振り向く。
「ですが先生。少しばかり、質問したいことがあります。よろしいですか?」

「……なんだい? 何でも言うといい」

従順な様子に気を良くしたのか、ドクターが笑みを浮かべて腕を組む。

「先生。彼女を、殺すのですか?」

「当然だろう。君は落ちこぼれとはいえ流神クラスだ。君たちがクゾフィードの最重要機密であることくらい理解しているな」

「成程、了解しました」

フラットが頷く。

「先生。この街を消すと仰られましたが」

「これも言ったが、分室駐屯都市を一つ消したとなれば、クゾフィードへの我々のパフォーマンスとしては十分だろう?」

「成程、つまりイリナも死にますね。……エスぺラントはこれからどうするのですか?」

「ああ。テストとして使うしかないだろう。不幸な女だったな。あんな馬鹿な行為をしなければ、人のままで世界の頂点に立つことから出来ただろうに。同情はしないけれど」

「そうですか」

静かに、フラットは頷いた。くるりと、再びミドの傍にしゃがみ込む。

「……………」

「ぼやけた思考で、ミドはうすらと疑問を覚える。この子は、何を
しているのだろう。殺すのならさっさと殺せばいいのに。」

「ミド。貴方はそれでいいのですか？」

「何……、がッ、んあッ！」

「答えようとして。思考に凄まじいノイズが入る。身体が跳ねる。」

「む。テスト変異が最終段階に移行したか。離れる、十三番。危険
だ。……十三番？」

肩にあった聖石が完全に肉体の中に埋もれ、その力で周囲から集
め続けていた血液が、みるみる内にミドの皮膚を、身体を覆い尽く
していく。同時に青色の光も輝きを増すが、ミドの全身から出る力
の方がはるかに強い。

「ミド」

しかし、フラットはそれでも、もう一度ミドの名前を呼んだ。悶
えるミドの顔を、両手で固定した。勝手に跳ねたミドの右腕が、フ
ラットの頬を切り裂いた。

「や、逃げ、て……！」

押し潰されそうな意志を総動員して、必死に呻く。最後の最後の
記憶が、フラットを殺した記憶になるだなんて嫌だ。

「違う」

掛けられた言葉は、はい、でもいいえ、でも無かった。使い慣れ
ていない能動的な否定。フラットは静かにミドの目を見る。

「貴方が言うべきは 私に命ずるべきは、それではありません」
「訳が分からない。この状況で他になにをいえばいいというのか。
ミドには分からない。とてもじゃないが思いつかない。身体が別の
ものに変わっていく。精神が凌辱される。心が押し潰されていく。
感情が引き裂かれていく。」

痛いよ。

苦しいよ。

死にたくないよ。堕ちたくないよ。このまま終わるのは、悔しい

んだよ。

辛いよ。 辛いんだよ！

「うあ……！」

目の前にフラットの無感情な目。この期に及んで動揺の一つも見せない瞳。

それが、消えゆく意識の中で、変わりゆく感覚の中で。それだけが、

世界で唯一、確かな物に見えた。

少女は叫ぶ。

「フラット、助けて……！」

少年は答えた。

「はい」

そう言つて、彼は、

ミドの唇に、自らのそれを重ねた。

世界が止まった。

「……な？」

「ほう」

「ええ！」

その場にいた全ての人間の目が点になった。ドクターはもちろんだが、実は満身創痍の身体で隙を窺っていたソウマ、クレストもまた、予想だにしない彼の行為に間抜けな声を上げた。

無論、一番驚いたのは、当事者であるミドであつただろうが。

「……！？」

頬を鮮血でなく真っ赤に染める。引き離そうにも、大きく伸びた右腕は密着したフラットを掴むことが出来なかったし、片腕では力が上手く入らない。ぐぐぐ、としばらく力を込めるも、

「んっ！」

何かに酷く驚いてミドは目を見開くと、それっきり。ぐったりと

手先足先が脱力して、瞳が曖昧になり、されるがままになる。フラットは目を閉じているが、時々思い出したように顔と顔の角度を変え、ミドの顔を傾けたりした。細い指先がミドの後頭部に回り、髪を梳く。……何をしているのか、されているのかは当人のみぞ知るである。

だが、その内に？変化？が訪れ、誰かがそれに気付いた。

「これは……」

その場に湧き出していた光の、質が変わった。

まず、ミドの身体から放たれていた、血霞の赤色混じりの銀色の光が弱めていく。次いで、それに追いやられていた青色の光も、連鎖するようにその色を霧散させた。

何より、決定的な変化がひとつ。ソウマが、喜びと驚きの入り混じった声で、それを見た。

「ミドさんの姿が……元に戻っていく……！」

異形化していた右腕が、外装が砕け散るように崩れて落ちた。その下から、傷だらけでこそあるものの、元の細身の腕が除く。光が、風船が弾け飛ぶように消え去った。

同時に二人の周囲の地面を、血液が丸く振り撒かれて、赤く染めた。それは恐らく、ミドの呪剣の中に残っていた血液の残滓だった。未だに続いていた血液の集束も消える。

「何だ……ミドの、呪剣との契約が解除された？ ……いや、これは」

クレサトがさっぱり分からないなりに理解しようとする。そして。「ぷはっ」

そこで初めて、二人の唇が離れた、目尻に涙を溜めたミドが大きく息をつき、崩れた身体をフラットが抱き止める。彼は、上を向いて大口を開けていた。ただ、それはミドとは違い、空気を取り込む為ではない。

三人は見た。

上を向いた彼の舌の上に、丸い宝石があった。聖石。それは、

ミドの呪剣についていたはずの、ミドの体内に侵食していたはずの聖石、その本体だった。

フラットはそれを呑み込む　否、その聖石はフラットの肉体に、舌に、溶けるように一体化した。まるで、聖石が単位を吸収し強化される時のように。

「聖石の吸収及び抑制成功。これより契約に移行します」

フラットが呟き、そして今度は金色の魔法陣が、二人の周囲に立ち上る。その魔法陣は、呪剣聖にとっては身近な、特にソウマにとって、つい昨日作ったばかりのものである。

「願書だつて……！？　一体どこに呪剣があるんだよ！」

「……まさか、上書きしているというのか。ミドを墮とした呪剣との契約を」

「十三番ッ！」

唐突に、怒号が響いた。

声の主は、ドクター。ここここに至つてようやく、彼はフラットの行動が自身の制御下ないと気付いた。あまりにも遅い理解。だが無理も無い。ドクターにとってフラットは駒であり所有物であり、自由意思など想定すらしていない存在だったのだから。たかだか見失つてこの数日で、それが芽生えるなどと、誰が予想するものか。

男が、今まで一度も見せなかった憤怒の形相で剣を抜き、アクセサリーをいくつかまとめて引き千切つて、空に、二人の真上に放り投げる。

「君もか！　よりもよつて君までもが、僕を裏切るというのか！」

呪剣によつて物質に刻まれた術式が、逆回しの公式によつて相殺される。

「積分　？　家落とし？！」

それはあまりにもシンプルな技。単純で大雑把、適当で曖昧。それゆえに豪快極まりない攻撃教禍だった。術式そのものには極めて繊細に気を使うのに、他の所ではこだわりの無い、ドクターの理系呪剣聖としての性質をそのまま体現した一撃。

空気が弾き飛ばされる。空間が埋め尽くされる。文字通りの家、木と石と土と硝子と、その他これでもかというくらいに詰め込んだ純粋な質量が、五メートルほどの高さから、願書を展開した二人目がけて墜落する。

轟音。そして、破碎音。

巻き込まれたクレサトとソウマが、落下の衝撃を追い風にして吹っ飛ばされる。

舞い上がる土煙。今や彼らの居る場所は異界の様相を呈していた。ごく普通の街の大通りに、逆さまになって崩れた家が二つ分、道を埋め尽くしている。呪剣聖が関係しているとしてもなお、性質の悪い冗談のような光景。

「……馬鹿が　大馬鹿が！　失敗した分際で！　落ち零れの分際であがこうとするからこうなるのだ！」

家が崩れ切り、中から誰も出てこないことを確認したドクターが、それを見て高笑いした。錆び切った銅鑼を叩けばこんな音が出るのではないかという、あまりにも空虚な笑い声だった。

だが次の刹那。落とした家が、内側から吹っ飛んだ。

「ハッ　！？」

積分が間に合わず、咄嗟に腕で頭部を庇う。飛んでくる瓦礫の破片が身体を打つ。竜巻の如き際限ない暴風。

まるで、中で嵐でも起きたかのような爆発だった。落ちて来た高さよりもなお高く跳ねあがった家の柱が、まるで超高音のマグマにでも晒されたかのように瞬時に燃焼、焼却されて灰になった。噴火の如き途方も無い程の熱量。

竜巻。噴火。それらを同時に再現する正体不明の？熱風？は、金色の光をともなって、降ってきた家の構成素材を焼き払っていく。その煙の中から、一筋の光が飛び出した。金色の光を纏った、丁度人間二人分ほどの大きさの　フラットと、彼が横抱きにしたミド。それが宙空へと飛び出し、停止する。

「え、え、わあ！？」

いまさら意識を取り戻したミドが間抜けな声を上げる。当然だ、数々の人外能力を持つ呪剣聖であるが、空を飛んだ経験を持つ者は存外少ない。自らを抱き上げているフラットを見上げて、……そのせいで、ミドの驚きは更に増した。

「フラット、これって え、誰!？」

「ミド」

狼狽するミドを固く抱き締めながら、フラットは静かに言う。

「手を放さないで下さい。素肌同士が触れ合っていないと、私は十分に教禍を行使出来ません」

「え…… あ、はい……」

ミドは、間違いなくこのとき、その姿に見蕩れた。

風に煽られ舞うフラットの髪が、色褪せた灰色から金色へと変わっていく。焦点すら判然としないその瞳に、金色の瞳孔が生まれる。

「? 偏差領域内の大気における分子サイズを統一、及び分子間力を排除?」

まるで光の粉でも振り撒いているかのように、周囲に光が散っていく。フラットは無機質ながらもよく通る、力のある声で、詠唱を紡ぐ。

「? 凝固及び液化の可能性を削除。それを以てここに理想気体を展開し、限定空間内における指定の物理法則の完全掌握を開始する。

二人の識者は定義した。即ち 体積は圧力に反比例し、絶対温度に比例する、と?。 物理教禍【ボイル・シャルル】」

金色に染まった爪先から、金の光が漏れる。それに触れた木端が、瞬く間に焼却された。足元に輝く金の光は、人間二人分の重量を容易く宙に浮かしていた。

フラットは名乗る。彼には名前は無い。否、これまでの彼には、名前は無かった

なぜならば、流神クラスとしての? 銘? を持つのは、解刀容姿の彼だけだからだ。

「呪剣、
解刀。」

《理論武装・
ロジカルアームズ
フラットライナー
焼き払う者》
」

五時間目【枢学（すうがく）】（後書き）

教禍【枢学】すうがく

存在の中枢を操る教禍。数ある教禍の中でも最高の難易度を誇る。対象の持つ『意味』たとえば大きさ、堅さ、腕力、振動数、場合によっては思考や寿命までを認識、数値化し、それを術式によって様々な形に変換することが出来る。

その本質は思考速度の高速化であり、これを極めたもの（或いは極めうる素質を秘めるもの）は、戦術・戦略能力にも長けていることが多い。

六時間目【理架（りか）／物理（ぶつり）】

六時間目【理架・物理】

『大丈夫ですか？ わたしは、エスペラント。詠語教禍の澆神クラスです』

そんな言葉とともに、手が差し伸べられた。

ミドの目の前に、美しい少女がいた。腰まで伸ばした深紅の髪。それと同じ色の瞳は、差し出した手が取ってもらえるかどうかという不安と期待に揺れていた。あどけない微笑みは、少女らしい快活さと無邪気さを湛えている。しかしその白磁の肌を覆うのは、お洒落とは程遠い、ややゆったりとした武骨な薄青の服。

『いいえ。必要ありません』

答えようとして、自分の口から出たのはそんな言葉だった。否、それは自分の声では無い。

『戦闘実験は終了しました。このまましばらく倒れていれば疲労は回復します。よって、わざわざ貴方の手を借りてまで今立ち上がる必要はありません』

声こそ今よりもずっと高かったが、口調で分かる。フラットのものであった。そこまで理解して、うすらぼんやりと今の状況を感じ取る。

これは、つまり、フラットの記憶だ。

今しがた結ばれた契約を介して、彼が今思い浮かべていることが伝わっているのだ。

シーンが変わる。

子犬のようなテストの死体が目の前にあった。人工のテストもどきだろう、そういった技術があるのは知っている。そして視界が霞み、五感にノイズが走る。ストレスによる負荷限界だ。視界が傾き、無機質なタイル張りの床に正面から倒れた。

『……この程度の教禍行使で自滅とは。やはり失敗作なのはどうしようもないか』

そんな言葉が聞こえて、身体を裏返された。目を指で開かれ、ライトを当てられる。体つきは精悍だが、いささか煤けた印象を持つ白衣の青年だ。目を閉ざされ、暗闇の中。彼が手に持ったペンで何やらメモに書きつける音。続いて、彼は　ドクターは小さな声で呟いた。

『僕は……間違っていない。間違っていないんだ』

シーンが変わる。その度に、ミドの脳裏に情報が伝わっていく。彼らを洗神クラスとして完成させる為の過酷な実験は、フラットのみならず、エスプラント含む他の子供達にも大きな負担となっていて、そもそも不安定な洗神クラスの中に次々と落第者を生んでいた。

ストレスに耐えきれず廃人になるもの。戦闘実験の最中でテストに殺されるもの。教禍の力を制御できず、テストに堕ちるもの。当初は数十人いたはずの彼らは、フラットが声変わりを終える頃には、その三分の一ほどになっていた。その中でフラットが生き残れたのは、むしろ失敗作であると早々に判断されたが故だった。また、死んでいった実験体全てを含めても、彼が、彼だけが群を抜いて無感情だったことも関係しているかもしれない。

シーンが変わる。

研究所から少し離れた街の一角。幾つもの十字架が立ち並ぶ場所。そこに、エスプラントが立っていた。成長し、強くも儚げな美貌を湛えた彼女は、しかし赤い瞳をますます赤くして立ち竦んでいた。

『……また、人が死にました』

掠れているのになお、澄んだ水面のような声で、エスプラントが静かにそう切り出した。

『そうですか』

『……あなたは、無理はしてないですか？』

『ご安心を。最高傑作の貴方と違い、私は失敗作であり、そして、

その原因も何も既に先生方は把握しています。期待されていないので、無理する状況にそもそもなりえません」

『あなたは……呪剣に、近過ぎたんでしたっけ』

彼女は最高傑作だった。彼女の力は、基本的に不安定な流神クラスの中でも、極めて安定して優秀だった。そういう意味では、劣悪なレベルで安定していたフラットとは、よく似た存在ともいえた。

『はい。ドクターによれば私は、呪剣聖と契約しなければ十全な力を発揮できないそうです』

『……契約させてはくれないのですか？』

『何が起るか分からない以上、そんなことに貴重な呪剣候補生を浪費出来ないと。また仮に出来ても、誰かと触れ合いながら戦うなど、兵士として論外であるとの判断だそうです』

『ああ、確かに。それはそうかもですね。言葉だけなら、少し素敵ですけど』

誰かと手を繋ぎながら戦う姿を想像したのか、くすくすとエスぺラントは笑う。控えめではあったが、その微笑みは、一種現実離れた彼女の美貌と合わさって、とても魅力的だった。

『……でも、それなら、いつか、見つかるといいですね』

『何がですか？』

『あなたと契約してくれる人が。あなたの負荷を共に受けて、あなたの為に泣いてくれて、あなたの為に怒ってくれて、あなたの為に笑ってくれる、あなたを受け入れてくれる、そんなパートナー』

『先述したとおり、実験体としてそれが許されることはありません。貴方の言うことは、時折不可解です。』

『大丈夫です。信じて。きっと見つかります』

『何故、断言出来るのですか？』

フラットの問いに、少女は力強く笑った。

その内に秘めた哀しみや脆さを、強引に押し隠そうとしているような、そんな微笑みだった。

『だって私は、皆の《希望となる者》^{エスぺラント}ですから』

その笑顔は、ひどく自分の笑い方と似通っているように、ミドは思った。

「 エスペラント！ 裏切り者を殺せっ！ 殺しつくせ！」

ドクターの狂的な叫び声で、ミドは現実に戻された。

真正面に竜の顔がある。今までのように空間跳躍によって目の前に現れたものではなく、単純に、視点が同じ高さにあるというだけだ。竜の顔は黒く硬質で、真つ赤な光が中心線に入った切れ目を繋ぐように輝いている。禍々しく凶悪な姿。

それでもこうして見ると、そこに女性的な何かを感じ取ることができた。

「 って きゃ」

目の前が赤く光ったかと思うと、ぐるんと、視界が回る。縦回転しながら真下に落ちると、今しがた居た所にエスペラントの顎ががぶりと喰らいついていた。がぢいん、と歯の組み合わせる凄まじい音が鳴る。息をつく暇も無く、次は爪が転移してくる。下から掻き上げるように薙ぎ払われ、フラットがまた虚空を蹴る。瓦礫の上に着地し、追撃で降り降ろされた尻尾を避けて、燕のような軌道で空高くに跳ね上がった。ミドを抱えたままだ。

「 うわわっ！」

飛ぶ、というより、真下から突き上げられたような衝撃に、なりふり構っていられなくなったミドがフラットの首元にしがみつく。

飛び上がり様に発生した爆風が土煙を巻き上げ、フラットの熱風操作によりエスペラントを覆い隠した。

土煙の向こうでがじん、がじん、がじん、と歯が何度も虚空で打ち合わせられる音がする。だがほとんど家一軒分の灰と煙だ、そうそう晴れはしない。

「 自身の身体を移動させればいいというのに。……やはり、テストに堕ちたことで前よりも頭が悪くなっていますね」

「フ、フラット？」

恐る恐る、フラットを見上げて、問いかける。

「何でしょう」

「……助けて、くれたの？」

「ええ、そうなりますね。具体的には、貴方の体液を摂取することで願書を構築・契約。その過程で貴方の元々の呪剣との契約を上書きし、聖石を吸収させて頂くことで、堕ちたことを無かったことにさせて頂きました。貴方が完全にテスト化していないからこそ出来たことです」

「……どうして？」

ミドの疑問に、フラットは何故か首を傾げる。戦闘中のせいか、本当に態勢を崩さず目線も合わせず首だけを傾げるので、妙に滑稽な感じになっている。

「……そうですね。私には、理解出来ないですよ」

「？」

「貴方が、理由もなく私に便宜を図ってくれていた理由。先程も、結果的に見れば私は貴方を裏切ったと言ってもなんら過言ではないのに、私の心配をしていましたね」

「それは……私の為だから。私の為でしか無かったから」

ミドは気まづくなって、目を逸らす。

「誰かを助ければ、きつとそこが私の居場所になると思って……でも、そんな理由じゃ、本当は何も守れないって、救えないって分かっただけ。でも考えたくなくて、それで」

「またおかしいことを。貴方は私の命を救ったと言うのに」

「気負いも何も無く、ただ当たり前的事实を言うようにフラットはそう割り込んだ。」

「まるで理解出来ません。心、感情、そういった曖昧なものの正体。さる有志の方の言葉によって、どうやら私の中にもそれはあるらしいことは分かったのですが、さっぱりです」

その言葉に、ミドの表情が暗くなる。だが、フラットは更にこう

続けた。

「だから、学ばなければと思ったのですよ」

「……え？」

「知らないことは学ばなければ。……貴方の、そしてエスプラントの行動原理の全てを占めているその何かを。エスプラントは堕ちてしまった。あの竜の姿を見る度に、その偏差値を感じ取る度に、私の胸部には鈍いダメージが入ります。……苦しんでいる貴方を見たときも、同じものを覚えました。……知らないことは、理解しなければなりません。それが私自身のダメージに関わるのなら尚更です」土煙が晴れる。赤い光が周囲に灯る。出鱈目な範囲だ。その中でフラットの金光もまた輝いた。宙を跳ねる。眼下に竜の爪。フラットにしがみつく。赤い光が出鱈目に灯る。あらぬ方向へ飛ばされ、景色が入れ替わる。変ずる。進行方向に竜の顎が現れ、そこから離れたかと思えば逆に近づいていた。噛み砕かれる。

「む……」

「フラット！」

ギリギリでかわした。ただ、振り降ろされた顎にぶつかり、地面に落下する。勢いが金光に殺され、地面で受け身を取れた。それでもフラットの腕は堅く、ミドを手放さない。踏み降ろされる脚。かわす。衝撃に吹き飛ばされる。金光。再び空へ翔ける。赤光がそれに追いつき、回り込む。

「分からない。記憶と思考が綻びだらけだ。ミドとエスプラントはちつとも外見上の類似はない。なのにイメージすると重なってしまった。どういうわけなのか。こんなデータは、研究所においては一切取られなかった」

フラットは、淡々と、しかしこれまでにないほど饒舌に自らの心を表現していく。今の今まで最小限の言葉しか放たなかったことへの、反動のようにも思えた。

「ミド。貴方を死なせてはならない。私はそう思っています。よくよく思い出してみれば、研究所において、私はエスプラントに対し

て同様のことを思っていたような気がする。曖昧で模糊とした、記憶からの判断ですが」

ますます攻防の速度は増していく。フラットは宙を翔ける。

ボイル・シャルルの保存則。

それ自体は極めてオーソドックスな物理教稿で、熱と大気を支配する。端的に表現すれば、熱風を操る能力である。把握できる範囲の気体の、熱量、体積、圧力を操作出来る。

足元に起こした爆風に近い上昇気流を踏んでフラットは空を翔ける。先を読ませぬ、読まれた後でカタチを変える三次元軌道で、エスプラントの術式が、その攻撃がロックオンされること自体を巧みに防いでいる。

「貴方たち二人に対する私のアクションは極めて共通していました。エスプラントが私に声を掛けてくれた時、私の手を握ってくれた時、私の目の前で笑ってくれた時、私に同情して泣いてくれた時、私の胸はダメージではない熱さを感じました。そしてミドが私を助けてくれた時、私を受け入れると言ってくれた時、私と共にベンチで菓子を食べてくれた時、同じ熱さを感じました」

風を切る。宙で屈むも赤光に捕まり、上下左右を反転させられる。全力で空気を踏み締め地面へ飛び、やってきた爪を熱風で吹き飛ばす。地面を抉り土煙を巻き上げ、ターゲットを見失った竜の噛み砕きが、すんでのところでかわされる。フラットは自らに掛かる重力の方向で即座にそれを感じし、エスプラントの全身の凶刃から逃れる。

「逆にエスプラントが泣いてしまった時、実験の為に怪我や疲労をしている時、死んだ実験体の為に祈っている時、憔悴している時、私の胸ははつきりとダメージを訴えた。先程から竜に攻撃を受ける度、攻撃の結果に関わらず胸が苦しくなる。瞳が熱くなる。歯に力が籠もる。ボイルシャルルの術式は術者である私と契約者には熱を伝えない。なのになんだこの熱は。」

ミド。貴方に平手で打たれた時、私は同じような胸の痛みを覚え

た。傷付き堕ちかけているミドを見た時、私は同じ苦しさを覚えた。泣いている貴方を見た時、苦しくて自分が死ぬのではないかとすら誤解しかけた。助けてと貴方が言った時、私に理由をくれた時、ようやくその痛みが引いた　　っぐ！」

尻尾が背中を打った。二人は抱き合ったまま、地面に折り重なるように倒れる。腕の中でミドは震えた。何とかしようと思ったが、力が出ない。レッドブレードとの契約は解除されている今、彼女の身体能力は少女相応のものしか戻っていない。

「フラット！」

その時、視界の先、崩れた家の瓦礫の下で、誰かが動いた。

「　くあああっ！」

雄たけびを上げながら、度重なるフラット達の攻防の中で薄くなった瓦礫を吹き飛ばして立ち上がったのは、マユだった。血で塞がった片目を睨みながら、それでも力任せに、鉄扇を揮う。

無視していた対象からの不意打ちに、エスペラントは対応できなかった。エスペラントの左腕が、劣化と数多のピン針に晒される。

これで竜の凶器である両腕が塞がった。

「ぐっ……」

それで力を使い切ったのか、がくりとマユの足が崩れる。口元から血を吐き出し、瓦礫の海に再び沈んだ。エスペラントが悲鳴のような怒りの絶叫を上げる。マユを見て、その小さな身体を噛み砕こうと口を開く。

その口を、金色の剣が貫いた。

「　　ッ！？　」

形の無い刃は、竜の口腔内で、途方も無い熱量となってその内部の大気を爆散させた。エスペラントの口内にこびりついていた血が真っ赤に焦げて蒸発した。しかし今度は悲鳴ごと口内から溢れ出る熱風に焼かれ、竜がのたうち回る。その前方で、金の帯が空に舞い上がった。

「エスペラント。申し訳ありません。貴方は既に失われてしまった」

フラットは語る。ぞつとするほどの、冷たい声音だった。

吐き出すものを吐き出し切って、フラットは冷酷さを発揮する。温度が無いのではない。それは、純粋なマイナス。温度を持たなければありえない、確かな意志の産物だった。

「フラット！　だめえッ！」

あの夢の中の想いを思い出し、ミドは叫ぶ。

だが、遅い。間に合わない。フラットは既に、術式を展開している。

「　体積は圧力に反比例し、絶対温度に比例する」

轟、と瓦礫が舞い上がる。エスペラントの猛攻を避けたフラットは、上空で片手を掲げる。彼ら自身は熱によって害を与えられることはない。周囲に展開した瓦礫の、そのことごとくが激しく燃え上がり、一塊の巨大な炎になった。

「【ボイル・シャルル】の理論武装」

物陰に避難していたソウマやクレサト、どころかドクターまでもが、彼が発する教禍の、その莫大な出力に瞠目した。草木一本すら残さず焼き尽くすような圧倒的火力と、しかしそれでいて周囲には一切の延焼も起こさない、規格外の精密さの同居。

フラットライナー
まっさらにするもの。そう名付けられた彼が、生まれて初めて、その名の由来を証明する。

炎の嵐が、エスペラントに叩きつけられた。

「っ……！」

計算し尽くされた炎熱の暴風が、竜の姿を焼き尽くす。

強靱な竜の鱗は炭化して塵と化し　　ゆっくりと、エスペラントは、その身を地面に倒した。

「な　」

ドクターは絶句していた。まさか、落ち零れだと思っていたフラットライナーが。人間一人を抱えての戦闘など論外だと、分析され

正体が分かった時点で計画の外に置かれたはずの失敗作が。それがまさか、テスト化した最高傑作エスプラントを討伐するなどと。

「十三番、否 フラットライナー！ 貴様まで、私を、クゾフィードを裏切るのか！」

エスプラントは倒された。もはや、彼の手の中には駒は一つも残っていない。あの従順な、己の意志を持たなかったあの少年が、彼に逆らうことなどありえない。

そのはずだったのに。フラットライナーは、はつきりと首を振る。

「いいえ。先に約束を破ったのは、そちらです」

「な、に……！？」

「覚えていらつしやるか分かりませんが。実験体の処理場で、貴方は、私たちの幸せの為に、私たちを作ったと言った」

「……それが、どうした！ 貴様の今の力なら、幸せを得るには十分だろう！ クゾフィードに来れば、いくらでも望むものを得られる！」

「いいえ、違います。 先程貴方は、エスプラントのことを指し

て、『不幸な女だ』と言った。これは明確な契約違反です」

「！」

先程の問答。フラットライナーの意味の分からない問いかけ。今更ながらに理解する。あれは、確認だったのか。彼が裏切る為の。

それに気付かなかったドクターを見下すように、フラットライナーは言い放つ。

「今までありがとうございます、ドクター。私は、貴方の実剣体から、ミド・カレキシの呪剣になります」

「ッ！」

その言葉は、ドクターの我慢の限界を、容易く吹っ切った。

「ふざ、けるなアッ！」

コールドキュレーターを地に突き刺す。薄い刃は、しかしそれだけで周囲の地面に亀裂を走らせる。その亀裂から、間欠泉のように真つ青な光が吹き出した。目から、耳から血が流れ出る。全盛期の

偏差値の行使は、年老いてブランクの有る彼には重すぎる負荷を与える。

だが、こうでもしなければ彼は何も得られない。何としてでも、実験体は連れ帰る。

「まだだっ！ まだ、計算外にはまだ早いッ！ 解刀容姿最大配天、微分崩帝識起動！ コールドキュレーター！ 微に入り糞を穿て！」

亀裂が、碎ける。

伸び上がったのは、さながら大樹の如き、蒼光で出来た無数の刃だった。それらは一息で枝分かれし加速し、上空のフラットライナー達目がけて突き進む。

「【ボイル・シャルル】」

それに対し、フラットライナーはミド・カレキシを抱えたまま、むしろ立ち向かうように加速した。斜め下へ、半ば落下するように疾駆する。真っ先に伸びて来た枝を紙一重のところかわし、ドクター目がけて熱風を放つ。

爆風で一瞬、両者の視界が遮られる。

「馬鹿が！」

だが次の一瞬で、それは吹き散らされ 否、細かく裁断されるように縮小されて、数多のアクセサリーとなって地に落ちる。あるうことかこの大樹は、フラットライナーの放つ熱風 否、その術式自体を微分し、分散してしまった。

「失敗作に！ 落ち零れに！ 落第者の置き土産なんぞに このエリートたる僕が！ かつて天才と呼ばれた この天才の？ 俺？ が、劣るかアアアアア！」

フラットライナーが制御を崩したのか落下する。最初の一本二本こそ身体を捻るようにして避けたものの、やがて枝の一本がその開いた腹部に突き刺さる。

「かつ」

枝分かれする。彼の背後にあった枝から新たな枝が伸び、背後か

らも串刺しにする。執拗にその身体を貫いていく。やがて、モズのはやにえの状態を越え、剣山のようになったフラットライナーの身体が脱力し、青い光が、視認が難しくなるまで輝きを放つ。

安堵と喜悦に震えようとしたところで、はたと気付く。

フラットライナーを微分した。
フラットライナー、だけを？

真上を見上げる。

赤月を背負つて、ミドが跳んでいた。何の為にか、誰の為にか。その瞳には涙が溜まり、滴が空気抵抗を受けて背後に、空に流れていく。感情任せの特攻。後先考えない非論理的行為。それはフラットライナーの判断では導き出せないもので、フラットライナーの思考回路では思いつかないもので、すなわちそれは、フラットライナーの持ち得ない力だった。

微分の枝は。全てをフラットライナーの補縛に費やしていて、もう間に合わない。もはや、叫ぶことすら出来ない。

「ぶっ飛べええええええええええつ！」

しは健在である。

六時間目【理架（りか）／物理（ぶつり）】（後書き）

教禍【理架】

自然の力を操る教禍、

架学（物質の変化を司る教禍）と物理（教禍の介在しない自然現象を司る）に分類される。

『物理』

教禍の介在しない状態での法則を支配し、それに準じ“てそれ以外の全ての現実”を変質させる。

フラットの司る法則は「ボイル・シャルル」。

『気体の体積は圧力に反比例し、絶対温度に比例する』という法則に従い、支配範囲の気体の体積・圧力・温度を自在に変化させることができる。

現時点では熱風を操る能力でしかないが、将来的には冷気の発生や圧縮空気による打撃・盾なども可能となる、非常に柔軟性の高い法則である。

【放課後】

【放課後】

『被害状況は？』

「防壁が全体的にやや摩耗しましたが破られた所は一カ所もありません。家屋数軒が中破、また城の狙撃台は大破しました。一般兵は五名が死亡、二十二人が重軽傷。呪剣聖は死亡者なし、聖物治療後も療養中なのが数名。堕ちた者は最終的には無し。また今回に限っては、街中へのテスト発生及びそれに対する二次的な騒ぎで、一般市民十七人が軽傷です」

『ふむ。結果としてはいつも通り、というところかな。聖物治療は一般人から優先させるべきだね。燐理によるメンタルケアも怠らないように。最終的な評価を下すのはいつだって彼らだからね』

「はい」

『定期テストは終了。また、先の事件の首謀者の一人《エスペラント》は討伐。ユージン・クドー改め、元クゾフィード帝国第七位呪剣聖エング・クラハシ 研究実験都市レーヴァにおける通称ドクターを捕縛、及びその呪剣コード・キュレーターは回収。……やれやれ、随分とまあ暴れてくれたね』

クスノキ城執務室に溜息が響く。いや、正確には執務室にいる二人にのみ、その音は届いている。

顔の半分がまだ包帯で覆われているマユと、にこにこ普段の笑みを取り戻してはいるが、若干顔色の悪いシーナ。机の上には端末が置かれており、そこから通信相手の姿が、うすらぼんやりとした銅の胸像のように浮いている。

着心地が悪いのか、頻繁に包帯の位置を直しながら、不機嫌そうにマユは答えた。

「先に暴れたのはあちらだ。文句ならこれからいくらでもクゾフィ

「ダに言えるだろう」

「副室長に同意します、聖徒会長。これは明確な侵犯行為です、今こそクゾフィードー強時代を覆して、我々ルークハイスが」

『戦犯になれと言うのかい、君たちは』

シンプルな言葉に、二人の言葉が詰まる。ともに今回の事件で大きく被害を負った二人だったが、その感情すらも抑えつける何かが、通信相手　ルークハイス皇国聖徒会長にはあった。

『今回被害にあったのは君たちだけだということを忘れちゃあいけないよ。その、何だっけ？　特進　』

「流神クラスです、聖徒会長」

慌てたようにシーナが訂正する。流石にいつもの軽薄な態度は自重していた。

『そうそれ。神を流すか、よくもまあ大それた名前をつけたもんだ。クゾフィードーらしいと言えばクゾフィードーらしいけれど。……エスペラントの死体は、フラットライナーが燃やしてしまったんだっけ。ああーあ、もったいない事をしたねえ。取っておけば相当に良い研究材料になっただろうに』

なんとということもなく、そんなおぞましいことを呟く。冗談なのか本気なのか、同じく聖徒会であるシーナですら、その真意を知ることが難しい。

「あの状況で、フラットライナー達まで敵に回す気にはなれませんでした」

『そうだね。うん、まあ流石にこれに関して今更どうのこの言おうとは思わないよ』

ふふふ、と笑い声。どうやら冗談だったらしい。……もともと、こっちの言葉が冗談という可能性もあるが。

「……彼らに対する今回の措置は、かなりの特例のように思いましたが」

『いいや、正直なところ結構無理を通したけれど、それでも保留に近い。お抱えの浪人にするって言う意見もあったんだけど、せっか

く面白そうな駒を得たんだ、いつでも盤面に指せるようにしておかなければ、意味が無いだろ？　そう言ってね」

「……それで通じたんですか？」

『うんにやー、通じんかったから仕方なく土下座して恫喝したよ』

「……なんだか今、本来決して交わらないはずの二つの単語が連続して聞こえたのですが」

『だとしたらそれは君の想像力の欠如だね。まだまだ現役の呪剣聖が、上層部みたいに頭が固くなったたらおしまいだよ』

しれつと言う。幻代聞による立体幻影は決して精度が高い物ではないが、マユたちには聖徒会長の茶目つ氣たつぷり（本人談）の邪悪微笑が見える気がした。

『ま、今回ばかりはお疲れさまだったね、二人も。ゆっくり休み給え。まだしばらくは、こっちの領分だよ』

ホログラムでひらひらと手を振って、ゆっくりとその映像が不鮮明になっていく。

『元より、呪剣戦争の本質は他人相手の相対評価。だが、それを普段から意識してる呪剣聖がいるかと言えば、これが意外に少ない。』

我々が、理想穹へと至るには、まだまだ時間が掛かるようだ』

やがて、声も映像も、かすれてノイズばかりになる。通信が切られたのだろう。マユもまた、展開していた鉄扇を閉じる。瞬く間に元の短刀の姿になったそれを、鞘に仕舞った。

「今、彼らは？」

「……恐らくは、エスプレントの墓にいます」

「そうか。これからだな」

「え？」

「呪剣戦争は激化する」

短刀を珍しく、くるくると手遊びのように回しながら、マユは呟いた。

「いや、あるいは最初から、激化する定めにあるのかもしれない。呪剣戦争というものは」

ミドは手を合わせ、静かに祈った。

呪剣聖の共同墓地。その内の一つ、原型の留めぬほど破壊されたり、身内がいなかったりした呪剣聖達の収められる名も無き墓の前。空は蒼く、澄み渡っている。定期テストの爪痕など、跡型も無いように思える。

ただ、それでも今回の事件で間違いなく人は死に、間違いなく人は殺された。そしてその原因は、少なからず、自分にある。

「何やら良からぬことを考えてはいませんか、ミド」

頭上から、そんな声が掛かった。

こうして聞く分には、色の無い、平坦な声であることには変わらない。だが今は、その中にある確かなものが、分かる気がした。

「……わかる？」

「貴方の感情のいくらかは、契約を介してこちらに伝わってきます。……これはなんですか？ 貴方は今、何をしていますのですか？」

「これは、お墓だよ。死んだ人の居場所。死んだ人を想って、祈る場所」

「死者には感覚も意識もありません。死者の為に出来ることなど、何も無いではありませんか？」

「たとえ、それでも。何かをしたいと思った人が作るの」

「……成程。研究所にも、そういうえば似たようなものがあつたような気がします。あれは、処理場ではなかったのですね。……だとすれば、ドクターは」

「……フラット？」

「いいえ。不確かなことです。断定できませんし、そうしても詮無きことです」

そう言って、フラットはミドの隣に、寸分たがわぬ同じ姿勢で屈みこむ。手を合わせて、目を閉じる。金髪は色が抜けて元に戻っていた。今の彼の姿は、ごく普通の青年だ。

「これで、どうすればいいのですか？」

「……そうだね。あの人の、生前のことを思い出してあげれば、いいんじゃないかな」

ミドは目を閉じる。そして思い出す。

竜の姿が消えた時、その中に、少女がいた。

呪剣聖であり呪剣であり聖石である、流神クラス。彼らがテストに堕ちる時、生前そのままの姿が核となるのだという。

全身が半ばほど炭化し、美しかったであろう深紅の髪もざんばらに千切れていた少女。

エスペラントには、かろうじて意識があった。

虚ろな瞳が、フラットを見上げた。

「……誰か、そこに、いるんですか？」

ゆらゆらと震えながら掲げられた手を、フラットは握った。きつと今の彼女の腕は、自重すら耐えられないだろうと判断したからだった。

「はい」

自らを殺した相手を前に、華のように少女は笑う。花の散るよう
に少女は笑う。

「ああ……やっぱり。私を殺してくれるのは、きっと貴方だと思っ
ていました」

「そうですか」

「……他のみんなは、大丈夫ですか」

「分かりません。ですが、流神クラス最弱だった私がこうして生き
残っていることを前向きにとらえれば、皆さん無事なのではないで
しょうか」

フラットの、慰めと言っているかわからないような慰めは、
しかし的確に少女に伝わったらしい。氣遣われたと分かった少女は、

気遣われたことそれ自体に喜んだようだった。

「……ありがとう。それと、もう一つ」

「何でしょう」

「あなたの、後ろの女の子は、どうして泣いているんですか？」

少女が、不思議そうに聞く。

フラットの後ろで、ミドは必死に涙を堪えていた。堪えようとして堪え切れず、嗚咽を上げて、顔を抑えていた。何故かは分からない。ただ、質問に応える余裕はなかった。代わりに、フラットが答える。

「……彼女はミド・カレキシ。私のパートナーです」

パートナー、という言葉に、少女は驚いたらしかった。ほんの少し言葉と呼吸を切り、そして我がことのように嬉しそうに微笑む。

「そっか。見つかったんですね。貴方の、代わりに泣いてくれる人」

「はい、どうやらそのようです。……エスペラント」

フラットの手に力が籠もる。無意識の動作だった。彼は現状を冷静に分析する。その結果を口に出す。彼はそういうやり方しか出来ない。

「ミドが泣いています。私の代わりに。ということは、私は今、悲しい、と思っている。恐らく、原因は貴方を殺したからです。殺したのは私なのに、私の胸は酷く痛む」

「……そう、ですか」

少女が眼を伏せる。

「申し訳ありません、エスペラント。貴方を助けられなくて。そして、ありがとうございます」

フラットが、静かに、言葉の内容とはおおよそかけ離れた口調で言う。

「私はたぶん、貴方に救われました。今までも、これからも、ずっと」

「……あ、はは」

エスペラントは、《希望となる者》は、小さな声で答えた。

「誰かの希望になれたなら。」

その言葉で、十分です」

そして少女は息を引き取り、フラットはその場で彼女を火葬した。炎熱系統の呪剣聖である彼に火は効果を為さない。最期の一筋が天に昇るまで、彼はエスペラントの手を握っていた。

「っ」

思い出したらまた泣きそうになって、慌ててミドは目元を擦る。

彼らのことも、流神クラスのこと、ミドはほとんど何も知らない。少しばかり記憶を覗いただけだ。あれだけで、彼らの過ごした時間を経験しきれたわけもない。

それでも、彼らの別れは、あんなに短時間で済ませて良いものではないと思った。テストに堕ちた片方をもう片方が殺すなんていう残酷な終わり方で良いものではないはずなのだと、そう思った。

「私の当面の目的は、同胞の発見と保護です。彼らを見届けること、彼らが幸せになったかどうかを確かめること。それがエスペラントの願いです。構いませんか」

「うん……。フラット。あたしも、それに付き合っよ」

涙を拭って、少女は言う。

かつて全ての理由を失い、感情に頼らなければ生きていけなかった少女はもういない。今は確固たる理由を、目的を見せてくれる彼がいる。

「あたしの想いは、いつだって君の為にあるから」

「そうですか」

目を閉じたまま、静かに少年は応える。

かつて全ての感情を奪われ、知ることすら許されなかった少年は、ようやく変わる機会を得た。今は彼の代わりに想ってくれる人が、感情を与えてくれる彼女がいる。

「ならば私の理由は、いかなる時も貴方の想いを支えます」

それは、一つの契約だった。

理由無き彼女と、感情無き彼。彼が彼女に理由を与え、彼女が彼に想いを与える。想いと理由を以て、二人は二人で力を揮う。

「じゃあ、行こうか」

そして立ち上がる。立ち上がった、振り返ること無く、墓場を後にする。

二人が着ているのは、揃いの聖服。二人一組の呪剣聖。それが、彼らに与えられた特例だった。

ミドは、隣を歩くフラットの手を握る。フラットが不思議そうにミドの顔を見ると、少女は頬を微かに染めて照れくさそうに笑う。

「……ミド？」

「へへー。……駄目かな？」

「解刀する必要があるということ、敵が近くにいますか？」

「……………」

返ってきた言葉に、ミドは呆れたように息をつく。

「……君には教えることが山ほどありますね」

「そうですね。私には、貴方に教えることが山ほどあります」

フラットが鸚鵡返しに言う。ミドははっとして、フラットを見上げる。首を傾げるフラットに、満面の笑みを向けた。

「そうだね。私も、君に教えることが山ほどあると思う！」

一人で解けない試練でも、難問でも、誰か頼るべき人に教われればきつと解けるようになる。

それもまた、呪剣戦争を生き抜くための秘訣なのだから。

【放課後】（後書き）

と、いうわけで完結。読了ありがとうございました。

そもそもは大学受験勉強が嫌で嫌で仕方なかったころに思いついた案。

趣味に走って能力バトルだの斬魄刀だのをモチーフにしてやった感じ。

仮にキャッチコピーをつけるなら、

『あつ！ この問題、呪剣戦争の秘訣に出て来た問題だ！』

とかかな。酷いね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8399y/>

呪剣戦争の秘訣

2011年11月27日22時58分発行